
華国神記
火焔の宴
九条菜月
Natsuki Kujo



華国神記

火焔の宴

九条菜月
Natsuki Kujo



口絵・挿画　由貴海里

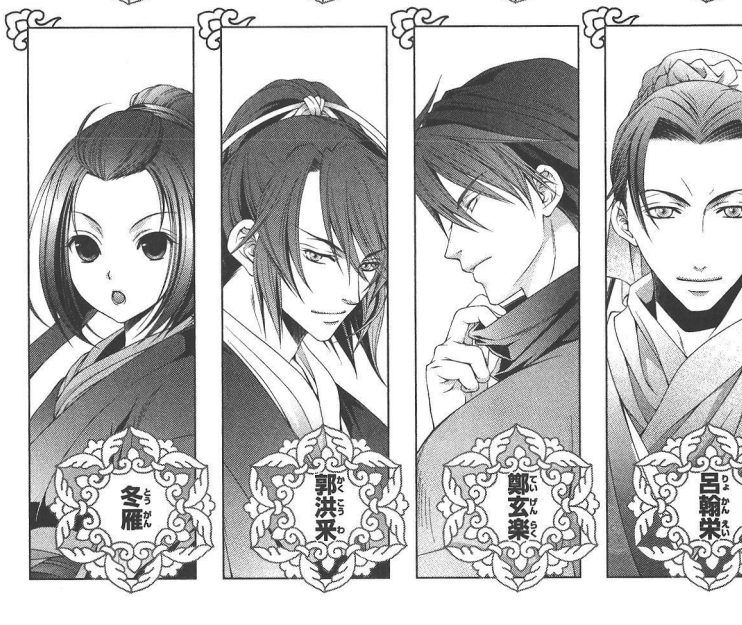
目次

序章……9
第一章……29
第二章……51
第三章……76
第四章……103
第五章……119
第六章……139
第七章……157
第八章……176
第九章……192
終章……211
あとがき……216

登場人物紹介




杜文重
姬子慮
花興奏
韓楊秀


冬雁
郭洪平
鄭玄樂
呂翰栄



李沸儀（りふつぎ）
現皇帝

親子

愛妾

黎貴妃（れいきひ）
皇帝の寵姫

親子

李博焚（りはくたく）
太子

腹違いの兄弟

祥安（しょうあん）

支援

花興奏（かこうそう）（57歳）
中書令（中書省の最高責任者）
太子派の筆頭

韓楊秀（かんようしゅう）（27歳）
禁軍右飛龍将軍

親友

鄭玄楽（ていげんらく）（27歳）
春蘭から真名を奪った男

幼馴染み

真名を奪う

追っている

上司

部下

伯父

姪

腹違いの兄弟

花翠蓮（かすいれん）（15歳）

花玉翠（かぎょくすい）（14歳）
花家の美人姉妹

鄭仲望（ていちゅうぼう）（24歳）
元禁軍の気術兵。
現在は中書省書物補修係

李春蘭（りしゅんらん）
（300歳／主人公）
小さな邑の元守り神。
真名を奪われ人間に戻る

家主

居候

雇い主

家僕

呂翰栄（りょかんえい）（？歳）
謎の男

高友寧（こうゆうねい）（13歳）

孫啓璋（そんけいしょう）（13歳）
鄭家につかえる少年たち

姫子慮（きしりょ）（25歳）
龍乎虎慈軍隊長

仲間

杜文重（とぶんちょう）（23歳）
子慮の副官

龍乎（りゅうこ）

郭洪来（かくこうらい）（20歳）
気術士

仲間

兎天（うてん）（？歳）
鬼面で顔を覆う
組織の二番手

猩猩緋（しょうじょうひ）

淘蟬英（とうせんえい）
妓楼〈黄海楼〉の
女楼主

人物相関図

華国神記 火焔の宴



まだ夜も明け切らぬ早朝。湿り気を帯びた冷たい空気が、薄暗い廊下や、庭園に面する回廊を覆っていた。

そこを行き交う人の姿は少ない。動き出している者は、下働きの下女か、料理人ぐらいだ。しばらくすれば、妃妾たちの世話をする女官や、宦官が加わり賑やかになるのだが、今は静寂に支配されている。

ここは、華安の北に位置する宮殿の、その奥に位置する禁裏——後宮と呼ばれる場所である。中央に黄玉宮を置き、東西南北には四夫人に与えられる離宮が鎮座する。皇后の宮は別に設けられ、より厳しい警備体制が敷かれていた。

その黄玉宮の一画。朱塗りの回廊を足音を殺して歩く、一人の少年がいた。

寒さに背筋を丸め、大きな瞳を忙しなくさ迷わせている。歳は十を過ぎたくらいか。幼さが残る顔には心細さが滲み出ていた。

少年は姓を陶といった。

十五日ほど前に、後宮へ宦官見習いとしてやってきたばかりだ。

陶は黄玉宮の一室で、同じ年頃の少年たち四人と寝起きを共にしていた。他の房にも似た年頃の者がいるが、全部で何人いるのか正確な人数はわからない。

しかし、農民の出は陶だけで、官吏や宦官の親戚筋であったり、商家の子であったりと、みな裕福な者ばかりであった。それ故か、誰が言い出したわけでもないが、面倒な仕事は陶に押しつけられるよう

になった。陶自身も、反発することができずに諾々と従ってしまう。

せめてもの救いは、同じ農村育ちの下女たちが優しく接してくれることだ。

指南役の宦官に気付かれないように仕事を手伝ってくれたり、内緒で食べ物をくれたり。彼女たちの優しさがなければ、陶の後宮での生活はもっと厳しいものになっていたに違いない。

「おはようございます」

厨房には、すでにあくせくと働く宦官や下女たちの姿があった。

「ああ、陶かい。ほら、これを持っていきな」

「ありがとうございます」

顔見知りの下女に声をかければ、いつものように桶と使い古された布を渡された。厨房の外にある井戸から水を汲み、零さないように桶を両手で抱える。小柄な陶にはそれだけでも重労働だ。

陶の朝の仕事は、黄玉宮の清掃である。本来は陶一人に課せられたものではないが、例の如く同じ境遇にいる少年たちに、理由をつけて押しつけられてしまったのだ。

彼らは親からなにか言い含められているのか、権力を持つ上位の宦官や、位の高い妃妾と接する仕事ばかりをやろうとする。それには、さすがの指南役も、うんざりとした表情を浮かべるほどだ。

宦官とは、科挙や軍の入隊以外で庶民が出世する唯一の手段である。皇帝や后妃、寵妃に重用されれば、権力を振るうことも可能だという。むろん審査はあるが、他の二つに比べれば合格率は遥かに高いらしい。

そのため、出世を狙う官僚や商人たちは、自分の子や親族の子らに、自宮と呼ばれる去勢施術をさせ、後宮へと送り込むのである。

だが、陶が宦官となった理由は、一般的なものとは異なっていた。

一つは口減らしのため。陶が育った邑は貧しく、

冬には必ず餓死者を出している。もう一つは、父にまとまった金が手に入ったため。それは自宮の施術をするに充分な額であった。そして、最後の一つは、陶の容貌が整っていたためである。

話を持ってきたのは、同じ邑で暮らす伯父だった。父の兄に当たる人物で、言葉巧みに宦官のよさを説いた。

陶の歳の離れた兄は強固に反対してくれた。母は父の手前なにも口にしなかったが、涙を堪えるように陶を見詰めていた。

結局、貧しさが父の背を後押しした。正式な宦官として取り立てられれば、給金も出る。陶だけでも貧しさから抜け出せるならばと、父は断腸の思いで決断を下した。

しかし、伯父の意図は別にあった。平たく言えば、父は伯父に騙されたのだ。

宦官の募集は定期的に行われているが、後宮が荒れていると噂される今、応募に集まる人数は定員に満たないのだという。

むろん、他の少年たちの親族のように権力志向の強い者もいる。彼らの中には今こそが好機と考える者もいるだろう。だが、それはほんの一握りだ。悪い噂の絶えない後宮に、博打のように一門の子弟を送り込む者は多くはない。

では、定員に満たない残りをどう補うのか。簡単なことだ。貧しい農村で、見目のいい男児を買えばいい。

伯父は父には告げずに、陶を人買いに売ったのだ。しかも施術の費用まで父に出させて。一般的に自宮の施術費用は、人買い側が持つ。伯父はそれをそのまま自分の懐へとしまっていた。気付いた時には、すでに手遅れだった。

施術を受けた時のことは、思い出したくもない。生涯忘れられない悪夢として、陶の心に刻まれた。そして、傷が癒えるのもそこそこに、陶は後宮に放り込まれたのである。

宦官見習いの少年たちは、そんな伯父によく似ていた。

権力を持つ者におもねり、甘い蜜のおこぼれに与ろうとする。それを忌避するが故に、陶は少年たちから自然と距離を置いていた。

出自のこともあり、今のところ陶の行動を不審に思うものはいなかった。むしろ、陶を自分たちよりも下に見ている少年たちは、それが当然だと認識しているようだ。

毎晩のように、房室では今日は誰と会っただの、皇帝陛下をお見かけしただのと、飽きることなく自慢話が繰り広げられている。陶がそこに混ざることはないが、寝たふりをしつつ、少年たちの話に耳を傾けてはいた。

よいことでも悪いことでも、人の話をよく聞きなさい、というのが父の口癖だった。そう聞かされて育った陶は、自然と他者の会話に耳を傾ける癖がついている。

そして、後宮での暮らしの中で、絶対に目立つようなことをしてはいけないよ、と助言してくれたのは年配の下女だった。

彼女には息子がいたが、数年前に陶と同じ歳で死んでしまったらしい。右も左もわからない陶に息子を重ねたのか、親身になって様々なことを教えてくれた。

彼女が語るには、皇帝陛下や后妃、寵妃の目に留まるためには、目立った存在でなければならない。だが、それは諸刃の剣なのだ、と。

新入りの宦官が、短期間で寵臣になりえた例はない。台頭する前に、上位の宦官たちによって排除されてしまうのだという。

その他にも、顔を合わせる度にここで生きていくための注意事項を覚え込まされた。宮廷や後宮についての知識に乏しい陶は、忠告の半分も理解できなかったが、ここがとても怖ろしいところなのだということは痛いほど理解できた。

とりあえず、今は与えられた仕事を黙々とこなすしかない。下女からは、色々なことを学びながら、後宮内の情勢をできる限り早く理解するようにと言われている。

妃妾や宦官の関係。そして、彼らの派閥。これは講義してくれる師を探した方がいいかもしれないね、と下女は言葉を足した。彼女に教わることはできないのだろうかとも思ったが、宦官見習いが身分の低い下女と会話すること自体、好ましいものではないそうだ。

ただ、あまりにも陶が不安げな顔をしていたのか、幾人か古株の宦官を教えてもらうことができた。少年たちの会話では、一度も名があがらなかった者たちである。

しかし、長く後宮にいるということは、それだけ上手くたちまわっている証拠でもある。その中から信用できる人物に師事し、後宮で生き抜く術を学ぼう。

決意を固めた陶は、仕事をしながら下女に教えてもらった宦官を観察するようにした。

それが六日前のことである。

朱塗りの回廊を掃除しながら考えを巡らせる。古株の宦官たちは、一人を除きみな誰かしらの派閥に属していた。おそらく、権力を持つ寵妃か寵臣におもねることが、生き残るための有効な手段なのだろう。

確かに、それは正しい。

後宮は邑と同じだ。力を持つ邑長がいて、その親族たちが大きな顔でのさばる。少しでもいい思いがしたいと、邑人たちは権力者におもねった。陶の伯父もその一人である。

しかし、自分のように秀でたものをなに一つ持たない宦官見習いなど、捨て石とされるどころか、見向きもしてもらえない。派閥に入りたいと言って、簡単に許されるわけがないのだ。

それと同時に、選択を誤れば共倒れとなる危険性

も孕んでいる。後宮では皇帝の寵こそがすべてで、それは移ろいやすい。より強固な地位を築いている者の下につければいいが、同じ考えを持つ者は他にも大勢いるだろう。

溜息が漏れる。どう考えても、ここで暮らしていけるとは思えない。支給された袍は、陶が今まで着ていたものとは比べものにならない上等な布地で作られていた。

毎日の食事も、少年たちは文句をつけるが、陶にとっては贅沢と思えるほどのものだ。寝床も清潔で、冬がきても寒さに凍えることはないだろう。

だが、陶の胸にあるのは強い郷愁の念であった。貧しくとも、あの慣れ親しんだ邑に帰りたい。それでも、込み上げてくる感情を陶は抑え込んだ。邑に戻ったら、両親に迷惑をかけることになる。家族が知らないだけで、陶は人買いに売られたのだ。家に戻れば、それを知った人買いに払った金を返せと迫られるだろう。

そんな金はどこを探してもないし、伯父の懐はもう軽くなっているはずだ。一介の農民が訴えたところで、役人たちがとり合ってくれるとも思えない。父や母は困るだろう。

また、金を工面しようにも、そう簡単に集められるわけがない。陶は再び後宮へと戻され、真実を知った家族が嘆き悲しむだけだ。

——自分の居る場所は、もうここ以外にはない。

床を拭く手を止め、唇を噛み締める。ここで生きると決めた以上、下女の忠告をできるだけ早めに実行しなければならない。

「……そろそろかな」

掃除の手を動かしながら、陶は周囲を窺った。何事もなければ、そろそろある人物がここを通る。名は陳安世。下女に教えられた宦官の一人だ。三十歳くらいの男で、背は低く体付きはふっくらとしている。

容姿はこれといって特筆すべきところはない。容

姿のよさが重んじられる後宮にあって異質だった。

――出自がよいのかもしれない。

限られた情報を吟味し、陶はそう結論付けた。陳だけが、どの派閥にも属していないというのも理由の一つである。

誰がどの派閥に属しているかは、同室の少年たちに訊ねると簡単にわかった。面倒な仕事を肩代わりすれば、こちらを疑うことなくなんでも教えてくれる。知識を披露できるのが楽しいのか、時には訊いていないことまで得意げに教えてくれた。

伯父に騙されたことで、多少なりとも他者に対する警戒心を持つようになった陶の目には、そんな少年たちが危うい存在に見えてならなかった。だが、忠告したところで、出自を侮っている陶の言葉など聞き入れるはずがない。逆に生意気だと怒らせてしまうだろう。

他人の心配をしている余裕はないのだが、と陶は嘆息した。少年たちと距離を置いてはいるが、痛い目にあってほしいわけではない。たとえ悪人だったとしても、人が虐げられる姿を見るのは嫌だった。

「はぁ……」

汚れた布を水に浸し、充分に揉んでから水気を絞る。今はまだいいが、冬になったら指先がかじかんで大変なことになりそうだ。

陶と違って、未だ夢の中でまどろんでいる少年たちは、冬になっても平気で水仕事を押しつけてくるだろう。辛い仕事はやりたくない。そんな単純な理由で。

腹立ちはある。だが、少年たちが取り入っている高位の宦官に、あることないことを吹き込まれたら困るのはこちらだ。

陶は、少年たちが体よく雑事を押しつけることのできる貴重な存在である。疎まれてはいるが、いなくなられて困るのは少年たちだ。

つまり、陶が余計な手出しをしなければ、追い出そうと画策されることもない。仕事を押しつけられ

るのは辛かったが、今は息を潜めて耐えるのが最善だ。

——今のうちに彼女たちともっと親しくなって、いざとなればあかぎれの薬を分けてもらおう。

そう心に決め、床や柱を丁寧に拭いていく。しばらくすると、建物の奥からこちらに歩いてくる人影が見えた。

すっ、すっ、と滑るような音だ。足音をたてるのは不作法なのだそうだ。最初は馴染めなかった歩き方も、指南役からみっちりと指導を受けたおかげで、今ではあまり意識せずに歩くことができる。

桶を持って脇に避け、蹲るように平伏する。通常ならば、妃妾かよほど高位の宦官でなければ、軽く目礼、もしくは拱手だけでいいのだが、清掃中は脇に控えて相手が通り過ぎるのを待たなければならない。

ちらりと視線をあげて確認すれば、陳安世の小柄な姿が視界に映った。下女に教えられた宦官たちを、毎日のように観察し続けた結果、もっとも陶の興味を引いたのは陳だ。

できれば話しかけてみたいと思っているが、その一歩がなかなか踏み出せない。

なによりも、自分はしがない宦官見習いだ。よほどのことがない限り、目上の者には自分から声をかけるものではないと、最初に教えられたものである。もっとも、積極性の塊である少年たちはその範疇にはないが。

なにか不自然ではなく、この人と接点を持つ方法はないものか。考えをまとめながら相手の気配を窺っていると、すぐ傍で足音が止まった。

思わず顔をあげれば、陳の観察するような眼差しとかち合う。

「——なるほど。ここ数日の視線の主は、君でしたか」

「えっ」

「私はこう見えて視線には敏感なんです。敵意では

ないようなので放置しておりましたが、まさかこんなに可愛らしい見習いさんだったとは。私の顔になにかついていましたか？　それとも、どこかで会ったことでも？」

「……」

気付かれていたのか。陶の背を冷たいものが伝った。心臓がうるさいくらい鳴って、息をするのも苦しい。

それでも、陳の顔に不快な色が現れていないことが救いだった。内心ではどう思っているかわからないが、話しかける機会が相手から与えられたのだ。腹を括るしかない。

「ご、ご不快に思われたら申しわけありません。私は先日、宦官見習いとして後宮にやってまいりました、陶と申します」

「知ってますよ。面倒なことばかり押しつけられている、かわいそうな見習いさんですよね」

「あ……」

「新しい子が入る度に、一人や二人は君と同じような目に遭うものです。良家の子息には単純な清掃すらも辛いらしく、たいてい家に逃げ帰るか、首を括ってしまいますが。君は農民の出ですから、意外と平気そうですね」

そこまで知られているのか、と思うと同時に、〝首を括る〟という物騒な言葉に、陶は生唾を呑み込んだ。下女たちから脅かし半分、忠告半分で聞いているが、陳の言葉にはより真実味があった。

陶の反応に、陳は意地の悪い笑みを浮かべ話を続ける。

「怖いですか？　自殺は珍しいことではありませんよ。それに新しい見習いの顔と名前、出自くらいは覚えています。脱落しそうな子は、すぐに忘れてしまいますがね」

「あ、あの！　よかったら、俺に教えてくれませんか！」

「言葉遣い」

「え、ええと……ご迷惑でなければ、私にご指導願えませんでしょうか？」

敬語とは縁のない環境で育っただけに、焦った拍子に地が出てしまった。指南役から叩き込まれた敬語を、陶はたどたどしいながらもなんとか言い切る。

「ふむ。なにを指導しろと？　指南役の宦官では足りないんですか」

「いえっ、違います。後宮の情勢を、おれ……私はなにも知らなくて。できれば、信頼できる方から学びたいんです」

「私が信頼できると？」

いささかわざとらしくはあったが、陳は驚くように目を瞠った。

確かに、いきなりそのようなことを言われても納得はできないだろう。ここで快く引き受けてくれるような人でないから、陳に指南役を頼みたいのだ。陶は言葉を選ぶように口を開いた。機嫌を損ねてしまえばお終いだ。

「陳様はどの派閥にも属しておられません」

「私以外にもいますよ」

「はい。ですが、私はあなたを見ていて、あなたに指導してほしいと思いました」

すべての宦官を観察したわけではない。陶が観察していたのは、下女に教えられた古株の者たちだけだ。

だが、その中でも陳の行動は実に奇妙なものであった。陶が観察を始めてすぐのことである。とある妃妾の膳に毒が混入された。

それは命を奪うほどのものではなかったが、妃妾は激しい嘔吐を繰り返したという。後宮内の犯罪を取り締まるのは、宮官と呼ばれる宦官である。陳は毒を盛られた妃妾の配膳にかかわったことから、宮官から取り調べを受けた。

犯人として、被害者と犬猿の仲と有名な妃妾の名があがり、その妃妾付きの侍女の荷物から、混ぜら

れたと思しき毒草が発見された。それが動かぬ証拠となりかけたのだが、事態は一変した。

被害者である妃妾付きの侍女が、犯人として捕らえられたのだ。

彼女の部屋の近くで、雑草に紛れるようにして毒草も栽培されていた。そして、毒草が盛られた日の配膳には、捕らえられた侍女も携わっていた。加害者と目されていた侍女の持ち物に毒草を紛れ込ませて、罪を擦りつけようとしたのだろう。

捕らえられた侍女はあっさりと自供した。主の八つ当たりに耐えられなかったのだという。

毒草の種は、本来は薬草として用いられるもので、後宮に出入りする商人に、煎じて飲むためだと言って注文したそうだ。

庭に植えた種が芽吹くまでに殺意が薄れることを祈ったが、主からの扱いは酷いもので我慢がならなかった。少しくらい苦しめばいいと、つい膳に毒となる根を混ぜたのだという。

それが自分で思った以上の大事となり、怖ろしくなって敵対関係にある妃妾の侍女に罪を擦りつけた——。

この一件は担当宮官の手柄となったらしい。だが、毒を盛られた妃妾と侍女の関係、その侍女が商人から買い入れた品物の中身など、それとなく匂わせた人物は別にいた。すべて陳が尋問を受けた際に、述べた証言に含まれていたのだ。

敵対していた妃妾に向いていた宮官の目を、毒を盛られた側の侍女へと向けさせた。もしも、それが意図的に行われたものだとしたら。

宮官に自分の考えとして推論を述べれば、事件を解決に導いたことで褒賞をもらえたかもしれない。それが叶わなくても、宮官に名を売るきっかけとなったはずだ。

陳のとった行動は、担当の宮官に手柄を譲ったようなものである。

目立つことを回避したのでは、というのが陶の推

測だ。頭が切れることを知られたくなかったと考えれば、陳の行動にも納得がいく。

ならば、なぜ担当の宮官に助言を与えたのかが不思議だった。敵対していた妃妾は無実の罪を被せられることになるが、陳に被害が及ぶわけではない。下手にかかわるより黙っていた方が安全だ。

陳の行動の一部にわからない部分はあるが、ひっそりした身の処し方こそが自分に必要だと、陶は思ったのだ。

「私を観察していたと？」

「も、申しわけありません！」

不快にさせてしまったのでは、と陶は慌てながら弁解した。

「ずっと見ていたわけではありません。噂に聞いたものがほとんどです」

情報源は下働きの下女たちなのだが、それは言わない方がいいだろう。彼女たちの日常は同じことの繰り返しだ。噂話は唯一の楽しみである。

故に、わざわざなにがあったのか訊ねなくても、下女たちの会話に耳をそばだてているだけで事足りる。あとは見聞きした情報から、自分なりの推論を立てればいい。

「私は偉くなりたいわけじゃありません。後宮の隅でひっそりと生きていければ、それでいいんです。でも、そのためには色々なことを学ばなければなりません」

そう告げたあと、陶は顔を俯かせた。

「私はご存じの通り、貧しい邑の出です。親しくなってもなんの益もありません。だから、指南役も必要以上のことを語らず、同じ見習いの子たちからは面倒な仕事を押しつけられます。今までは人の会話や噂話から情報は得ていましたが、それだけでは足りないんです」

右も左もわからない。迷子のようなものだと思う。いつまで待っても誰も迎えにきてくれないと知っているから、陶は自力で生きていく道を選んだのだ。

「あなたにとっては、面倒なだけかもしれません。私にできることならなんでもします。だからどうか、私の師となっていただけませんか」

必死に紡いだ言葉は、相手に届いただろうか。面倒事はごめんだと切り捨てられるかもしれない。それも覚悟はしている。だめだと断られても、機を見て何度かお願いするつもりだ。あまりしつこいとここから追い出されてしまうかもしれないので、数回が限度ではあるが。

お願いします、と頭を下げれば、小さな溜息が聞こえてきた。

「まあ、君はそこそこに賢い子のようですし、教えること自体は苦にもならないと思います。ですがねぇ……」

「……だめですか？」

「ああ、そんな目で見られたら断り辛いじゃないですか」

ならば、承諾してもらうために、もっと見詰めなければ。縋るように見上げれば、今度は盛大な溜息が返ってきた。

「やれやれですね。私がなぜ渋っているかわかりますか？」

「ええと……」

益がない、というのはすでに自分の口から述べている。面倒だから、というのも同じだ。おそらく、その他の理由があるのだろう。

「……私と親しくすると、変に勘繰られるから、でしょうか」

「もっと詳しく」

「ええと、私に恩を売っても意味がないことくらい、他の方もわかっています。でも、これまでずっと一人で行動してきたあなたが私の面倒を見ることを、疑問に思う方が出てくるかもしれない。目立つことを嫌うあなたにとって、好ましくない事態なのではありませんか？」

陶に優しくしてくれたのは、出自の同じ下女たち

だけだった。今まで接触のあった宦官は、誰もが義務的な会話のみで、必要がなければ存在すら無視されるほどである。

そんな立場の宦官見習いの子供に目を掛けていれば、目立って当然だ。もしも陶が陳の立場だったとすれば、迷うことなく断っただろう。

「正解です。あと付け加えるとすれば、私のお相手だという噂が出るかもしれませんね。後宮では珍しいことではありませんが、私には今まで一度も浮いた話はなかった。そういう点でも目立ってしまうかもしれませんねぇ」

「えっ！」

思わず声をあげてしまったあとに、慌てて周囲を見回した陶は、誰の姿もないことに胸を撫で下ろした。想像もしていなかった言葉に、陶は言葉を詰まらせる。

「それは、その、困りますね……」

「でしょう？　君が私に師事するなら、ちゃんとした理由が必要なんですよ」

「ううん……」

親族である、という手段は使えないだろう。陶の出自はみなの知るところである。陳の不利益となることはできない。

「……こっそりと会う、というのはだめでしょうか？」

「見つかったら一巻の終わりですね。恋人たちの逢引を目撃したと、面白おかしく脚色されるでしょう。目立つことに変わりはありません」

悩んだ末の苦肉の策を却下され、陶は肩を落とした。このままでは、それを理由に断られてしまう。どうすれば、と頭を悩ませていると、ほどなくして諦めたような声が響いた。

「……やれやれ。面倒事は本当に嫌いなんですけどねぇ」

「？」

「師となることは勘弁してくださいね。ですが……

質問には答えてあげましょう」
「質問、ですか？」
陳の意外な申し出に、陶は首を傾げた。質問といっても、いったいなにを訊けばいいのだろうか。困惑する陶に、陳は頷いた。
「ええ。君はいつも一人で掃除をしていますからね。それを利用しましょう。ただし、私も仕事がありますので、時間は限られます。質問は一つだけ。私はそれに答えを返します」
陶は目を見開いた。師事することはできなかったが、それは自分が望んだ関係に近い。あまりの嬉しさに、声が上擦りそうになった。
「よろしいんですかっ？」
「君が言い出したことでしょう。上司の愚痴を延々と聞かされるよりは、遥かに有意義ですよ」
「あ、ありがとうございます！」
「その代わり、条件があります。私との関係を他言しないこと。これは当然ですね。あと――君が得た情報を、私にも教えてください」
「えっ、でも、私より陳様の方がここにお詳しいのでは？」
陶が得られる情報は、下女たちの間で交わされる噂話か、同室の少年たちからもたらされるものくらいだ。陳の興味を引くとは思えない。
「私の情報網にも限度はあるんですよ。すべてを網羅しているわけではありません」
やや呆れたような声音に、陶は羞恥に頬を染めた。いつの間にか、陳を過大評価してしまっていたらしい。
「私は、あくまでも長くここに居続けているだけです。その分、様々なことを見聞きしていますが、特別な権力を持っているわけではありません。むしろ、高位の方々の指先一つでここから追い出されてしまう立場です。ですから、あまり私に期待しないように。君が失敗したところで、庇ってはあげられませんからね」

「はい」

もちろん、陶もそこまでは望んでいない。自分にわざわざ時間を割いてもらえるのだ、不満を言ったら罰が当たるだろう。

「では、質問を一つ受けましょう」

「え、今ですか？」

「せっかくの機会です。むだにしてはもったいないですよ」

正論である。わからないことはたくさんあるが、できるなら早急に学ばなければならない分野が好ましいだろう。

だが、質問は一つだけ。それも、あまり時間をかけることはできない。

「……では、お訊ねします。絶対に近付いてはいけない派閥を教えてください」

少年たちの話から、どのような派閥があるのか、また、誰が中心となっているのかは知っていた。しかし、どの勢力が一番権力を持っているのか、どの勢力がもっとも過激なのか。

そういったことを会話の端々から窺い知ることは難しい。

「二つあります。一つは、張元法という若い宦官を中心とした派閥です。彼は寵臣であることと、出自のよさを鼻にかけ、気に入らない者を情け容赦なく切り捨てます。事実、彼の命令で排斥された宦官や妃妾は少なくありません。後宮では、そこが一番大きな派閥です。ただ、規模が大きな分、いまひとつ統率が取れていません。内々のごたごたに巻き込まれたくなかったら、できるだけ距離を置いた方がいいでしょう」

「はい」

陶は神妙な顔で頷いた。告げられる内容を、忘れないように必死で頭に叩き込む。

「もう一つは四夫人の一人、黎貴妃の派閥です。こちらは規模こそ張元法にやや劣りますが、後宮の外にも強い人脈を持っています。なによりも、公子が

生まれたことが大きいですね。太子を排斥し、我が子を次期皇帝にと野心を燃やしているようです。継嗣問題に巻き込まれたくなければ、けっして近付かないことですね」

「わかりました」

「では、私からの質問です。君はどこから情報を集めているのですか？」

一瞬、陶は答えを躊躇ったが、正直に答えることにした。それを理由に見捨てられたら意味がない。

「……下働きの人たちと、同室の子たちからです」

前者は曖昧にぼかし、後者ははっきりと述べた。下女たちは人数も多く、誰がどの噂を口にしていたのか調べることは難しい。

陳がなにを思って情報源について訊いてきたのかは不明だが、訊ねたところで答えは返ってこないだろう。質問は一つだけ。そう決まっているのだから。

「ああ、女性は噂が好きですからね。でも、そこから情報を集められるのは君くらいですよ。私には絶対にむりですね」

「え？」

「彼女たちは宦官を警戒して、私たちの気配がするとすぐに会話を止めてしまいます。君は見習いで、出自も彼女たちに近いものがありますからね。警戒され難いんでしょう」

「そうですか……」

確かに、下女たちが噂話に興じているのは、周囲に宦官がいない時だけだ。

たとえ悪気のない噂話でも、それが誰かの耳に入って処罰される恐れもある。ささいな失敗が、自分の首を絞めかねない場所なのだ。

「まあ、それも今のうちだけですよ。見習いの期間が終われば、君も宦官の一人として警戒されるでしょう」

「……はい」

下女たちが自分に優しいのは、後宮に来たばかりの見習いで出自が低いからだ。

人買いに売られてきたことも、薄々気付いているかもしれない。それ以外に、農民の子がここに来る理由はないのだから。

だが、陶が様々なことを学び、正式な宦官として働くようになれば、彼女たちはそれまでのように気を許してはくれないだろう。

寂しくはあるが、それもしかたのないことだと陶は思うことにした。

「さて、私はそろそろ行きます。次からは陳ではなく、安世と呼んでください」

「それならば、私も青乎、と」

邑では、〝青〟と呼ばれていたが、もうその名で呼ぶ者はいない。「わかりました」と頷いた陳は、ふとなにかを思い出したように遠い眼差しを浮かべた。

「本当に、張元法本人とその派閥には気をつけてくださいね。近付かなければいい、というわけではありませんよ。少し前の話ですが、声の美しさから陛下に気に入られた若い宦官がいました。歳はあなたより四歳ほど上でしたか。控え目で陛下の寵を誇らず、平穏を望んでいるように見えました。ですが、それを嫉んだ元法殿によって、後宮から追い出されてしまったんです。その際、二度と声が出せないようにとのどを裂かれたそうですよ」

「そんな……」

「その後、彼がどうなったかは知りません。ただ、君と同じ〝青〟を表す字を、名に持っていたことを思い出しまして」

ここでは珍しいことではありませんよ、とそれだけを告げ、陳は去って行った。

茫然としていた陶は、我に返り、慌てて掃除に取りかかる。そう長い間、会話をしていたわけではないが、仕事が遅れれば指南役に小言をもらうことになる。

いつもより必死になって床を拭き、次の仕事に取りかかるべく桶を両腕で抱えあげた。とりあえず、

下女の助言通り、古株の宦官に色々なことを教えてもらえることになった。

先ほど教えられたことを、絶対に忘れないように反芻する。房室に戻ったら、今まで以上に少年たちの会話に耳を澄まそう。自分の身の回りで、二つの派閥に入っている者がいないかどうか探らなければならない。

それと、明日の質問も。

一日一回と制限されてしまったので、よく考えてから訊ねなくてはいけない。陳がいつまで陶に付き合ってくれるかわからない状況では、一問も無駄にはできなかった。

「――よし、頑張るぞ」

陶は自分に言い聞かせるように、力強く呟いた。

人生はなにが起こるかわからない。畑を耕して一生を終えるか、下男としてどこかに奉公するかのどちらかだと思っていた。でも、一つの出会いが陶の将来を変えた。

陶が出会ったのは、真っ白な大虎に乗った少女だった。容姿までは覚えていない。虎に驚き、すぐに気絶してしまったからだ。

目覚めた時には、少女の姿はどこにもなかった。白昼夢かとも思ったが、陶は自分の姿を見て愕然とした。兄のお下がりの短服が、少女が着ていた白い袍に替わっていたからだ。

陶を捜しに来た両親は、それを聞いて、神様の仕業だと言った。

貧しさを哀れんだ神様が、施しをくださったのだ、と。実際、陶に残された袍は上等な布で作られており、換金するとかなりの額を手に入れることができた。

しかし、それ故に陶の未来は狂った。大金に目が眩んだ伯父によって、人買いに売られてしまったのだ。

きっかけとなった神様を恨む気持ちはない。

悪いのは伯父であり、神様は施しをくれただけな

のだ。

いずれ正式な官官になって給金を溜めたら、屋敷を買って家族を華安に呼ぼう。一緒に暮らすことはできないかもしれないが、両親にはできるだけ楽をさせてあげたい。むろん、伯父は邑に残すつもりだ。伯父がしたことを告げれば、誰も反対はしないだろう。

――そのためには、なにがなんでもここで生き残らなければ。

新たな決意を胸に、陶は歩き出したのだった。



真っ青な空に、弔いの煙が昇っていた。

肉体を離れた魂は、どこへと向かうのだろうか。それは誰も知り得ない。確かめる術がないからだ。神として崇められた存在であっても、魂の行きつく先を見通すことはできなかった。

「春蘭」

振り返ると、鄭仲望の姿があった。初めて会った時よりも、幾許か痩せただろうか。年齢は二十四と聞いているが、妙に老成しているせいかそれよりも年上に見える。長い髪を後ろで束ね、動き易い藍色の短服を着ていた。

整った顔には、こちらを心配するような色が見て取れる。

対する李春蘭は、淡い桃色の上衣に膝まで隠れる腰裙を巻き、その中に上と同じ色の下衣を穿いていた。襦裙と呼ばれる女性用の衣だ。髪は結い上げ、巾で包まれている。

春蘭の手には白い花束が握られていた。鄭家の庭先に咲いていたものだ。一輪では寂しいそれも、束にすれば見られるものになる。

それを、花街の奥、細い脇道を突き当たりまで行ったところにある社に供えた。

妓女たちが年に二度、供物を持って拝みにくる場所である。神気は感じられないが、社の下には大きな地脈が通っていた。もしかしたら、昔はここにも小さな守り神がいたのかもしれない。

「外に出るなら声をかけてくれ」

「忙しそうだったからな。なに、私には白桃がいる。危険な目には遭わぬ」

「そういう問題じゃない。姿が見えないと心配するだろう」

肩をすくめた仲望は春蘭の隣に並び、供えられた花を見た。

「……庭に咲いていた花だな」

「昨日、啓璋に頼んだら、咲いているのを好きなだけ持っていけと言われた。この辺りには、花は咲いていないから」

啓璋は、鄭家に仕える家僕の少年だ。春蘭が摘んだ花をきれいに束ね、長持ちするようにと、切り口に水を含ませた布を巻いてくれた。

「そうか」

黄海楼の楼主、淘蟬英が死んで五日が経った。流行り病で死んだため遺体は火葬され、内々だけで葬儀が行われた。

楼主の他にも妓女が一人と、年嵩の下男が二人、犠牲となった。

だがそれは、けっして少なくない犠牲者を出した花街において驚くべき数字であった。事前に貯えられた薬と、疫の兆候が現れたと同時に医師を手配できたことが、犠牲者の数を最小限に留めた。しかし、その代償は楼主の死という重いもので、黄海楼でも未だ哀しみに暮れている者は多い。

春蘭もまた、蟬英を助けられなかったという悔恨を抱え続けていた。故人を思う度に胸がひどく苦しい。涙が零れそうになり、意味もなく喚き散らしたくなる。

こんな感情は知らない。春蘭はそもそも人であった期間が短かった。十二年。その間に、親しい人の死に触れたことはない。

両親は健在で、邑で亡くなる者はいても、顔しか知らないような相手ばかりだった。そして、春蘭は大切な者を失うという感情がどういうものか、一度も経験することなく守り神となった。

神であった時も、人の生死を気にしたことはなかった。命あるものは、いつか必ず死ぬ。ただそれが

早いか遅いかの違いで、誰の死にも気を止めることなく過ごした。

元の姿に戻った時も、守り神であるという意識が強く、肉体は人であっても、思考は神であった時のままだと——そう思っていた。

現実は違った。

初めは確かに守り神であった時に近かった。だが、様々な人と出会い、知らず肉体と共に封じていた心を取り戻していたようだ。

生きるが故に、喜び、怒り、哀しみ、楽しむ。自身の心を占めるこの感情は、蟬英の死を哀しむ思いと、助けられなかった無力な自分への怒りによって織りなされているのだろう。

「……春蘭。妓楼に戻ろう」

体を抱えあげられ、仲望の腕に座らされた。落ちないように首にしがみつけば、ほんの少しだけささくれた気持ちが慰められる気がした。

黄海楼は格式の高い妓楼として名を馳せている。名妓揃いというだけでなく、目の肥えた客を楽しませるように、回廊や房室といった内装の隅々にまで気が配られていた。

客も一流で、官吏、商人、文化人など、その道では名の通った者たちが足繁く通うことでも広く知られていた。

しかし、疫が猛威を振るった楼内には、少し前までの華やかさは見られない。失ったものがあまりにも大きいのだ。

誰の胸にも暗い影が落ち、それが楼内に重苦しい雰囲気を漂わせている。

「あ、春蘭。外に行ってたの？」

仲望に抱えられたまま振り向けば、質素な山吹色の襦裙を着た魏祥琳が立っていた。水を張った桶を持ち、上衣の袖をじゃまにならないようにたすきで縛っている。年は十三。妓女見習いとして黄海楼

で暮らす少女だ。一時は疫に罹り臥せっていたが、今は働けるまでに回復していた。

祥琳は愛敬のある顔立ちに、心配げな表情を浮かべた。

「ねぇ、春蘭。今日も朝餉を食べなかったって、厨房の人に聞いたけど。体調が悪いの？」

「……食べなかったわけではない。少しだけ口に入れた」

ぴくり、と仲望の肩が揺れた。知られたくない人物に聞かれてしまい、春蘭は内心で溜息をつく。

「昨日の夜だって、少ししか食べてなかったのに。朝はちゃんと食べるって言ったの、春蘭は忘れちゃった？」

「……忘れてはおらぬ」

「本当に？」

「ああ」

食欲がないのだと言っても、祥琳は許してはくれないだろう。

だが、なにを食べても味がよくわからず、のどに詰まってしまうのだ。できるだけ口にしようとは心掛けているのだが、いざとなると少し箸をつけただけで食欲が失せてしまう。

祥琳に心配をかけないために、朝はわざと食事を別にとったのだが、まさか厨房の者たちに見られていたとは思わなかった。

「じゃあ、お昼はちゃんと食べるよね」

「……うむ」

「私は用事があって一緒にはとれないけど……仲望様、代わりによろしくお願いしますね？」

「わかった」

祥琳は手強い。監視者がいるとなると、適当にすますこともできない。

「じゃあ、私はこれで」

祥琳が向かう先には、同じ年頃の少女たちがいた。祥琳が駆け寄るのを待って、移動し始める。なにを話しているのかはわからないが、相槌を打つように



頷く祥琳の顔は楽しそうだ。

見習いの中でも、楼主から特に才能を見込まれていた祥琳は、それ故に少女たちから距離を置かれていた。だが、黄海楼が危機に瀕したことでその距離も縮まったらしい。共に行動する姿をよく見かけるようになった。

「……ところで仲望。そろそろ下ろしてもらえるとありがたいのだが」

「こっちの方が速い。ところで、あまり食べてないというのは本当なのか？」

「食欲が普段よりないだけだ。ちゃんとそれなりには口にしている」

春蘭は妓楼を手伝うべく、居候している鄭家にたまに戻っても、寝泊まりや食事はすべてこちらですませていた。よって、仲望が春蘭の体調に気付くはずもない。

「道理で軽くなるわけだ……」

「食べていると言っただろう」

「だめだ。これからは、以前と同じくらいの量を食べてもらうからな」

「むう」

反論を許さぬ強い口調に、春蘭も黙るしかない。仲望にしがみつきながら、小さく溜息をついた。

ここ数日——正確に言えば五日前から、仲望の態度ががらりと変わった。

今までの仲望は何事にも消極的で、口調ものんびりとしていた。春蘭がどこでなにをしようとも気にも留めず、我関せずといった態度を貫いていたように思う。

しかし、今はまるで過保護な親のようだ。鄭家で寝起きはしているが、日が昇れば黄海楼に顔を出し、四六時中、春蘭について回る。春蘭の居場所を常に把握し、姿が見えなくなると先ほどのように捜し回るのである。

ただくっついているだけならばじゃまだと追い返すこともできるのだが、仲望はいつの間にか妓楼の

者たちの信を得ていた。

面倒な帳簿の整理や計算のしかたなどを、頼まれる度に助言したり、禁軍に所属していたことを聞きつけた門番に剣の指導をしたりと、春蘭が気付かぬうちに重宝がられているようだ。

それまでは、鄭家の屋敷の日当たりのよい房室で、だらだらしていた印象が強いだけに、今の姿に戸惑いを感じずにはいられない。

いったいなにが仲望を変えてしまったのか。春蘭は首を捻らずにはいられなかった。

「ところで、当分はうちに戻らないつもりか？　啓璋と友寧が心配していたぞ」

「たまには戻る。それはそうと、その口調はなんとかならぬのか？」

「どういう意味だ？」

「……以前と、かなり違うではないか」

華安の守り神に会うために、龍天山へ登った時も同じように訊いてみた。

昔の喋り方に戻った、と言っていたが、あれは一時的なものではなかったのか。

「ああ……どうも、戻ってしまったみたいだな」

「子供の頃にか？」

「いや。禁軍を辞すまでは、こんな感じだった。春蘭は嫌いか？」

「慣れないだけだ。好き嫌いの問題ではない。啓璋や友寧はなにも言わぬのか？」

「……」

なぜか、沈黙が流れた。春蘭はしがみついていた手を緩め、すぐ傍にある仲望の顔を見る。すると、あまり感情を表に出さない仲望が、珍しく困惑したように目をさ迷わせていた。

「……どうりで、二人から訝しげな目で見られるわけだ」

「なんだ、ぬしは気付いてなかったのか」

「らしいな」

無意識のうちに、昔の口調が定着していたという

ことか。しかし、そうなった原因にまったく心当たりがない。

じっと見詰めていると、仲望は居心地が悪そうに春蘭と目を合わせた。

「屋敷に戻らないのは妓楼の手伝いをしたいからか？　それとも……兄のことか？」

兄、と言われ、春蘭の手に力が籠もった。

意識した途端、耳の奥にあの時の声が響く気がする。

春蘭は龍天山で守り神を助けるべく、危険を承知で元の姿へ戻った。目的は達したが、真名を呼ばれ意識を奪われそうになった。それを引き戻してくれたのが、仲望である。

しかし、その一瞬の出来事により、春蘭は居場所を知られることになった。春蘭から真名を奪った、仲望の兄、鄭玄楽に――。

「どちらもだ。私は蟬英を助けられなかった。だから、せめて妓楼の復興を手助けしたいと思う。玄楽のことは……」

春蘭は言葉を濁した。春蘭の居場所を知った今、玄楽は間違いなく華安にやってくるだろう。救いは春蘭がどこにいるか、特定できないことだ。玄楽は華安を虱潰しに捜索しなければならない。

それでも、真名を奪った相手が近くにいるかもしれないと思うと、春蘭の心はけっして穏やかではなかった。

「玄楽が傍にくれば、白桃が気配に気付く。問題なのは、あやつが気術兵だということだ」

施術により玉を体内に埋め込み、地脈を流れる気を利用して肉体を強化した者を気術兵と呼ぶ。施術の成功率は低いが、気術兵となれば身分に関係なく軍で重用されるとあって、専門医の許を訪ねる者は少なくないという。

玄楽もまた、禁軍に所属していた過去を持ち、気術兵として名を馳せていた。

「策を弄さねば白桃では勝てぬ」

白桃とは、春蘭に隷属する神獣である。玄楽に真名を奪われた際、白桃は春蘭を連れて逃げるだけで精一杯だった。その時は、なぜ神獣が人間に勝てないのか疑問だったが、気術兵の存在を知った春蘭は考えを改めた。

「己の死を偽ったのだ、あやつが生家に近寄るとは思えぬ。だが、用心に越したことはない。できるだけ近付かぬようにするつもりだ」

春蘭は守り神となる前、水神盤という占具を使った占を得意としていた。占が示した位置にあったのが、鄭家の屋敷である。

おそらく、このまま鄭家に居続ければ、いずれ玄楽と相対することになるのだろう。しかし、今のままでは玄楽に太刀打ちできないのも事実。なんらかの策を考えなければならない。

「……俺を頼ってはくれないのか？」

ぽつりと告げられた言葉に、春蘭は顔をあげる。しかし、仲望の顔を見る前に、床に下ろされてしまった。

気付けば、そこは高位の妓女部屋が並ぶ一画である。

「月儀殿が春蘭を呼んでいた。入るといい」

背を押され、先ほどの言葉を聞き直すことはできなかった。

目の前には、朱色の格子で作られた扉がある。ちょうど春蘭の頭上付近に、枝にとまる鳥の絵が彫られていた。他の室も、それぞれ違った絵が彫刻されている。

「春蘭だ。入ってもよいか？」

中から女性の声で返答があった。扉を開けようと手を伸ばす前に、それは内側から開かれた。

「――遅い！」

開口一番に投げられた言葉に、春蘭は苦笑した。戸口に立っていたのは、二十歳前後の美女だ。艶のある髪を簡素に結い上げ、服は動き易さを重視した緋色の襦裙を着ている。化粧けはなく、以前の彼女

を知る者はその変貌振りに驚くだろう。
名は呂紅燕。黄海楼でも屈指の名妓である。
「すまぬ。少し外に出ていた」
「あなた、何度言ったらわかるの？　今はどこも治安が悪いのよ。一人で歩いていたら、攫ってくださいと言ってるようなものだわ」
「なに、すぐそこだ」
「妓楼の近くでも、だめなものはだめなのよ。どうしても行きたいなら、門番に声をかけなさい。どうせ暇を持て余してるから」
「……次はそうしよう」
口調は刺々しいが、春蘭を心配してくれていることに変わりはない。こちらが折れなければ、説教は延々と続くだろう。
「紅燕。春蘭も反省してるし、そのくらいにしておきなよ」
助け舟を出したのは、樊月儀である。二十代後半の美女で、化粧けがないのは紅燕と同じだが、こちらは匂い立つような色香が漂っている。しかし、若葉色の襦裙にたすきをかけ、帳簿と向き合う様はとても妓女とは思えない。
円座に腰を下ろした月儀は、小難しい表情で筆を取っていた。
「いつまでも立ってないで、こっちにおいで。あ、鄭の旦那もどうぞ」
手招きされ、春蘭は月儀の傍に座った。室内は高級な調度品が隅に寄せられ、代わりに大量の帳簿とそれを載せる座卓が置かれている。また、室内には沈香ではなく墨の匂いが漂っていた。
「忙しいところ悪いね」
「いや、気にするな。月儀は帳簿を見直していたのか？」
「今まで蟬英姐さんに任せ切りだったから……色々と把握しなきゃいけないのさ」
月儀の表情が、痛みを堪えるように歪んだ。蟬英とは長い年月を共にしてきたのだ。哀しみも、春蘭

とは比べものにならないくらい深いだろう。

現在、黄海楼は月儀を代理の楼主に立て、再開に向けて動きだしている。といっても、未だ床についている者もおり、以前のように戻るにはまだ時が必要だ。

ただ、黄海楼の者たちは哀しみに浸りながらも、前へ進もうとしている。生きていくためには、立ち止まってはいられないのだ。

「紅燕が手伝ってくれるからねぇ。文字の読み書きも算術も得意だから、かなり助かってるよ。私は算術が苦手でさ」

からり、と笑った月儀に、紅燕はなんといっていいのかわからないという風に視線を逸らした。耳が赤いのは照れているからではないか。

「紅燕は、もう動いてもよいのか？」

疫に罹った紅燕は、数日前まで床に臥せっていた。治ったとはいえ、以前から比べれば体の線も細くなり、顔色もあまりいいようには思えない。本当は大人しく休んでいた方がいいのだろう。

だが、本人は腕組み し不本意だと言わんばかりに春蘭を睨みつける。

「いつまでも病人扱いされちゃ困るわ。この通り、もう一人で動き回れるわよ」

「――って、言われてね。もう少し休んでてもいいのにねぇ」

困ったように溜息をつく月儀に、紅燕は一つ大きく咳払いした。

「さっさと本題に入りましょう」

「そうだね」

帳簿を座卓に置き、月儀は春蘭と向かい合うように体をずらした。

「実はね、お金がないのよ」

「……率直すぎるぞ」

「だって、こんな時に言葉を飾ってなどいられないだろう？」

「それはそうだが……そんなに儲かっていなかった

のか？」

占師として黄海楼で働いていた春蘭は、一度だけ給金を受け取ったことがある。それを鄭家の家僕である少年たちに渡したところ、予想以上の額に愕然とされた。

そこから推測するに、かなり儲けているものと思っていたのだが、違ったのだろうか。

「うちの売り上げは、花街の妓楼でも五本の指に入るだろうね。でも、今回の騒ぎでかなりの額を費やしてしまったのよ。まあ、それは薬や医者を手配した蝉英姐さんに感謝しなきゃならないことなんだけどねぇ。当分は平気でも、穀物や野菜の値も多少だけど上がってるし、うちはすぐに店を開けられるわけじゃない。なにより、しばらくは客も花街に寄りつかないだろう？」

「ふむ。確かに、大変だな」

「そこで、よ！」

紅燕がいきなり声をあげた。顔を向ければ、得意げな笑みが向けられる。

「花街に来ていただけないのなら、宴会に呼んでいただこうと考えたのよ」

「ほう」

妓女たちは、他所の宴会の席に呼ばれることがあった。

酒を注ぐだけでなく、楽や舞を披露したり、詩を吟じたりと、酒宴に花を添えるのである。

「幸い、名の知れてる妓女たちは、疫に罹らなかった者が多いわ。だから、馴染みの客へ、宴会に呼んでもらえるように文を書かせているの」

「なるほど。だが、妓女を呼ぶのはかなり金がかかるのではないか？」

妓楼に足を運び金を落とすのと、わざわざ屋敷に呼ぶのでは額が違うと聞く。黄海楼ほど格式の高い妓楼の妓女を呼ぶのならば、相当の出費を覚悟しなければならないだろう。

「こんな時こそ、女の涙がものをいうのよ。宴に呼

んでほしいとは書かずに、客が好んでいた詩を写すの。そして、末尾あたりに水滴を落とし、涙で滲んだように見せれば完璧よ」

「……なるほど」

どうやら、妓女の間では常套手段のようだ。視線を横に向ければ、珍しく仲望が複雑そうな表情を浮かべていた。

「だが、それと私になんの関係があるのだ？」

「あなた、翰栄様と親しいでしょう。あの方にも声をかけてほしいのよ」

「翰栄に？」

「あの方ほど羽振りのいい客も珍しいわよ。ふらりとやってきては、いつも楼主を指名するなんて翰栄様くらいだわ」

呂翰栄、というのがその客の名である。年齢は二十代後半かそこらで、あまり特徴のない容貌をしている。

しかし、存在感がないわけではなく、なにかと人目を引く客ではあった。

「しかし……」

「私からもお願いするわ。あの方の馴染みは蟬英姐さんだけなのよ。春蘭とは元から面識があったみたいだし、蟬英姐さんが忙しい時は代わりによく呼ばれていたでしょう？」

「だが、あれは宴会なんぞ開くような男ではないぞ」

翰栄はとある茶房の一室に間借りしていた。詳しいことはなにも聞いていないが、お世辞にも裕福そうには見えなかった。

だからこそ、黄海楼で上客として扱われているのが不思議でならない。

「だったら、また足を運んでもらえるように、それとなくお願いするのよ。あんな上客をみすみす他の妓楼に持っていかれるわけにはいかないわ。いいわね！」

闘志を燃やす紅燕に、春蘭は顔を引き攣らせなが

ら頷いた。
「わかった。なるべく早めに……仲望？」
視線を感じ横を向けば、なぜか不機嫌な気配を漂わせている仲望と目が合った。
「どうかしたのか？」
「……別に」
すぐに目を逸らされ、春蘭は首を傾げる。
月儀と紅燕は、なぜか意味ありげな顔で笑っていた。
「では、私は仕事に戻るぞ」
今は猫の手も借りたいほど忙しい。妓女たちも下働きの者に混じり、炊事や洗濯を行っている。春蘭は妓女見習いの少女たちと共に、病人の世話を行っていた。
「翰栄様のこと、忘れないようにね！」
「うむ」
春蘭が頷いたところで、廊下から男性の声が聞こえた。
「失礼します。こちらに、春蘭がいると聞いたのですが」
「ああ、いるよ。入りな」
室内に顔を見せたのは、短服を着た青年だった。袖から覗く腕は枯れ木のように細く、頬や眼窩も落ち窪んでいる。悪い病を患っているような風体だ。それでも、初めて会った時よりはだいぶ見られるようになった。
あまりにもやつれ過ぎたせいで、性別は辛うじてわかったが、年齢や人相は不明という有様だったのだから。
名は徐守真。貧民窟をねぐらとしていたが、とある縁から黄海楼で働くようになった青年である。
「仲望様もいらしたんですか。ちょうどよかった」
どこかほっとした様子の守真に、春蘭と仲望は互いの顔を見合わせる。
「お客様がいらしてますよ」
「私と仲望にか？」

「ええ。韓楊秀様と――」
「なんですって！」
守真が話し終えるよりも先に、紅燕が身を乗り出し気味に叫んだ。ひいっ、と守真が怯んだような悲鳴をあげる。
「どこの房室にご案内したの？　いいえ、それよりも楊秀様の馴染みは誰だったかしら……いや、ここは私が！」
ああ、でもこんな格好じゃ顔を合わせられない、と紅燕は頭を抱えている。月儀はそれを苦笑しながら眺めていた。
一方、紅燕の慌て振りに唖然としていた守真だったが、我に返ると首を横に振った。
「だめですよ！　なんか物々しい雰囲気なんですから！」
「物々しい？」
春蘭の問いに、守真は神妙な態度で頷いた。視線は紅燕に向けられ、いつでも取り押さえることができるように身構えている。
「こう……ぴりぴりした殺気みたいなものが漂っていて、姐さんたちも遠巻きにしてたくらいだ。きっと、ものすごく真面目な用件なんじゃないかな」
「ふむ」
韓楊秀は、仲望の友人で禁軍右飛龍将軍の肩書をもつ武人である。なにかよくないことでもあったのだろうか、と春蘭は顔を曇らせた。
「こちらの用件は済んだ。すぐに行こう」
「ああ」
春蘭は仲望を促し立ち上がった。しかし、その袖を紅燕ががっちりと摑む。何事かと振り返れば、満面の笑みを浮かべる紅燕がいた。
「楊秀様も上客中の上客よ。わかっているわね？」
「……うむ」
「ついでに、同僚の方にもそれとなく話を振るようにお願いするのよ。春蘭だけだと心許ないから、仲望様にもお願いしますね」

紅燕の顔が、獲物を狩る猛獣に思えてしかたない。よくもまあここまで人は変わるものだと、春蘭は内心で感嘆する。

今までの紅燕は、自己中心的な考え方の持ち主であった。羽振りのいい客を見れば横取りも辞さない勢いで、妓女という仕事を蔑む気配があったように思う。

それが、今は妓楼のため方々に手を尽くしている。蟬英の死は、紅燕に強い影響を与えたようだ。

「伝えるだけだぞ」

「涙を誘う感じにね」

「……善処はしよう」

無謀な要求をする紅燕だったが、それを聞いていた月儀が制止しないということは、ちゃんと宣伝して来いということなのだろう。妓女たちは、美女の皮を被った猛獣なのかもしれない。

溜息をつきながら、春蘭は室をあとにしたのだった。

守真に案内されたのは、妓女が客を取るような房室ではなく、主に密談や内密の会合などで使用されている場所だった。内装も凝ってはいるが他に比べれば控え目で、品のよい調度品が数点、質素な室内を飾り立てていた。

その中央に置かれた円卓を前に、韓楊秀が腰かけている。精悍な顔立ちや、短服の上からでもわかるがっしりとした体軀など、一目で武人とわかる雰囲気が漂っている。

腕組みしながら難しい表情で目を閉じている様は、守真が言っていたように、物々しいという表現が似合っていた。

「久しいな、楊秀」

声をかけながら、春蘭は楊秀の向かいの椅子に腰を下ろした。仲望もその隣に座り、いつもとは様子の違う友人に首を傾げている。

「啓璋たちから、ここにいると聞いた。押し掛けてきて迷惑ではなかったか？」
「かまわぬ。なにかあったのか？」
「いや……」
歯切れの悪い返事に、春蘭は横目で隣を窺った。目を合わせた仲望も、心当たりがないとばかりに無言で首を横に振る。
「そういえば、蟄居の件はどうなったのだ。未だに出仕は禁じられているのか？」
「取り消された。今は任務についている」
「早くはないか？」
仲望が訝しげに口を挟む。それに、楊秀は苦虫を噛み潰したような顔で答えた。
「疫が終息したとはいえ、治安の悪化は未だに収まっていない。龍乎だけでは抑えられないと、禁軍に要請があったのだ」
龍乎は華安の治安を守る部隊である。民同士の小競り合いや窃盗、殺人に至るまで、幅広く取り締まりを行っている。
なるほど、と春蘭は頷いた。しかし、将軍職にある楊秀がこんな場所で油を売っていてもいいのだろうか。それを指摘すれば、「街を視察するのも任務の内だ」という言い訳が返ってきた。
禁軍の任務は宮中の守りである。どう考えても任務の内に入るとは思えないが、楊秀は〝視察〟で押し通すつもりのようだ。
「ふむ。禁軍にも要請が入るほど、華安の治安はよくないのか？」
春蘭は妓楼からあまり外に出ないため、街がどうなっているのか把握できていない。一人で外出はするな、と妓楼の者たちに口を酸っぱくして言われ続けているので、よほど悪いのだろうという程度の認識だ。
その問いに、楊秀は重々しく頷いた。
「疫が流行っていた時よりは、少し落ち着いたといった程度だ。貧民窟から逃げ出してきた者たちが、

未だ棲み家に戻れず罪を犯す場合が多い。あとは――妖だな」

「妖が出るのか？」

春蘭は驚きの声をあげた。

山に入れば、妖もそう珍しいものではない。しかし、人の気配に敏感な妖が、人が溢れている華安に現れるというのはよほどのことだ。

「死臭が原因なのだろうな。外壁のお陰で街中での被害はないが、商人や旅人たちが道中で襲われている。近隣の邑が被害を受けたという報告もある」

「禁軍は出ないのか？」

「華安の治安が乱れている中、外に兵力を向けていては宮中の守りに支障が出る、と官吏たちに反対されてしまった。街道の警備隊からも、妖の被害報告はあがっているのだがな……」

楊秀の顔には苦悶の色が浮かんでいた。命令がなければ動けない。そんな己の身が歯痒くてしかたないのだろう。

「ふむ。それで楊秀はなぜここに来たのだ？」

忙しい身の上ならば、余計にさっさと用件を済ませた方がいいだろう。しかし、楊秀はなかなか口を開こうとしない。長考ののち、ようやく絞り出すような声が聞こえた。

「実は……占ってほしいことがある」

「占を所望か」

「ああ」

意外な申し出に、春蘭は目を見開いた。楊秀の性格を思えば、占などを厭いそうなものだが。そんな友人の変化に、仲望が訝しげな声をあげる。

「珍しいな。いったい、どうしたんだ？」

「詳しく説明はできない。ただ……私もどうしたものか、どうすればいいのか、よくわからぬのだ」

先ほどよりもさらに苦渋の色を濃く浮かべる楊秀は、言葉の通り当惑しているようだ。

「なにを占えばよいのだ？」

「……未来を。この想いに、望みがあるかどうかを

知りたい」

想い、と告げた際、楊秀の顔が切なげに歪んだ。

楊秀は名家の当主であり、禁軍の将でもある。妻にと望めば、大抵の親は良縁だと手を叩いて喜ぶはずだ。それとも、手の届かぬ相手――人妻にでも懸想してしまったか。

「わかった」

厨房に向かった春蘭は水の入った竹筒と盆を借り、楊秀たちが待つ客間へと戻った。円卓の中央に盆を置き水を張る。そこに、懐から取り出した水神盤を浮かべた。

八角形の木盤は、春蘭が使用する占具である。中央には透明な玉が嵌められ、それを基点に緻密な文様が彫られている。今では文献の中にしか残っていない占術だ。

「では、占おう」

水に浮かべた水神盤に手を翳し、春蘭は意識を集中させながら気を込めた。

やがて、気に呼応するかのように水神盤が旋回を始める。水が表面の溝を伝うように浸食し、ある一点ですべてが動きを止めた。

現れた複雑な卦に、春蘭は知らず眉を寄せた。

「……これはまた、極端な卦が出たものだ」

春蘭の占師歴は長くはない。腕に自信はあるが、人の未来を占うような機会は多くはなかった。にもかかわらず実に珍しい卦に当たったものだと、春蘭は感嘆する。盤上に現れたそれは、実に対照的な文様を示していた。

「どんな結果でもかまわん。覚悟はできている。すぱっと言ってくれ」

「いや、少しは説明させてくれ」

食い入るようにこちらを見ている楊秀に、春蘭は溜息をついた。

「これは対極文と呼ばれる卦だ。二つに分かれた道が、天と地ほどの差があることから名付けられた。名のある卦の大半は瑞祥文で占められている

が、これは凶文に分類されるものだ」
「凶文とは、禍々しい名だな」
「その下には大凶文がある。これに分類される卦は、片手で足りる。死ぬよりも辛い未来が待ち受けているとされる卦だ。占師として、絶対にお目にかかりたくはない文だな。さて、こちらに話を戻すか――」
ひと呼吸を入れ、春蘭は卦の説明を始めた。
「道は二つある。一つは栄光を摑むものだ。ただぬしの想いは叶わぬ。もう一つは、想いは叶うが、代償としてすべてを捨てねばならぬ。そして、後者には死の影が見える。ただ明確なものではないな。逃れられるかもしれぬが、捕まってしまうかもしれない。どちらを選ぶかは、ぬし次第だ」
「……そうか」
楊秀がどのような悩みを抱えているかは推測の域を出ないが、卦の結果には本人なりに思うところがあるようだ。神妙な顔付きで頷くと、「心に留めておこう」と告げた。
「対価はいくらだ？」
「金銭は取らぬぞ？」
楊秀の申し出に、春蘭は首を傾げた。
「秋菊という名で働いているのだろう？」
「それはそうだが……」
秋菊とは、春蘭が黄海楼で使用している名だ。姿を隠し、御簾越しに占を行う。年齢も性別も不詳とされる謎の占師。だが、今は秋菊として占を行ったわけではない。
「金銭をもらっても困るのだ。なんせ、秋菊の正体は蟬英と月儀しか――」
無意識に口を突いた故人の名に、春蘭は唇を噛み締めた。
気遣わしげにこちらを見る楊秀と仲望に気付き、
「それに、私が秋菊だと言っても、誰も信じはしないだろう」と、むりに言葉を続けた。
「どうせなら、黄海楼の妓女たちをどこかの宴にでも呼んでもらえるよう宣伝してくれ」

「それはかまわないが、いいのか？」
「うむ」
　占とは、そもそも人に助言を与えるために考え出されたものだ。今でこそ占に求められるものが、がらりと変わってしまったが、三百年前――春蘭が人として生きていた頃は、災害から邑や人を守る方法として用いられていた。
　金銭など関係なく、楊秀が歩む道を選択する時の助けになればと思う。
「さて、用件は済んだな。私はこれから行かねばならぬところがある。楊秀は仲望と話して帰るか？」
「春蘭、それは先ほどの件だろうか」
　仲望の問いに春蘭は頷く。まだ昼には間があるため、今から翰栄の家に向かえば夕方には戻ってこられる。
　面倒事はさっさと済ませたいという思いと、できれば、仲望と昼餉の席を共にしたくないという思いもある。食欲がないと主張しても、食べ終わるまで隣で見張られそうだ。
「どこかに行くのか？」
「頼まれごとがあってな」
　紅燕たちとのやり取りを簡単に説明すると、楊秀は驚きに目を瞠った。それから、なぜか仲望に猛然と食って掛かる。
「嫁を横取りされたらどうする！　お前もついて行け！」
「横取りもなにも、私と翰栄はそういった関係ではないぞ」
「いや、羽振りのよい男なんぞ、なにを考えているかわかったものではない。気のない振りをして、虎視眈々と狙っているかもしれぬぞ！」
　先ほどまでの重々しい雰囲気とは一転して、拳を握り締めた楊秀は熱弁を振るう。
「いっそのこと、翰栄とやらの前で、春蘭は鄭家の嫁だと断って来い」
「私は嫁になったつもりはないのだが……」

「こういうことは早めの対処が肝心だ」
相変わらず楊秀は人の話を聞こうとしない。彼の中で、春蘭はすでに鄭家の嫁と位置づけられて長い。
「仲望、ぬしもなにか言って――」
「言われなくても、ついて行くつもりだ」
告げられた言葉に、春蘭は思わず体を硬直させた。見れば楊秀も、信じられないものでも見たかのような表情を浮かべている。
「おかしなことでも言ったか？」
春蘭と楊秀の視線を受け、仲望は眉間にしわを寄せる。先に我に返ったのは楊秀だった。
「よく、よく言った仲望！　ようやく私の熱意が伝わったんだな！」
「そういう意味じゃないけどな」
「これで鄭家の将来も安泰だ！」
男泣きを始める楊秀に、仲望は溜息をつきながら肩をすくめる。それを春蘭は、なんとも言えぬ気持ちで見詰めた。
「俥の手配はしておく。昼餉を済ませたら出発しよう」
「う……うむ」
――ああ、やはり祥琳に言われたことを忘れてはいなかったのか。
頬を引き攣らせながら、春蘭はしぶしぶと頷いたのだった。



周囲には荒涼とした平原が広がっていた。

視界に入るのは、地面に突き刺さるように生えた灌木と、遠くにある山々――そして、醜悪な妖の群れだった。

猪突猛進してくるのは、真っ青な色をした牛だ。犀渠と呼ばれ、死肉を好む。中には普通の牛の一回りも二回りも大きなものも混じり、巨岩が動いているようだ。

その脇では、犬の頭と、人間に似た体を持つ野狗子が我先にと死体に群がっている。辺りには千切れた手足が転がり、骨ごと嚙み砕く音が響く。

さらにそれを遠巻きにしているのが、鷲に似た形で赤子のように鳴き、人を呼び寄せて食らうと言われる蠱雕だ。大地には大蛇が這い、奇妙な威嚇音を奏でている。

あげれば切りがない――それほどの地獄絵図が繰り広げられていた。

「くそっ、何体いやがるんだ！」

槍を野狗子の首に刺し、絶命を待たずに素早く引き抜く。殺到してくる犀渠はさすがに手に負えず、横に飛び退いて距離を取る他なかった。

郭洪釆は肩で息をつきながら、血と汗でぬめる槍の柄を握り直した。短服に胸当てと籠手、足を守るための膝裙をつけている。防御よりは動き易さを重視した装備だ。

全身が返り血で赤く染まり、腐敗臭と鉄のような匂いのおかげで鼻はすでに麻痺してしまった。数日間は死臭が取れないだろうと、生死の瀬戸際にはどうでもいいことを考えながら苦笑する。

「せやっ！」

飛び掛かってきた蟲雕を槍で払い除け、頭部を足で踏み潰した。

妖は臆病だ。弱ければ弱いほど、人を警戒して近付いてこない。だが、血に酔っている今、洪采を怖れる気配はなかった。

妖と対峙して、すでに一日が経った。洪采は気術を使えるが、体力の消耗を考え一度もそれを使っていない。

それでも、常に神経を尖らせていなければならない現状に疲労が重く伸し掛かってきていた。

「おいっ、そっちは無事か！」

洪采は声を張りあげた。

猩猩緋の中でも腕に覚えがある者たちを募り、三人一組にして応戦させている。それが全部で十組。洪采は単独で動き、一箇所に妖が集中しないように気を配っていた。

世の乱れに呼応するように、猩猩緋の構成員は増加している。しかし、戦闘要員として使える者はそう多くなく、洪采と渡り合える者は数えるほどしかいない。せめて同じくらい腕の立つ者が、あと何人かいてくれれば楽なのだが、と内心でやるせなげに溜息をつく。

気術兵が猩猩緋に流れてくることは稀で、洪采も施術が成功した時、禁軍に入隊するかどうかで頭を悩ませたものだ。まあ、それは朝廷への憎悪故に実現はしなかったが。

今一度声を張りあげれば、離れた場所よりか細いながらも返答があった。怪我人や死人が出たらすぐに報せろと伝えてある。一つが潰れると、他に負荷がかかる。均衡を維持するためには、どの組も潰れてもらっては困るのだ。

「はあっ！」

気合いを込めて槍を繰り出せば、野狗子が二匹、重なり合うようにして串刺しになる。それを一振りで払い、次の獲物に標的を定めた。

「弱ぇけど、数が多すぎだろ……！」

原因は、華安を襲った疫にある。被害は貧民窟とその周辺に留まったが、それでも数百の死者が出た。流行り病で犠牲となった者の遺体は火葬にされるのが決まりだが、貧民窟で暮らす者たちには家族がいない。死ねば遺体は埋葬されることなくそのまま放置される。

再び疫が発生することを懸念した朝廷は、臨時で人を雇い、遺体を郊外に運び出し、焼くよう指示を出した。そこまではよかった。

華安から運び出された遺体は一箇所に集められ、火をかけられる予定だったのだ――死臭に惹かれた妖たちが集まるまでは。

武人でもない人足たちが妖に敵うはずもない。命からがら逃げ出した者もいれば、命を落とした者もいた。遺体は集まった妖たちによって蹂躙され、妖の数は段々と増えた。

とばっちりを受けたのは、近隣の邑々である。小型の妖ならばまだしも、大型の――犀渠や野狗子に襲われては堪ったものではない。

頼みの綱の禁軍や龍乎は、疫によって荒れた治安を回復するために忙しく、外の者たちの悲鳴にまで気を配ってはいられないらしい。邑人たちは見捨てられたも同然である。

義賊として、その現状を放ってはおけない――と同時に、人心を朝廷から引き離す絶好の機会ということで妖討伐に勤しんでいるわけだ。

「しっかし、なんでもかんでも猩猩緋、猩猩緋って、俺らは万能じゃないっての！」

槍を振り回し、四方から飛び掛かってきた妖を蹴散らす。縋りたい気持ちはわかるが、こっちも同じ人間だ。限界というものがある。

妖の相手に慣れている洪采はまだいい。今回の討伐に駆り出されたそのほとんどが、妖と対峙することすら初めての者たちばかりだ。地方で活動する仲間ならば、多少なりとも妖討伐の経験はあるが、華

安に呼びつけている余裕はない。

「――洪采、準備が整ったぞ」

頭上から声が響くと同時に、洪采の足許に六本の匕首が突き刺さる。とっさに避けたが、あのまま立っていたら間違いなく匕首の餌食となっていた。

「俺を狙うな！」

「馬鹿者。見ろ」

地面を見れば、地表の微かな割れ目から猪のような頭部が覗いていた。絶命したのか、ぴくりとも動かない。洪采は呻き、顔を顰めた。

「媼までいんのかよ……」

死者の脳味噌を好物とし、地中をもぐらのように行動する妖である。墓場を縄張りとし、攻撃しない限りは人に危害を加えないはずだが、強烈な死臭に酔ったか。

そもそも、この場に溢れている妖すべてが、通常ならば目にすることのない存在なのだ。大規模な戦のあとでもない限り、ここまでの群は滅多にお目に掛かれないだろう。

「油断するな」

「助かったけど、できれば一声かけてくれ。お前の匕首には猛毒が塗ってあるから、掠っただけで命取りなんだよ」

「ふん。猩猩緋たる者、あの程度を避けられなくてどうする」

影のように降り立ったのは、全身を黒装束で覆った小柄な人物である。名は冬雁。二十歳の洪采より二歳年上の女性だ。

もっとも外見だけならば、十代前半の少女にしか見えないが。

「他の奴らには？」

「鴛河たちが向かった。順に脱出させる」

「んじゃ、俺とお前とで殿か」

「お前と呼ぶな。不愉快だ」

いつにも増して冬雁の機嫌は悪いようだ。もとから妙な対抗意識を持たれていたが、それを含めても

言葉の端々に棘を感じる。
「あー、あんまり匕首の毒に頼んなよ？　特に犀渠あたりは毒の回りも遅そうだし。毒が効かない奴もいそうだ」
「子供扱いするな！」
冬雁がいきりたつが、そもそも子供扱いしていたら、さっさと安全な場所に逃げろと怒鳴っている。冬雁の実力を買っているからこそなのだが、本人には伝わっていないようだ。
まあ、冬雁の反応が面白くて、ついついからかってしまう自分にも非はあるが。洪釆は槍を振るいながら苦笑した。
「貴様こそ、先ほどのように気を緩めるな。次は助けてやらんぞ」
「はいよ」
痛いところを突かれ、洪釆は顔を歪めた。あれは確かに失態だった。冬雁がいなければ怪我は免れなかっただろう。
気を引き締め直し、槍の柄を握る手に力を込める。周囲を見回せば、殲滅にはまだ程遠いが、妖の数も少しは減ったようだ。至るところに屍が転がり、それに食らいつくものもいる。夢で魘されそうな光景だ。
できるならば骨は拾ってやりたいが、今は妖らの殲滅が優先である。妖の群れが去ったあとで、原形のあるものは仲間たちが拾い集め、今度こそ火葬する手筈となっている。
死体がなくなれば、妖たちも華安に姿を見せることはないだろう。
「――合図だ」
冬雁の声に空を見上げれば、左右から赤い煙があがっていた。これから仲間たちが戦線を離脱するまで、洪釆と冬雁の二人だけで持ち堪えなければならない。
「我々も徐々に後退する。もう一度、狼煙があがれば全員が離脱できた合図だ。気術は使うな。兎天様

からの命令だ」
「了解」
頷き、洪采は槍を、冬雁は匕首を、飛び掛かってくる妖に振るった。

二度目の狼煙があがったのは、しばらく経ってからだった。
洪采と冬雁が後退したあとには、事切れた妖の屍が道標のように転がっている。いったいどこからこれほどの数の妖が湧いてでるのか。洪采は得物を振り回し続けながら、相方の様子を窺った。
気になるのは、冬雁の動きだ。八つ当たりのように、群がる妖たちを屠っている。感情が態度に出易いことは知っていたが、ここまで酷いとなにがあったのか気になるところである。
「なあ、冬雁っ。このまま、この辺りの妖を一掃できるんじゃ、ないかっ？」
「知るかっ。話しかけるな！」
「へいへい。それじゃ、そろそろこっちも後退しますかっ」
言い終えると同時に、洪采と冬雁は走り出した。妖が密集している場所を避け、手薄な所を風のように駆け抜ける。
立ちはだかる妖を蹴散らして進むと、前方に柵が現れた。地面には土嚢が積まれ、ちょっとした砦のような作りになっている。
これを作るために、洪采たちは今まで囮となっていたのだ。
「おー、即席にしては立派だな」
「無駄口を叩くな！」
「はいはい」
妖たちを背後に引き連れながら走れば、柵の隙間からきらりと光るものが見えた。背後を一瞥した洪采は足を速める。
ついでに前方を走る冬雁を、断りもなしに担ぎ上

げた。
「なっ――」
絶句する冬雁に言葉をかける余裕もなく、土嚢を登り、柵の出っ張りを利用して跳躍する。洪采が柵を飛び越えると同時に、「弓隊、放て！」と鋭い声が響く。地面に着地した洪采の背後で、空を切る弓矢の音と、なにかが一斉に倒れるような音が聞こえた。
「よいしょっと」
冬雁を下ろすと同時に、匕首が投擲された。それは予想の範囲内であったため、軽く避ける。たまたま洪采の背後に立っていた仲間の一人が、いきなり飛んできた匕首に悲鳴をあげた。
「死にたいようだな」
「二人ばらばらに行動するより、一緒の方が合図する方も楽だろ」
「ならば、そう断ればいいだろう！」
「全力で走りながら喋るほど、俺は器用じゃないんでね」
本音は、冬雁の体力が心配だったからなのだが、正直に言えば火に油を注ぐだけだ。洪采と同様に、冬雁も昼夜を徹して動いていたはずである。体力も限界に近いと踏んでの行動だ。
「まあまあ、お二人とも。なにもこんなところで喧嘩なさらなくてもいいでしょう」
一方的な喧嘩の仲裁に入ったのは、応槍幽である。歳は三十。小柄な体軀で、容姿はたいして特徴がないところが特徴か。猫背気味の背をさらに丸め、怯えるような眼差しを絶えず柵の外へと向けていた。
槍幽と入れ替わるように、冬雁は舌打ちをしてさっさと離れて行ってしまった。
「ご苦労様でした。とりあえず、あとは弓隊が請け負いますので、返り血をどうにかしてくださいよ。見た目も臭いも凄いですよ。それとも、先になにか腹に入れますか？」
「いや。先に体を拭いてくる。食い物は、準備して

おいてくれ」
「はいはい。しかし、よく食べ物を口にできますね。私だったら、粥も口にしたくありませんよ」
「馴れだな」
ほぼ丸一日、飲まず食わずで動いていたが、戦闘後の緊張からかあまり空腹は感じていなかった。今もそんなに腹は空いてないが、食べられる時に食べておかなければ、いざという時に動けなくなってしまう。
簡易の砦内部は充分な広さがあり、円を描くように木の柵が設けられている。高さは人の二倍はあるだろう。弓隊は踏み台に登り、柵の上からの斉射を行っていた。
飛び道具を使う敵ではないため、姿を露にしての攻撃が可能なのはありがたい。視界を阻むものはなく、的確に弓を射ることができる。
中央には大量の矢が用意され、交替要員と先に撤退した仲間たちが体を休めていた。百人程度はいるだろうか。
ふいに、なにかが柵にぶち当たる音が響いた。ひいっ、と気弱な声をあげたのは槍幽である。怖ろしい化け物でも見るかのような眼差しを、柵の外へと向ける。
「ああ、本当に、どうして非戦闘員の私がこんなところにいるんですかね。未だに夢ならいいのにと思いますよ」
「使い勝手のよさを見込まれたんだろ。諦めてくれ」
「とっくに諦めてますよ。でも、怖ろしいことに変わりはないんです。あの唸り声なんて、夢に出てきそうですよ」
槍幽の主な仕事は、華安の様々な情報を収集することだ。
しかし、人員不足からか、猩猩緋への引き抜きや、街角での朝廷批判、果ては砦の建築指揮まで任されている。

「邑の方はどうだ？」
「すでに避難は済んでます。ただ、長引けば不満が出るでしょうね。食べ物も各自、持てるだけと制限をかけてしまいましたし、こちらもわざわざ食糧を運搬してやれるほどの余力はありません。大半はここに集結させてますからね」
「やれやれだな」
妖を一箇所に集めて殲滅する。それが今回の作戦である。邑人たちは安全が保証されるまで、邑には戻れない。時間がかかればかかるほど、避難している邑人たちから不満の声があがるだろう。
「体を拭いてくる。なんかあったらすぐに報せてくれ」
「わかりました。ああ、そういえば珍しい方がおいでになってましたよ」
「誰だ？」
「朱緋様です。華安に向かうところだったそうです。もうすぐそこだからと、馬を置いて行かれましたよ。好きに使えと言ってましたが、体よく押しつけられた気分です。大方、馬の世話が面倒だったのでしょうね」
懐かしい名に、洪采は目を瞠った。朱緋。猩猩緋の中でも古株であり、洪采と同じ気術兵でもある。しかし、その実力には大きな差があった。洪采は一度として朱緋に勝利を収めたことはない。
朱緋は猩猩緋の長、紅主の右腕である。特命を受け単騎で行動しているとは聞いていたが、華安になんの用があるのだろうか。
目立つ容姿故に、人の多い場所を避けていたはずだが――。
「なにか言っていたか？」
「急いでおいでしたから、なにも。ああ、でも隠れ家には顔を出すとおっしゃっていました」
「なら、これが終わったら会えるか」
洪采の槍は独学であるが、気術兵として鍛えてくれたのは朱緋だ。

玉を埋め込んだところで、気術を扱えなければ意味がない。猩猩緋に同じ力を持つ先人がいたことはまさに僥倖だった。

「私も早く華安に戻りたいですよ。ここは生きた心地がしません」

槍幽の愚痴に肩をすくめ、洪采は人の輪に近付いた。返り血に塗れた姿に気付いた仲間が、苦笑しながら水に濡らした布を手渡してくれた。水は数日分をきっちりと確保してあるようだ。

布は顔を拭っただけで真っ赤に染まってしまった。行水できればいいのだが、さすがにそんなことはできない。見兼ねた仲間の一人が、水の入った竹筒を差し出してきたが、洪采はそれを断った。

「どうせ、外に出れば無駄になる」と告げれば、納得したように頷かれてしまった。とりあえず、顔や手についた血さえ拭き取れればいい。服や防具についたものは、放っておけば勝手に乾くだろう。

「槍幽、飯をくれ」

「はいはい」

手渡されたのは、かちかちの干し肉と、小振りな梅の実であった。

「干し肉はわかるけど、これは？」

「邑人が分けてくれたものですよ。持って逃げられないからみなさんでどうぞ、とね。まだ籠にたっぷりとありますよ」

「そりゃありがたい。眠気が吹っ飛びそうだ」

正直、なにを食べても味がしないと思っていたが、梅となれば話は別だ。腐敗臭と血の匂いで麻痺してしまった鼻はしかたないが、口の中はこれですっきりするだろう。

さっそく一口齧り、その強烈な酸味に顔を顰めた。

「――おい、これ」

「烏梅用らしいです」

烏梅とは、未成熟な実を乾燥させたものである。主に漢方等の薬として用いられる。熟す前なので、当たり前ではあるが酸味は強い。むしろ酸味しかな

い。

「それを先に言ってくれ……」

知っていれば、齧るのではなく歯を立てる程度で済ませたものを。洪采は溜息をついて、梅の実を呑み込んだ。

干し肉を嚙んでいると、冬雁と思われる悲鳴が響いた。顔を向ければ、口を押さえて身悶えている。彼女も梅の実の被害に遭ったようだ。

どうやら、槍幽は引っかかった人の反応を楽しんで憂さ晴らしをしているらしい。戻ってきたら、食い掛けの梅を口に突っ込んでやろう——洪采は心に誓うのだった。

黄海楼を出た楊秀は、その足で禁軍の詰所へと向かった。

楊秀は、疫が蔓延している地域の焼き打ちを命じられた際、皇帝に勅旨の撤回を求める上訴を行った。死罪覚悟の行動であったが、同じ行動を起こした者が多かったこともあり、蟄居を命じられるに留まった。

期限は定められていなかったが、三日ほど前に、疫の混乱に伴う治安の悪化から早々に処分を解かれ、職務に励むようにと通達がもたらされた。現在は禁軍総出で治安維持に当たっており、楊秀も詰所での寝泊まりの日々が続いていた。

その途中、楊秀は左飛龍軍の詰所から出てくる花興奏と鉢合わせした。興奏は初老の男だ。小柄ではあるが威厳のある佇まいに、意志の強い眼差しが印象的な人物である。だが、なぜここに——混乱しながらも、楊秀は口を開いた。

「花中書令」

「おお、久しいな」

花興奏は、楊秀を見るなり破顔した。相手の顔とは逆に、楊秀は内心で、別の道を通ってくればよかったと暗澹たる溜息をつく。

朝廷は今、太子派と公子派で対立を深めている。太子派の筆頭が興奏であり、韓家当主として中立の立場をとっている楊秀にとっては、できるだけ顔を合わせたくない相手だった。

会話しているところを目撃されでもしたら、口さがない者たちになんと吹聴されることか。知らないうちに、太子派に名を連ねさせられる可能性もあった。

しかし、相手は中書省の最高責任者である。顔を合わせたからには、失礼のないように応対しなければならない。

「いつぞやはご迷惑をおかけしました」

楊秀は素早く周囲に視線を走らせた。幸い、出払っているのか人の気配はない。興奏の背後に、護衛が一人控えているだけだった。

「左飛龍軍になにかご用ですか？」

「薛将軍に面会に来たのだが、どうやら不在だったようだ」

できれば自分も顔を合わせたくはなかったのだが、と楊秀は心の中で運の悪さを嘆いた。

「ところで、謹慎が解けたようだな」

「はい」

「まだ、陛下の肩を持つつもりか？」

あまりにも率直な言葉に、楊秀の頬が引き攣った。周囲に誰もいないことを知ったうえでの発言だろうが、聞かされる方は堪ったものではない。

背後に控える護衛の表情も、心なし強張っているようだ。

「私は禁軍の将です。陛下の手であり足であります。命令に忠実でなければ、禁軍にいる資格はないでしょう」

「だが、先日の件ではずいぶんと危ない橋を渡ったではないか。上訴したのがぬし一人だったならば、どうなっていたかわからぬぞ」

「覚悟の上です」

「国のためを思って行動してはくれぬか。ぬしはこ

こで失うには惜しい人材だ」

「……私は常に民のことを考えております」

皇帝沸儀の様々な勅命が、民の生活を圧迫していることは知っていた。

華安はまだいい方で、地方では飢えに苦しむ者たちは多い。見て見ぬ振りをするなと、興奏は言いたいのだろう。

「まったく。ぬしは父親に似て頑固だ。だが、盛申殿ならば、中立などと曖昧な立場は取らなかっただろうな」

「それは……」

痛いところを突かれ、楊秀は苦笑するしかなかった。確かに、竹を割ったような性格である父ならば、即決していたはずだ。

興奏の言いたいことはわかる。公子派が政権を取れば、世はさらに荒れると言いたいのだろう。確かに、人徳のある太子ならば、民のことを第一に考えた政策を打ち出し、誰からも崇められる皇帝になるだろう。

しかし、太子は父親である沸儀に敬遠されていた。楊秀は禁軍時代の沸儀を知っている。逆らう者には、一切の情け容赦がない。

戦場に出れば、まさに鬼神。圧倒的な力で敵兵を狩りつくす。

太子派に名を連ねるということは、沸儀の敵となるということだ。負ければ、韓家の血筋は根絶やしにされてしまうだろう。

「――ところで話は変わるが、宴のことは聞いているか？」

「宴ですか？」

急な話の転換に、楊秀は眉を寄せた。副官からはそのような報せは受けていなかった。もっとも、多忙を極めている現状では、重要でないものは後回しにされてしまう。楊秀の耳に届いていなくても不思議はない。

「疫の終息を祝って、大規模な宴会が行われるそう

だ。陛下も珍しくご出席になる」
「……大勢の犠牲者が出たのに、宴など。不謹慎だという声はあがらなかったのですか？」
「被害は貧民窟とその周辺だけだったからな。官吏たちにしてみれば、自粛する必要はないのだろう。嘆かわしいことではあるが、陛下が出席なされるならば止めることもできん。ぬしにもそのうち報せがいくはずだ」
　楊秀は、できるだけ不満を顔に出さないように努めた。こちらが隙を見せれば、興奏は嬉々として食らいついてくるだろう。
「時に、なにか目新しい余興はないものかと官吏たちに訊かれてな。楊秀殿はなにかよい案はないか？」
「……私は無骨な武官ですから。他に訊かれた方がよろしいかと」
「確かに。ならば、仲望ならばどうだろうな？」
「あれも元は武官です。聞くだけ無駄だと思いますが」
「そうか？　ああ、仲望といえば、可愛らしい娘を屋敷に迎えたようだな。それがまさか、攫猿の騒ぎの際に顔を合わせた子供だとは、思ってもみなかったが」
　攫猿と呼ばれる妖が華安を騒がせたのは、つい最近のことだ。
　裕福な貴族の子女たちが犠牲となり、興奏の姪も危うく命を落としかけた。攫猿が花家の屋敷を襲った際、春蘭がその場にいたことは仲望から聞いていた。おそらく、なんらかの形で興奏と顔を合わせたのだろう
　あまりにもわざとらしい話題の転換に、楊秀は興奏を睨みつけた。話の意図はわからないが、不穏な空気に顔を顰めそうになる。
「なにをおっしゃりたいのですか」
「私の姪たちと交友があってな。ずいぶんと面白い特技を身につけているようだ」

「花中書令。あなたがなにをなさろうと勝手だが、仲望たちを巻き込むことだけは止していただきたい」
「怖い顔だ」
興奏は悠然とした態度で、楊秀を見上げた。
「さて、私は忙しい身でな。すまないが、これで失礼させてもらおう」
「花中書令！」
「私もな、有益な人材をいつまでも遊ばせてはおけぬのだ」
たとえ、この場面を目撃した者がいたとしても、楊秀が太子派に名を連ねたと吹聴することはないだろう。それほどまでに、興奏に向けられた楊秀の顔は怒りに満ちていた。
「次に会う時は、色好い返事を期待しておこう」
興奏の背が徐々に遠ざかる。
残された楊秀は、言い知れぬ不安に唇を噛み締めるしかなかった。

「戻ったぞ」
声をかけて室に入れば、楊秀の副官である陸万里が、座卓に向かって黙々と書状を書いていた。年齢は楊秀と同じ二十七歳なのだが、神経質そうな顔立ちが実年齢より上に見せている。ここ数日の激務もあいまって、さらに老けてしまったようだ。
「息抜きになりましたか？」
「ああ。忙しいのにすまなかったな」
外に出てはどうか、と提案したのは万里である。なにかに憑かれるように仕事をこなす上司を心配してのことだった。
「ついでにと足を伸ばした先で、知人の訃報を聞いた」
「……疫ですか？」
「ああ。花街で妓楼の楼主をしていてな。女にしておくのがもったいないくらい、気風のいい人物だっ

た」

　黄海楼の楼主とは、彼女が妓女として働いていた頃からの付き合いである。馴染みと呼べるほどの間柄ではなかったが、それでも多才な彼女との会話は楽しかった。

　禁軍の将になってからは、数えるほどしか妓楼を訪れていない。攫猿の一件で世話になったことがきっかけで再び足を向けるようになったが、その理由の大半は、友人の嫁候補である少女を心配してのことだった。そんな楊秀でも、いつも温かく迎えてくれた。まあ、そのぶんきっちりと払うものは払わされてしまったが。

「楼主が亡くなったのでは、これからがたいへんですね」

「そうだな。以前のように戻るまでは、時がかかりそうだ」

　大きな柱を失った黄海楼は、復興に向けて動き出してはいるが、どこか沈んだ空気が漂っていた。占師として働いていた春蘭も、雇い主の死はかなり堪えたのか、いつもより覇気がなかったように思う。

「あとはな、仲望の奴がようやくその気になったようだ」

「といいますと？」

「嫁をもらう気になったということだ」

「……楊秀様の勘違いや思い込みではなく？」

　筆を止めた万里は、訝しげな視線を楊秀に向ける。楊秀は確信をもって頷いた。

「あの朴念仁が、常に春蘭について回っているのがいい証拠だ。春蘭の年齢を考えれば、あと二、三年は待たねばならないだろうが、仲望がその気ならばまったく問題はない。あとは春蘭によい養父を見つけ……いや、いっそのこと父の養女としてしまった方がいいか？　母上も女の子が欲しかったと愚痴を零していたからな……春蘭が義妹か。なかなかいい案だ」

「暴走しないでください楊秀様」

「こうしてはおれん。さっそく父上に書状を！」
紙と筆の準備をしようと楊秀が立ち上がった時、溜息と共に万里の制止が入った。
「書状はまた今度でもいいでしょう。それよりも、お耳に入れておきたいことがあります」
「なんだ？」
「どうも花興奏様が活発に動いていらっしゃるようです。楊秀様も気をつけてください」
告げられた中書令の名に、楊秀は反射的に顔を顰めた。
「気をつけるもなにも、先ほど左飛龍軍の詰所前で顔を合わせたばかりだ」
「それはまた……運が悪かったですね」
同情的な万里の視線に、楊秀も深い溜息をつく。
同時に、頭の中で春蘭を養女にする案を却下した。韓家の行く末が定まらぬ今、縁戚関係を結ぶのはあまりに危険だった。下手をすれば、彼らごと巻き込んでしまいかねない。
「どうやら、先日の上訴の件で、蟄居を命じられた官吏や禁軍の将と接触を図っているようです。陛下への反感を煽り、太子派に引き込む算段かと」
「なるほど。確かに、花中書令にしてみれば絶好の狩場だな」
「実際、今回のことで太子派に与する者が増えたのは事実です。そう簡単に均衡が破られるわけではありませんが、花中書令をはじめとする太子派の頑張り次第では、一気に天秤が傾く恐れもあります。その時、勢いを得た太子派が、公子派にどうでるか……」
万里の表情は優れない。
そうなれば禁軍も否応なく双方の派閥争いに巻き込まれるだろう。楊秀もまた、一軍を預かる将として、微妙な立場に立たされるはずだ。双方の派閥にとって、楊秀はぜひとも味方に引き入れておきたい人物の筆頭だ。
「禁軍の将で、動きがある者はいたか？」

「そうですね……文官が中心となっているからこその均衡だと心得ている方は、みな静観の構えを崩していません。慎重な方が多くて助かりますね」
「ならいいが」
「もちろん秘密裏に協力を取りつけている可能性もあるので、探りを入れます。それに……」
万里は言葉を濁らせた。少し迷う素振りを見せたあとで口を開く。
「少々、物事を強引に運んでいるのが気になります」
「ふむ」
「疫への対処で反感が芽生えたとしても、花中書令の行動はあまりにも大胆すぎます。まるで、なにかに急かされているような印象を受けました」
「確かに、以前にも増して率直な物言いではあったな」
先ほどの会話も、室内ならばまだしも、禁軍の詰所前という、どこで誰が聞いているかもわからない場所で交わすようなものではなかった。
今まで地道に根回しを行っていた興奏にはそぐわない行動である。
「あるいは、公子派になんらかの動きがあったのかもしれませんね」
「動きか」
楊秀の脳裏を、一人の女が過った。顔を見たのは一瞬だった。ただそれだけで網膜に焼きついて忘れることができない。
美しかった。
今まで出会った誰よりも。驚きに瞠られた瞳には、確かに自分の姿が映っていたように見えた。否、ただの願望かもしれないが……。
だが、相手は皇帝の寵姫だ。想うことすら憚られる。己の気持ちに決着をつけたくて、春蘭の占にまで頼ったが結果はなにも変わらなかった。
「念のために、公子派にも探りを入れておきましょう」

万里の声に、楊秀は我に返った。軽く頭を振って脳裏から想い人の幻影を消す。

「頼む」と己を戒めるように強い口調で告げた。

太子派と公子派の争いに、禁軍が巻き込まれるわけにはいかなかった。武力の衝突となれば、甚大な被害が出る。これ以上、民に負担を強いることはできない。

「さて、仕事もずいぶんと溜まっていますよ。これは街に出ている者たちからの報告書です」

座卓に積み上げられた報告書の束に、楊秀の顔が引き攣った。

「今のところ民による大規模な暴動、襲撃はありませんが、増員の依頼はひっきりなしです。場合によっては、楊秀様直々に出ていただくことになるかもしれません」

「……心しておこう」

右飛龍軍は宮中の警備を担っているため、街に出せる人員にも限りがある。しかし増員を断り続ければ龍乎との関係の悪化に繋がるため、万里は将軍である楊秀を外に出すことで、不満の声を抑えようと考えているのだろう。

「花中書令の件は頼んだぞ」

気になるのは、別れ際に興奏が仲望の名を出したことだ。それだけでなく、春蘭の占についても仄めかしていた。

なんの思惑もなく、興奏が二人のことを話題に出すわけがない。

興奏が、禁軍の将である自分を自陣に引き込みたいと考えるのはわかる。だが、宮中から遠退き、穏やかに暮らしている者たちまで巻き込むのはよしてほしい。

仲望たちには幸せになってもらいたいのだ。己の想いが実ることはないと知っているからこそ、彼らだけは。

報告書を開きながら、あとで仲望に注意を促さなければと、楊秀は気を引き締めたのだった。

紫宝宮の、人払いがされた一室に興奏はいた。中書令に宛がわれた私室で、室内は興奏の趣味に合わせて質素な設えだった。身分の都合上、屋敷や宮中の室にはそれ相応の調度品を置いてあるが、元来、華美は好まない性格なのだ。

置かれてあるのは愛用し続けている座卓と、隅に積まれた書物のみ。権力の中枢に身を置く者としては、あまりにも不似合いな内装であった。

「――興奏様。書状が届きました」

腹心の崔如晦の声に、座卓に向かっていた興奏は顔をあげた。如晦は二十九歳と、部下の中でもっとも若い。すっきりとした顔立ちで、興奏の護衛も兼ねているため引き締まった体つきをしていた。

興奏は筆を硯に置き、墨で汚れた手を懐紙で拭った。

「報告書を先に」

「はっ」

如晦から手渡された束は、興奏が各地に送り込んだ配下の者からの報せである。華国は五の道に分かれ、三百の州が置かれている。州の執政を行っているのは朝廷から任命される刺史だ。

興奏が潜り込ませたのは、華安にも引けを取らない都として栄える、東都と西安である。そこを拠点とし地方の状況を探らせているが、もたらされる報告は芳しいものではない。

「辺境では蛮族どもの代わりに、妖による被害が多発しているようだ」

「地方の行政は機能していないのでしょうか？」

「機能しているように見せ掛けている、というべきだろうな。少なくとも、朝廷には妖による被害の拡大は報告されていない。陛下の勘気を怖れているのだろう」

特に被害が拡大しているのは、西安近辺のようだった。報告書には具体的な犠牲者の数も記されてい

る。妖の群れに襲われ、甚大な被害を出した邑もあった。

「……西に人員を回した方がよさそうだな」

「手配いたしますか？」

「そうしてくれ。人選は任せる」

「承りました」

残りの報告書に目を通した興奏は、如晦に手渡された書状を座卓に載せた。

「火を」

命じれば、心得たとばかりに如晦は座卓に置いてある燭台に火を点した。書状を手に取った興奏は、中の書を包んでいた紙を火に翳す。

熱に炙られた紙は、身のうちに隠していた文字を茶色く浮かびあがらせた。徐々に現れていく文を眺めながら、興奏は口を開いた。

「公子派はどうしている？」

「目立った動きはございません。興奏様の動きに反応しているのも下の者たちだけで、名だたる者は静観の構えです」

「ふむ。動かぬか」

「密偵が増えた程度にございます」

「高位の者を、太子派に引き入れることはできなかったからな。これが、禁軍の将を一人でも引き入れたとなれば話は違っていただろう」

疫への対処について、皇帝に対し離反するほどの反感を抱いた者は少ない。非道な手段ではあるが、疫病に火をもって対抗することは歴史を見れば多々あった。

上訴した者たちが問題視したのは、他の手段を講じる間もなく、いきなりの焼き打ちを命じられたからだ。様々な対策を講じたのち、最終的な手段とするならば反論の声も少なかっただろう。

また、勅命は出されたが、実行されなかったということも大きい。禁軍が焼き打ちを始める前に、疫は終息へと向かい出したのだ。まさに絶妙の間合いであった。

終息の兆しが一日でも遅ければ、貧民窟とその周辺に火が放たれていただろう。

「しかし、禁軍は難しいな。どうしても、陛下への畏怖が強すぎる」

「将の大半が、陛下の禁軍時代を知る者たちです。しかたのないことでは？」

「如晦は武官の引き入れに否定的だったな」

「こちらが兵力を増強すれば、公子派も対抗しようとするでしょう。いざ武力抗争となった場合、大規模な戦に発展する恐れがあります。次の世に必要な人材を失いかねません」

「ふむ……」

如晦の言い分ももっともであるが、興奏は武力による宮中の掌握も視野に入れていた。その場合、障害となるのは禁軍の存在である。

「秘密裏に協力を取りつけられるのが一番なのだがな」

溜息をついて、興奏は火に翳していた紙に目を通した。そこには簡潔に用件のみが綴られている。

「博焚様はなんと？」

「今度の宴に出席なさるとのことだ」

太子があまり屋敷に閉じ籠もっていても、病を理由に廃嫡される恐れがある。人目のある場所――宮中の者たちが集まる宴に出席すれば、よからぬことを考える者たちへの牽制ともなるだろう。

「……それは、大丈夫なのでしょうか。万が一、衆目の前で倒れられるようなことがあれば、公子派に恰好の餌を与えてしまいます」

「博焚様が大丈夫だとおっしゃるのだ。信じるしかあるまい」

久しく顔を合わせていない博焚を思い、興奏は溜息をついた。

「ところで、宴の催しは決まったのか？」

「いえ、そのような話は未だ聞こえてまいりません」

「そうか……ならば、黄海楼の占師を余興に呼んで

はどうだろうか」

「占師ですか？」

如晦の訝しげな声に、興奏は頷いた。

「疫が流行る前に、一部の官吏たちの間で噂になっていたではないか。よく当たる占師が花街にいる、と」

「では、その者を？」

「ああ。ついでに妓女も呼ぶといい。後宮の名妓もいいが、たまには違った顔触れも新鮮だろう」

興奏を観察するように見ていた如晦であったが、異論を口にすることなく頷いた。これがただの提案ではないと、わかっているようだ。

「では、そのように手の者に提案させてみましょう」

「頼んだぞ」

それが興奏の意向であれば、如晦は必ず宴に黄海楼の占師を呼ぶように画策するだろう。

秋菊（しゅうぎく）という名の、性別も年齢も不詳の占師であると聞いているが、興奏はその正体に見当をつけていた。

姪たちから、春蘭が占師として妓楼で働いているということは聞いていた。その働き始めた時期が、秋菊のそれと一致するのだ。念のために調べてみれば、春蘭が通っているのは黄海楼であると判明した。これは確実と考えていいだろう。

皇帝沸儀は、新しいものに興味を持つ。それ以上に、恐れる素振りを見せず、率直にものをいう人間を好む。あの少女を気に入る可能性は高い。必ず傍に置こうとするはずだ。

妻にと思った娘を後宮に召し上げられた仲望は、沸儀を恨むだろう。そこにつけ込めばいい。太子側につけば、褒美として娘を下賜（かし）すると約すればよい。そして、もう一人。楊秀も友人のためならばと、太子側につく可能性が出てくる。少なくとも公子派について敵対する道は選ばないだろう。

我ながら卑怯（ひきょう）な手段ではあるが、太子を帝位に

つけるためならばなんでもする。真実を知られれば、仲望と楊秀には恨まれることになるだろうが、それも大義の前にはやむをえないことだった。

いくら恨まれたところで、興奏はそう長く宮中に留まることはない。太子が即位すれば、潔く身を引くつもりだ。

恨みは自分が持ち帰らせてもらう。その矛先が、太子にさえ向かなければいいのだ。

いつの間にか、如晦は退席していた。考えごとをする興奏を気遣ったのだろう。彼もまた、興奏が太子のために用意した人材だ。

――すべては、太子のために。

わずかに胸に湧いた罪悪感を押し殺し、興奏は再び筆を取ったのだった。



黄海楼から出る際に、紅燕からしつこいくらいに気をつけるよう注意を受けた。久し振りに歩く街中は、以前ほどまではいかないが、ほどほどに活気が戻りつつあるように見えた。

仲望にしっかりと手を握られた春蘭は、龍神大路を南に向かって歩いていた。翰栄の家を訪れたことは一度しかないが、大路から脇に入ってすぐのところにあったと記憶している。道順は簡単なため、迷う心配はない。

「武具をつけた者が多いな。龍乎か？」

周囲を眺めれば、武具を纏った一団が目につく。みな手に槍を持ち、四、五人で固まって歩いている者もいれば、馬に乗ってゆっくりと巡視している者もいる。

住民たちは、それらを遠巻きにはしているが過剰に警戒している様子はなかった。春蘭の呟きに、仲望が答える。

「楊秀が言ってたように、禁軍もかなり出てるみたいだな。鎧甲の形が違うだろう？」

「確かに」

「地味な方が龍乎で、無駄に派手な方が禁軍だ」

「わかりやすいな」

そう言われれば、禁軍の兵士たちに比べ龍乎の兵士たちの鎧甲は、胸甲と背甲を肩の部分で結んだだけの簡素なものだ。禁軍兵の武具はそれよりも重厚感があり、じっくりと眺めれば細部にまで文様が彫り込まれているのがわかる。

「金のかかっていそうな鎧甲だな。あそこまで華美にする必要があるのか？　戦には必要のないものだ

ろう」
「禁軍は皇帝陛下の直属だからな。外見も大事なんだよ」
「ふむ。そういうものか」
　禁軍の兵士の姿も見えるが、やはり多いのは龍乎の兵だ。みな緊張した顔付きで、周囲を絶えず警戒している。
「禁軍が出るとは、よほどのことなのだな。そこまで治安は悪くなっているのか」
「勅令が出された時よりは回復していると思うが、これればかりは一日やそこらで収まるものでもないからな。それでも、この辺りはまだ治安がいい方だろう」
「確かに、花街では出歩く者も少なかったな」
「あそこはまだ独自の規律があるから、あの程度で済んでいる。警備の手が届かない貧民窟辺りは、本当に酷いだろうな」
「そうか……」
　賑わいがあるのは、治安が守られている証拠だ。仲望の言うように、疫が流行った地域にまではまだ警備の手が届かないのだろう。もしくは捨て置かれているのか。
「あそこの角を曲がればすぐだ」
　春蘭は仲望の手を引いて、脇道を指差した。
　しかし、翰栄に会うのはいいが、紅燕の言葉をどう告げればいいのだろうか。率直に、妓楼へ足を運んでほしいと頼むか、それとも宴の予定を訊ねるか。その前に、蟬英のことを告げなければならないが――。
「確か、この辺りのはずだ」
　脇道の幅は表通りに比べれば狭いが、それでも二台の俥がすれ違えるほどの幅はある。
　こちらも当然のように人通りはまばらで、開いている店も少ない。以前の活気溢れる光景が嘘のようだ。
「どんな家なんだ？」

「茶房だったと記憶している」
「だったら見つけやすいな」
「うむ」
扱っているのは高級な茶葉だと言っていたが、それほど儲けているようには見えなかった。少なくとも、派手な妓楼遊びができるほどとは思えない。しかし、紅燕や月儀は翰栄のことを上客として扱っている。真っ当に働いているようには見えなかったから、実家が裕福なのだろうか。
「春蘭、あそこじゃないか？」
「どれ」
仲望が指差した場所には、〝東州茶房〟という看板が掲げられていた。しかし、店の引き戸は固く閉ざされている。
以前、ここを訪れた際は、扉は開けられており外から中を覗けるようになっていた。
「休みか？」
「そのようだな……」
茶房は休みでも、住人はいるかもしれない。ここで諦めては紅燕になんと言われることか。
溜息をつき、春蘭は茶房の前に立った。
「ふむ。裏に回った方がよいかの？」
「春蘭、少し待っていてくれ」
そう言うと、仲望は隣の店に声をかけた。陶器を扱う店のようで、しばらくすると奥から店主らしき初老の男が顔を出す。仲望の姿を見ると、愛想のよい笑みを浮かべた。
「なにかご入り用でしょうか？」
「すみません、少し伺いたいことがあるんですが、隣の茶房はお休みなのでしょうか？」
「ああ。東州茶房さんは、休みではなくて店を畳んだんですよ」
店主の言葉に、春蘭と仲望は思わず顔を見合わせた。
「少し前に店を閉めて郷里に帰ると挨拶に来られましてね」

「それは、どれくらい前ですか？」
　店主は考え込むように顎を撫で、少ししてから口を開いた。
「十日……いや、もっと経ってますかね。私はてっきり、疫から逃れるために華安を出て行くのかと思いましたよ。戻ってくる様子はないんで、本当に郷里に帰ったんでしょうな」
「その、郷里についてはなにか？」
「もともと深い付き合いがあったわけじゃないんですよ。そりゃ、お隣さんですし茶器のご注文もありましたがね。顔を合わせれば挨拶する程度です。もしかして、お知り合いでしたか？」
「ええ、そうなんです」
　店主と仲望との会話を聞きながら、春蘭はなにか腑に落ちないものを感じた。店主の言葉を信じるならば、翰栄は最後に顔を合わせたあと、そう間を置かずに華安を出たことになる。
　確かに、黄海楼での翰栄の態度はいつもと違っていたが、郷里に戻るのならば一言あってもいいはずだ。
「すまぬが、呂翰栄という男を知っているだろうか？」
「はあ」
「茶房に居候していた若い男だ」
　春蘭の問いに、店主は首を傾げた。
「なにか勘違いしているんじゃないかい？　お隣さんは、中年の夫婦が切り盛りしていて、同居人がいるとは聞いたことがないよ」
「そんなわけはない。私は茶房の奥にある室に案内されたこともある」
「でも、挨拶にきたのはその二人だけだったよ。客足は羨ましいくらいあったからね。儲かっていただろうに、なぜ店を畳むのかと疑問に思ったほどだよ」
　それに反応したのは仲望である。
「客の年頃はわかりますか？」

意図の読めない質問ではあるが、人のよい店主は疑るような素振りも見せずに答えた。

「さあて。店先で仕事してる時しか見てませんからねぇ……若い方が見える時もあれば、年配の方が見える時もありましたよ」

「格好はどうでしょう。整った身形をしていましたか？　それとも、下働き風でしたか？」

「下働きの者もいたとは思いますが、よく訪れる方はみなさん小綺麗な格好をしていましたよ。高級な茶葉を扱っているようでしたから、お客様もそれに見合った階級の方なんでしょうね」

「そうですか……色々と伺ってすみませんでした」

困惑する春蘭の手を握り、仲望が通りに向かって歩き出す。背後からは店主の、「陶器がご入り用の際はぜひお声がけください」との声が響いた。

「仲望、さっきの質問はなんだ？」

「確めたかったんだ。店主が言っていたように、高級な茶葉を愛用する者は限られる。だが、裕福な者は茶葉を買いに店頭へはやってこない。注文書を下男にもたせて、屋敷に届けさせるんだ。それに茶葉は日持ちするから、たいていはまとめて購入する。頻繁に茶房を訪れる客は珍しい」

「夫婦の友人である可能性もあるぞ」

「年配の客はそうかもしれないけど、若い客もいたわけだ。全員がそうだとは思えない」

怪しい。仲望はそう言いたいのだろう。その気持ちは春蘭も同じである。もともと翰栄には不審な部分が多かった。

知っているのは名前と家だけだったが、占の最中に名は偽りだとわかった。そして今、家も同じだったと発覚している。もっとも家の場合は、隣の店主の勘違いという可能性も残っているが。

「……私は謀られたのだろうか？」

「どうだろう。春蘭や妓楼のみんなを謀っても、益があるとは思えない。ならば、己の身元を偽らなければならない事情があったのだろう」

「事情、か」
「もっとも、そこまでして妓楼に通うというのも疑問だが」
「……蟬英ならば、なにか知っていたやもしれぬな」
そういえば、と春蘭は翰栄に出会った時のことを思い出した。助けてもらった礼として、翰栄の将来を占った際、出た卦はずいぶんと珍しいものであった。
翰栄の進む道は、あまりにも多くの者たちがかかわっており、本人の選択のみならず周囲の者の選択によっていかようにも変わる。
本名で占えば、もう少しわかったかもしれないが、それでも未来が定まっていないことに違いはなかった。
「とりあえず、妓楼に戻ろう。郷里に戻ったらしいと告げれば問題はないのだろう？」
「紅燕は落胆するだろうがな」
仲望の言葉に、春蘭は苦笑した。もっとも、今の紅燕ならばすぐに頭を切り替えて、新しい馴染みを得るべく奮闘するとは思うが。
龍神大路へと戻った春蘭は、忙しなく行き来する人の流れを見詰めながら、ふと蟬英のことを思った。彼女の死は、未だに春蘭を苦しめる。彼女を失ったのは妓楼の者たちも同じだが、彼らはその哀しみを乗り越えようとしている。
生きるためには、いつまでも故人に囚われたままではいられないのだ。
「誰が死んでも、日常は変わらぬのだな。みな、生きるために働き続けている」
春蘭の呟きは小さなものだったが、隣を行く仲望には届いたようだ。繋いだ手に力が籠もり、それからしっかりと握り直された。
「故人はいずれ、過去のものとなる。胸に巣食う哀しみも、時と共にいずれ薄れてしまうのだろうか。それが、堪らなく寂しい……」

「……春蘭」
「そんな情けない声を出すな。辛くはあるが、いつまでも哀しんでいては蟬英に叱られるとも思うのだ。あれはそういう女だ。きっと、みなが必死に黄海楼を立て直そうとする姿を見て、喜んでいるはずだ」
「そうだな」
見上げれば、仲望が穏やかな顔で微笑んでいた。思えば、仲望にもずいぶんと心配をかけてしまった。
時間が許す限り春蘭の傍にいてくれたのも、一人にしておくのが不安だったからだろう。まるで雛を守る親鳥のようだ。
「……世話をかけたな」
「俺は自分のしたいようにしただけだ。礼は、祥琳や妓楼の人たちに言うといい」
「うむ」と、春蘭は素直に頷いた。祥琳は自身が病みあがりであるにもかかわらず、なにかと春蘭の体を気遣ってくれた。
月儀も忙しい中、日に一度は春蘭の様子を見に訪れ、紅燕も顔を見掛ける度に高飛車な態度ではあるが必ず声をかけてきた。
その他にも、顔見知りの者たちが、常に春蘭のことを気にかけてくれていたように思う。
「……ずいぶんと、私は周りの者たちに心配をかけていたようだ」
ようやく周囲に目を向ける余裕を取り戻した春蘭は、自分がどれほどみなに大切にされて生活していたのか、実感した。妓楼の者たちを助けたいと思っていたのに、助けられていたのは他ならぬ自分自身であった。
「啓璋と友寧もそこに入れてやってくれ。帰る度に春蘭のことを聞かれて、納得するまで放してもらえなかったからな」
「そうか」
肩をすくめる仲望に、春蘭は思わず笑みを零した。一度、鄭家に顔を出し、自分はもう大丈夫だと告げた方がいいだろう。

そうしなければ、これからも仲望が質問攻めにあいそうだ。

「わかった。白雪にも会いたいし、そろそろ顔を見せに――」

行こう、と告げようとした時だった。

春蘭の腰紐に吊るしていた玉が鈍い光を放ったかと思うと、目の前に巨大な虎が現れた。金色の瞳が、主である春蘭の姿を映す。

神獣である白桃は、己が姿を現せばどうなるかくらい弁えている。

だが、それを承知のうえで玉から出たということは――。

春蘭の視線が周囲をさ迷った。

往来は、いきなり現れた大虎のせいで混乱に陥っている。我先に逃げようとする者や、あまりのことに腰を抜かし震えている者もいる。こちらに向かって駆けてくる兵士たちの姿も見えた。

必死に子供を抱き寄せる母親。

荷物を投げ捨てて逃げる男。

転んだのか、地面に蹲る老人。

春蘭たちに向かって、必死に逃げろと叫ぶ男もいる。

だが、そのすべてが一枚の透明な壁を隔てているかのように見えた。

悲鳴も、怒声も、酷く遠くに聞こえる。

ゆっくりと、ゆっくりと、春蘭は辺りを見詰めた。

そして、ある一点。混乱のさなか、微動だにしない男がいた。

薄汚れた短服に、大きな荷物を背負っている。一目で、旅人とわかる格好だ。ただ、結い上げた髪を巾で包むのではなく、黒い布を頭全体に覆うようにして巻きつけていた。

見間違えるはずもない。網膜に焼きついて離れない憎き男。

――鄭玄楽の姿がそこにあった。

「バウウウッ！」

春蘭を現実に引き戻したのは、白桃の咆哮だった。次の瞬間には白桃に襟首をくわえられ、屋根のうえにいた。いつの間にか、仲望の手を放していたことに気付く。

「春蘭っ！」

声のする方を見ようとしたが、白桃に遮られてしまう。

背に乗れというように首を振ってみせた。白桃もわかっているのだろう。真正面から挑んで、勝てる相手ではないと。

跨った次の瞬間には、白桃は弾けるように走り出した。脚力を利用し、屋根から屋根へと飛び移っていく。

「逃がさねぇ」

背後から響く声に、春蘭は震えた。覚悟はできていたはずだ。だが、いざ相手を目の前にすると恐怖心が勝った。

白桃にしがみつきながら、春蘭は唇を噛み締めた。玄楽の意識を奪うことができれば、こちらにも勝機はある。

守り神である春蘭は、真名を奪われたものの、完全に隷属させられたわけではなかった。玄楽の名を、春蘭の魂に刻む。そこではじめて隷属が成立する。まだ最後の砦が残っているのだ。

だが、真名を奪われている以上、春蘭は守り神に戻ることはできない。戻った途端、やすやすと名を刻まれてしまうだろう。だからこそ、意識を奪う必要がある。

玄楽が気を失っている間に守り神に戻り、真名を取り戻すのだ。それが、唯一の方法である。殺してしまえば、真名は玄楽と共に失われてしまう。

手段はわかっていても、玄楽を気絶させるのは難しい。罠にでも嵌めない限り、こちらに勝機はないだろう。

「逃がさねぇ、って、言ってる、だ、ろ！」

振り向けば、玄楽が匕首を投擲したところだった。数は三本。空を切り裂くそれは、春蘭に到達する前に白桃の尻尾によって叩き落とされる。

「ちっ、面倒な神獣だ」

気術を使っているのだろう。玄楽の体から立ち昇る、白い光のようなものが見えた。

春蘭の小さな体が、白桃の動きに合わせて激しく上下する。手を放してしまいそうになるが、ここで落ちてしまえばお終いだ。なんとかこの場から逃れなくてはならなかった。

しかし、相手もまた、そう簡単には逃がしてはくれないようだ。続いて投げられたのは縄である。普通の縄ではなく、先端に丸い錘がついている。狙いは白桃だ。

後ろ脚目掛けて投擲されたそれを、白桃は尻尾で叩き落とすことができない。右後ろ脚に絡みついた縄は、動きを鈍らせるに充分なものだった。続いて、二投目が白桃を襲う。縄を引く玄楽の強靭な腕力には、さすがの白桃も脚を止めざるを得ない。

「なぜだ」

縄の端を腕に巻きつけた玄楽が、春蘭の言葉に反応する。

「私を隷属させてどうする。死ぬぞ」

隷属は、力ある者が己より下位の者を従えるのが常だ。下位の者が、己よりも力のある者を従えるなど聞いたこともない。

不可能ではないが、玄楽は神の力に耐えられず数日で命を落としてしまうだろう。そして、彼に隷属を強いられた春蘭もまた――。

「……あんたにゃ関係のないことだ」

「関係はある。そのせいで、私はここにいるのだ。ないなどとは言わせぬ」

結果、春蘭は三百年という長きにわたり守護してきた邑を離れなければならなくなった。

邑のある場所は洪水が起こりやすい地形をしてい

る。守り神の守護がなければ、雨季を乗り切れるかどうか危うい。

春蘭がここで玄楽に負ければ、同時に多くの邑人たちの命が失われるかもしれないのだ。

「ぬしがなにを企んでいるかはわからぬ。だが、それは命を賭すほどのものなのか？　悪いことは言わぬ。私に真名を返し、他を当たれ」

「むりだな。これがようやく見つけた解決策なんだよ」

「では、私に事情を話せ。私は守り神だ。ぬしも知らぬ方法を知っているかもしれぬぞ」

玄楽から真名を奪えれば、それに越したことはない。だが、力の差が歴然としている今、武力での奪還は不可能に近かった。ならば、春蘭を隷属させなければならない原因を解決し、玄楽に真名を放棄させればいい。

「話せと言われて、素直に話す馬鹿はいねぇよ」

「命が惜しくはないのか？」

「惜しいさ」

即答されたそれに、春蘭は眉を寄せた。

「だが、命以上に大切なものがある。ただそれだけだ」

「……それは、己の死を偽ったことと関係があるのか？」

答えはなかった。無駄口はここまでだというように、玄楽は縄を手繰り寄せる手に力を込めた。白桃が脚を踏ん張って堪えるが、じりじりと玄楽に引き寄せられる。

白桃を玉に戻すこともできるが、屋根の上にいる限り春蘭に逃げ場はない。このままでは捕まってしまう、と唇を噛んだ時だった。

屋根と屋根の間にぴんと張られた縄が、一本の矢によって切断された。

春蘭が白桃の背に乗って走り去ったあと、それを

追うように一つの影が動いた。まさか、と仲望は己の目を疑った。一瞬かいま見た横顔は、間違いなく兄、玄楽のものだ。

無我夢中だった。気付けば、仲望は騎兵を馬上から引き摺り下ろし、弓を奪うと、馬に跨って春蘭のあとを追っていた。気術を使う玄楽は仲望にとってなによりもわかりやすい目印だった。仲望の右目は、人のそれとは違う。

四年前の戦で仲望の体内に埋め込まれた玉が暴走し、以来、右目に気が集まるようになってしまったのだ。

眼球が壊れた玉の代わりとなっているため、気術を使うこともでき、さらなる副産物として気の流れを視られるようになった。このような事例は他にはないのだと、治療を行った医師は言っていた。奇跡にも近い偶然だ、と。

日常生活に支障をきたすからと、前髪で隠していた右目が今は役に立っている。玄楽の体から立ち昇る気は、遠くからでもよく目立つ。仲望はその方角に馬を走らせればいい。

馬蹄の音を聞いて皆が、慌てて脇に飛び退いた。警備の騎兵と勘違いしているのだろう。兄の気が近くなり屋根を見上げれば、玄楽が縄を投擲したところだった。

それは白桃の右後ろ脚に絡まり、動きを阻害する。続けて投げられた縄はもう片方の脚を捕らえ、白桃は動きを完全に止められてしまった。春蘭と玄楽はなにか言い争っているようだ。

仲望は馬を走らせながら弓を構える。

まだ、この距離では届かない。焦りながらも、頭の中は冷静だった。もっと近付かなければ。もっと、もっと――。

緩みなく張られた縄。その一点に意識を集中させ、矢を放った。その行方を見届けぬまま、次の矢を番える。二本目の縄が切れ、仲望は次に矢の先を玄楽に向けた。しかし、牽制のために放った矢は、玄楽

が抜き放った剣によりあっけなく打ち落とされてしまう。

舌打ちし、仲望は手綱を引いた。そして、腹の底から声を張りあげ、縛めから解放された白桃の名を呼ぶ。

呼応するように咆哮した白桃は、玄楽を警戒しながらも屋根から飛び降り、仲望の許へと駆け寄ってきた。

「こっちだ！」

馬から下りた仲望は、何事かと駆け寄ってきた龍乎の兵から問答無用で剣を奪った。

「できるだけ時間を稼ぐ。春蘭を連れて逃げろ」

「バウッ！」

春蘭がなにか言おうとしたが、その前に白桃が走り出した。

仲望は玄楽に向き直り、剣を構える。屋根から下りた玄楽は、いつの間にか顔を隠すように口元を布で覆っていた。

「ここは通さない」

切っ先を玄楽へと向ける。相手もまた、無言で剣を構えた。

残像が見えるほどの速さで振り下ろされた剣を、仲望は反射的に受け止めた。頭ではなく、体が勝手に動いた。そうでなければ、一刀両断、斬り伏せられていただろう。

両腕に凄まじい負荷がかかる。押し切られるわけにはいかない。

「――どうして、生きているなら報せをくれなかったんですかっ」

「……」

春蘭と出会い、玄楽が生きているかもしれないとわかった時から聞きたかった。

間近で告げた言葉に、相手は目を細めただけだった。記憶に鮮明に残る赤みがかった茶褐色の瞳は、同じようで違う。仲望に向けられる視線は常に力強く、それでいて楽しげに輝いていた。



――こんな、無機質な瞳を自分は知らない。

唇を噛み締め、渾身の力で剣を撥ねあげる。だが、仲望が体勢を整える間もなく、真横に斬り払われる。辛うじて受け流すが、続けざまの猛攻に後退を余儀なくされる。

「答えてください、兄上！」

縋るような思いで呼び掛けるが、やはり反応はなかった。仲望は歯軋りする。

昔からそうだった。玄楽は、大切なことほど仲望に教えてくれなかった。弟に心配をかけないようにと、配慮してくれたのだろう。だが、仲望にとってそれは、透明な壁のように思えてしかたなかった。

なんだって話してほしかった。辛いことでも、大変なことでも、嬉しいことだって。頼ってほしかったのだ。弟として、一人の男として。だが、玄楽の瞳には、仲望は小さな子供としてしか映ってはいなかった。

昔も、今も――。

「なぜ、春蘭を狙うのです！」

攻撃を受け流しながら、仲望は諦めずに問い掛け続けた。

せめて相手の優勢を崩そうと、足許を狙うがすぐに避けられてしまう。攫猿の件でも痛感したが、思っている以上に体が鈍っているようだ。

禁軍を離れて四年。自分はいったい、なにをやっていたのだろう。右目の不利と、左足の後遺症、それに兄という大きな目標を失ったことを理由に、怠惰な生活を送ってきた。

それが、どれほど愚かなことであったか、このような形で思い知らされるとは。

相手は息一つ乱していないのに、仲望は全身にびっしょりと汗を掻いていた。肩で荒い息をつき、剣を握る手からは徐々に感覚がなくなりつつある。このままでは、自分の体力が尽きる方が早いだろう。

「兄上！」

「――人違いだ」

ようやく返ってきた言葉は、取りつくしまもないものだった。人違いであるはずがない。思わず頭に血がのぼりかけたが、仲望は強く自制した。

そして、深く息を吸ってから、構えていた剣を下ろす。玄楽の目が、訝しげに細められた。

「あなたが兄でないというなら、俺を斬れますよね？」

「……」

これは賭けだ。

この男の前で無防備な姿をさらせば、命はないだろう——普通なら、ば。

そもそも仲望は、昔から一度として玄楽に勝てた例がなかった。禁軍に入ったあとも、兄との差は歴然としていた。四年経ってもまったく太刀筋の衰えない相手に、怠惰な生活を送っていた自分が敵うわけもない。

しかし、玄楽は仲望に容赦ない攻撃を加えるが、けっして急所を狙っては来なかった。気術を使う素振りもない。手加減されていたのだ。そうでなければ、すでに斬り伏せられていただろう。

「斬れませんか？」

仲望は柄から手を放し、挑発した。地面に剣が転がる。

玄楽は動かない。なにかを考えるように、こちらを睨みつけている。

「……お前は馬鹿か」

呆れたような声が漏れた。

兄上、と呼び掛ける前に、玄楽が剣を振りかぶる。斬られると覚悟を決めた瞬間、横合いから怒声が響いた。

「食らえ！」

がきん、と刃の合わさる音が鳴った。

間に割って入ったのは、仲望のよく知る人物であった。

「なに突っ立ってやがる。大人しく斬られようとしてんじゃねぇ！」

短服に鎧甲をつけた姿は、一目で龍乎の兵とわかる出で立ちだ。手には大刀が握られている。

虎慈軍隊長、姫子慮は気の強そうな顔立ちを苛立たしげに歪め、玄楽に攻撃をしかけながら仲望を睨みつけた。

「馬鹿、よそ見するな！」

仲望はとっさに叫んだ。

玄楽は禁軍随一と謳われる実力の持ち主だったのだ。子慮の腕は知っているが、互角に持ち込むことは難しいだろう。

「うるせぇ！」

玄楽に猛攻をしかける子慮だったが、そのすべてを簡単に流され、驚愕に目を見開いた。相手の実力を、見誤っていたことに気付いたのだろう。表情を引き締めると、相手の出方を見定めるように大刀を構え直した。

「おい、てめぇ。何者だ」

「……」

「けっ、だんまりか。どうでもいいが、俺様の管轄で騒ぎを起こすんじゃねぇ！」

叫ぶと同時に、子慮が玄楽に躍りかかった。今度は、隙のない一撃である。しかし、それをも玄楽は見事な足捌きで避け、子慮の首筋目掛けて剣の切っ先を繰り出す。

子慮は上半身を背後に逸らすことで避け、そのまま地面に片手をつくと玄楽の腕を蹴り上げた。だが、容赦のない一撃を食らっても、玄楽は微動だにしない。

手首を返し、子慮の体を刺し貫こうとする。子慮は体を捻ることで串刺しを回避したが、鎧甲に当たった刃が鈍い音を立てた。

飛び跳ねるようにして距離を取った子慮は、圧倒的な強さを持つ相手に、心の底から楽しいと言わんばかりの笑みを向けた。

これは面倒なことになりそうだ、と仲望が舌打ちした瞬間、玄楽目掛けて複数の矢が放たれる。むろ

ん、易々と射られる相手ではない。軽く剣を振るだけで、矢が地面に叩き落とされた。

「――さて、観念してもらいましょうか」

射兵を従えていたのは、子慮の副官、杜文重（とぶんちょう）である。龍乎の鎧甲を身につけていなければ、朴訥（ぼくとつ）そうな雰囲気からはとても剣を振るう兵士とは思えないだろう。

その背後には、同じ格好をした四人の兵士たちが玄楽に向けて矢を番えていた。

「くそっ、文重！　いいとこで邪魔すんじゃねぇ！」

「隊長は口を閉じていてください。どう見ても、あなたの方が押され気味だったでしょうが。死にたいんですか」

「うるせぇ！」

「ほら、さっさと退く。邪魔ですよ」

文重が子慮を下がらせている間に、反対側からも兵士たちが駆けつけてくる。

実力は玄楽が抜きんでているが、集まった兵士たちは捕り物を職としている。剣だけでなく、槍や縄で相手の自由を奪い取る。捕縛（ほばく）されてしまえば、どれほどの実力の持ち主だろうとどうすることもできない。

残された道は強行突破だが、玄楽はなぜか建物を背にするように後退した。

その意図に気付いた仲望が、「上だ！」と叫ぶが、わずかの差で玄楽は屋根に飛び乗っていた。足許から気が立ち昇るのが、仲望には見えた。気術を使用したのだ。

「射よ！」

文重が叫ぶが、距離が開いただけ矢の威力も落ちる。玄楽は軽い足取りで、あっという間に姿を消してしまった。屋根を渡る音だけが響く。

「追うぞ！」

「方向音痴のくせに、なにを言ってるんですか。手配はしておきますから、隊長は追い掛けたりしない

でください。いいですね、絶対に、ですよ。この忙しい時に迷子になられたら堪ったもんじゃありません」

子慮の主張を一刀両断すると、文重は集まってきた兵士たちにあれこれと指示を出す。仲望は不貞腐れる子慮に声をかけた。

「……そういえば、どうしてお前はここにいるんだ？」

「ああ？　んなの、自分の管轄を見回ってなにが悪い」

「いや、ここはお前のとこじゃないぞ？」

正確に把握しているわけではないが、大体の配置は頭に入っている。途中までは確かに虎慈軍の管轄だったが、この辺りは孤崔軍が警備を担当しているはずである。

「あー、小さいことは気にすんな！」

確か、各軍にも確執があったと記憶しているが、子慮にとっては意味がないのだろう。溜息をついた仲望は、ふいに強い眩暈に地面に座り込んだ。

気付けば全身が汗塗れで、手や足が小刻みに痙攣している。心臓も嫌なほど早く脈打ち、吐き気までが込みあげてきた。

口元を押さえていると、呑気な子慮の声が聞こえた。

「吐いちまった方が楽だぞ」

「……うるさい」

「はっ、不様だな！　体を鍛えてねぇから、こんなことになるんだよ」

「……」

返す言葉もない。入隊したての新兵の方が、今の仲望よりまだましだろう。

吐き気を堪えながら体力回復に努めていると、指示を出し終えた文重が近付いてきた。

「先ほどの男は何者ですか？」

「お、そうだ。知り合いか？」

「隊長。知り合いと斬り合うわけないでしょう」

「なんだ、違うのか？」
　仲望は言いよどんだ。玄楽は四年前に死んだことになっている。ここで兄の生存を主張しても、信じてもらえるかどうか。
「……俺も知らない。春蘭が襲われて――そうだ、春蘭は！」
　上手く逃げ切ったとは思うが、胸に巣食う不安は消えない。なんとか立ち上がるが、足許がふらつき文重に支えられてしまった。
「春蘭なら無事ですよ。覚程たちと一緒に詰所に避難しています」
「どうして龍乎と？」
「巡回していたところに、白桃がいきなり現れたんですよ。街中で出てくるのは勘弁してもらえませんかね……。まあ、緊急の事態だったのでしょうが。それで、あなたを助けてくれと言われましてね。酷く取り乱した様子でしたから、早く顔を見せてあげてください」
　安堵のあまりまた座り込みそうになるが、両足に力を込め文重の肩から手を放した。春蘭が子慮たちに会えたというのは運がよかった。もしくは、白桃が機転を利かせたか。
「案内を頼めるか？　むろん、子慮以外で」
「もちろんです。ほら、隊長。いつまで不貞腐れてるつもりですか。戻りますよ」
　ここの主従関係は相変わらずのようだ。と、文重が思い出したように仲望を振り返った。
「そうそう。うちの管轄で、巡回中の兵が見知らぬ男に騎馬を奪われる事件がありましてね。詰所に戻ったら、そのことについてもぜひお話を伺わせてくださいね」
「……あれだ。緊急の事態だったんだ」
「ええ。ですから、詰所でじっくり聞かせていただきますよ」
「文重はしつこいからな。諦めた方がいいぞ」
　子慮の言葉には、身を以て体感しているだけに妙

な重みがあった。仲望は額に手を当てて息を吐く。

とりあえず、詰所でもなんでも、今は一刻も早く春蘭の無事な姿を確認し、安全な場所で体を休めたかった。

案内された室の隅で、春蘭は蹲っていた。

ここは虎慈軍の詰所でも奥に位置していた。床も土間ではなく、木板が張られている。座卓には筆に硯、白い紙の束が置かれていた。脇にも書物が積みあげられ、ここが雑務をこなす部屋だということがわかった。

春蘭は横たわる白桃の腹部に顔を寄せ、耐えるように瞼を閉じていた。脳裏を過るのは、玄楽の顔である。

いずれ必ず相対しなければならないと覚悟していたにもかかわらず、春蘭の胸を支配したのは底知れぬ恐怖だった。

真名を奪われ、服従させられそうになった時の光景がまざまざと蘇る。人に戻るのが一拍でも遅れていたら、春蘭は確実に隷属させられていた。守り神である春蘭にとって、それはあまりにも屈辱的な記憶だ。

おそらく、玄楽もそれがどれほど無謀なことかわかっているのだろう。わかっていてもなお、春蘭を隷属させようと迫ってくる。今回も以前同様からくも逃げ切ることができた。だが、次は――。

それに……と仲望を思って、春蘭は溜息をつく。

仲望を巻き込んでしまった。あの時、時間を稼ぐから逃げろと、彼は言った。玄楽と戦うつもりなのだろう。

そのせいで、望む望まぬに係わりなしに、兄に刃を向けさせてしまった。後悔してもしきれない。居候を始めた頃は、こんなことになるとは思いもしなかった。

龍天山に向かった時もそうだ。怪我が完治して

いないにもかかわらず、終始、己のことを気遣ってばかりだった。

——仲望は無事だろうか。

子慮と文重がすぐにあとを追ってくれたが、もしも間に合わなかったとしたら……。

いや、仮にも仲望は玄楽の弟だ。行く手に立ち塞がったとしても、殺すことはないだろう。悪くて怪我を負う程度——そう信じたかった。

「私は……愚かだ……」

玄楽が春蘭を追って華安に来ることは予想していた。

警戒もしていたはずなのに、いつの間にか薄れてしまっていた。のこのこと街中に出るなど、振り返ればどれだけ無謀だったかわかる。翰栄を訪ねるだけだからと、簡単に考えていたのだ。その結果がこれだ。

真名を奪われた時もそうだった。守り神に手を出す不届き者はいないと、高を括っていた。相手を警戒していたならば、真名を失うという愚を犯さずに済んだだろう。

そして今回も、己の浅薄のせいで、仲望まで危険にさらしてしまった。

これでまた仲望が怪我を負うようなことになれば、春蘭はけっして己を許せない。無事を祈ることしかできない自分が歯痒かった。

「——春蘭」

どれくらい経っただろうか。

不意に、頭上から労るような声が響いた。待ち望んだ声なのに、自分の愚かさを直視するのが怖くて、のろのろと顔をあげれば、安堵の表情を浮かべる仲望と目が合った。

怪我を負った様子はない。だが、剣を受けた短服はぼろぼろで、剣戟の凄まじさを物語っていた。

「春蘭、怪我は？」

「……馬鹿者め。強くもないくせに……私を……庇ってどうする……」

視界が歪んだと思うと、手の甲や白桃の毛に大粒の雫が落ちた。

「死んだら……どうする……」

仲望も蟬英のようにいなくなってしまったら。そう思うだけで、涙が次から次へと溢れ出る。上手く呼吸ができず、のどの奥から掠れたような音が漏れた。

しゃくりあげるように嗚咽を零すと、仲望の腕に引き寄せられた。

「怖かったな」

「……当たり前、だ！」

「俺も、まさかあそこまで自分が弱いとは思わなかった。攫猿の時は楊秀がいて、龍天山の時は、相手よりも実力が少しだけ勝っていただけだった。今日は色々と思い知らされたよ」

抱き締められ、宥めるように背中を撫でられる。ただそれだけで、昂っていた感情が徐々に落ち着きを取り戻し始めた。

「俺はだめだな。春蘭を助けると言ったくせに、まったく実行できていない」

「……助けてくれたではないか」

ぐずっ、と鼻を鳴らして春蘭は顔をあげた。きっと涙で酷いことになっているだろう。それでも、しっかりと仲望の目を見詰める。

「縄を切ってくれた。そのあとも、足止めまでして。ぬしがいなかったら、私は逃げ切れなかった。だから、助かった……ありがとう」

目を逸らさずに伝えれば、仲望の瞳が微笑むように細められた。

「仲望も怪我はないか？」

「ああ」

春蘭の涙を、仲望が優しく短服の袖で拭う。壊れ物でも扱うような手付きに気恥ずかしさを覚え、春蘭は身をよじった。

「じっとして」と、仲望に真顔で告げられ、渋々と動きを止める。すると、扉の方から呆れたような声

が聞こえた。
「あのー、いい雰囲気のところすみませんが、そろそろお邪魔してもいいですか？」
顔をあげれば、扉に寄りかかるようにして文重が立っていた。だが、その視線はどこか遠くを見詰めている。
「なんでしょうね、この一人だけ場違いな空気は。ええ、わかってますよ。自分がお邪魔虫だということくらい痛いほど感じています。でもね、仕事なんですよ、仕事」
「文ちょ――」
「なんですか、仲望さん。別にひがんでませんよ。可愛いな、いいなって思う子に想いを告げても、みな口を揃えたように〝文重様ってお母さんみたいで、異性として見られないんです〟って、お断りされますがね」
あはは、と文重は虚ろな眼差しで乾いた笑い声をあげた。
「……色々と済まなかった。ところで、子慮はどうしたんだ？」
「隊長なら、暴れ足りないと言って、管轄内でも治安の悪いところに向かいましたよ。迷子防止のために覚程たちを同行させましたし、それなりに満足したら帰ってくるでしょう」
「あいつも相変わらずだな……」
「まったくです。特に最近おかしなくらい元気いっぱいで。面倒事ばかり引き起こしてくれるんですよね」
なにがあったのかは知らないが、子慮も文重も無事なようだ。春蘭は安堵の溜息をついた。街の治安を守るのが仕事とはいえ、彼らも春蘭の事情に巻き込んでしまったことに変わりはないのだ。
「とりあえず、騒ぎになる前に白桃をしまってくれるかな？　人払いはしたけど、目撃者がいないわけではないからね」
文重の言葉に、白桃は「バウウウッ」とひと鳴き

すると、春蘭が命じるよりも先に玉へと戻っていった。

「物分かりがよくて助かるよ。さて、春蘭。落ち着いたところで、なにがあったのか話を聞かせてくれるかな？」

迷惑をかけてしまった手前、黙っているわけにもいかない。だが、正直に話したところでどこまで信用してもらえるか。

それに、玄楽の正体を教えることもできない。四年前に死んだ人間が生きていたと知れたら、間違いなく仲望に迷惑がかかるだろう。

「理由は話せぬが、街中でいきなり襲われたのだ。だから、私は白桃に乗って逃げた」

「……理由は、教えてもらえないのかな？」

「文重は白桃がどのような存在か、理解できぬであろう？　それと同じことだ。聞いたところで、それをそのまま報告すれば正気を疑われる。ならわからぬままにした方がいい」

白桃を例としてあげたので、文重からは苦笑が返ってきた。

どうやら、それで納得してもらえたようだ。

「じゃあ、春蘭を襲った男に見覚えは？」

「……ない。逃げることに精一杯で、相手をよく見ていなかった」

視界の片隅で、仲望の肩がぴくりと動いた。だが、文重に不信を与えないためにも、仲望の様子を窺うことはできなかった。

「でも、かなりの手練だったよ。うちの隊長でも歯が立たなかった。なにより、民家の屋根に飛びあがるなんて芸当は、簡単にできるものじゃないからね」

なおも疑うような文重の視線から目を逸らせば、溜息が聞こえた。

「とりあえず、不審者として手配はしたからね。捕まるまでは、春蘭もあまり外を歩かないように」

「あの男のことで、なにか新しい情報があったら教

えてもらえるか？」
「まあ、すべてを教えることはできないけど……」
「それでかまわぬ。私は黄海楼という妓楼にいるので、巡回の際でも鄭家に寄って伝言を残してくれると助かる」
「……んん？　なにか、ものすごく聞き捨てならない言葉が聞こえたけど、空耳かな？」
「……空耳だ。そうだな、春蘭？」
「う、うむ」
仲望の有無を言わせぬ視線に、春蘭は首を傾げつつも頷いた。しかし、そこでふと、紅燕の言葉を思い出す。
「おお、そうだ。よかったら妓楼に来てくれてもいいぞ。今はあいにく休業中だが、黄海楼は名妓揃いだ。母親みたいなどと言う、気の回らぬ娘などよりお薦めだ」
にっこりと微笑めば、同じような笑みを浮かべた文重が、仲望の胸倉を摑み上げた。
「……仲望さん。ちょっと別室に来ていただけますか？　今回の件よりも、よほど話し合わなければならない事実が発覚しました」
「いや、待ってくれ。これには事情が」
「春蘭はここで待っててね。すぐに済むから」
「うむ」
頷けば、なぜか顔を引き攣らせた仲望を、文重はずるずると引き摺って行った。急に静まり返った室内に、春蘭は小さく溜息をつく。
仲望の無事を確かめ、先ほどよりも気持ちはだいぶ落ち着いていた。冷静になって今一度、玄楽について考えを巡らせる。
玄楽の目的は不明だが、あの様子では絶対に諦めない。いずれ再び春蘭の前に姿を現すだろう。
しかし、困ったことになった、と春蘭は胸の中で思った。これまで春蘭の居場所が知られていないのは幸いだったが、仲望と繋がりがあると知られた以上、これから鄭家に戻ることはできない。

妓楼に拠点を移すことになるが、それでは万が一の際に彼らを巻き込んでしまう恐れがあった。

「策を練らねばならぬか……」

いざという時に無策では、あまりにも心許ない。それに、できるならばこれ以上、仲望も、妓楼の者たちも春蘭の事情に巻き込みたくはなかった。

沈黙のとばりが降りた室内で、春蘭はひどく疲れた様子の仲望が戻って来るまで、玄楽を捕らえる策を練り続けていたのだった。



呼び出しがあったのは、隠れ家に戻った翌日の夕刻のことだった。

あれから砦に籠もること丸二日。妖(あやかし)たちは確実に数を減らしつつあった。洪采や冬雁(とうがん)は、交替で休息を取りながら妖との戦闘に明け暮れていたが、兎天(うてん)から都に戻るようにと指示を受け取った。

洪采と冬雁、それに槍幽(そうゆう)が抜けるということで、砦の者たちは不安げな表情を浮かべたが、命令である。代わりにやってきた者と入れ替わるようにして、洪采たちは華安(かあん)へと戻ってきたのだった。

隠れ家に着いた洪采は、まず体力の回復に努めた。砦では交替で休憩(きゅうけい)はとっていたものの、妖の襲撃に備えて常に気を張っていた。その時は気付かなかったが、肉体的にも精神的にもかなり疲れていたようだ。

隠れ家の一室で、寝台に横になるなり泥のように眠り込んだ。

おかげで、寝台にはしっかりと血と汗の匂いが染み込んでしまった。華安を拠点に活動するようになった洪采に、特別に与えられた個人の房室だっただけに、せめて行水してから寝ればよかったと後悔しても遅い。

そして、不貞腐れながら早めの夕餉を取っていた洪采の許に、緊急の呼び出しがもたらされたのだった——。

向かったのは同じ隠れ家にある一室である。扉を開ければ、すでに冬雁と槍幽が揃っていた。隠れ家ということもあって、冬雁は頭巾を取っている。ど

う見ても十代前半としか思えない可愛らしい顔は、洪采の姿を視認した途端、見事なくらい不快げに歪められた。

「よう、しっかり休めたか？」

「私に話し掛けるな！」

「はいはい」

「なんだその返答は。馬鹿にしているのか！」

冬雁の勘気はいつものことなので、さほど気にすることもなく洪采はぐるりと室内を見回した。

――相変わらず辛気臭い場所だ。

窓もなく、明かりは燭台に頼っている。それも室の隅々まで照らすほどではなく、その大部分は闇に覆われていた。

役人に踏み込まれても逃げられるよう、壁には少なくとも二つの隠し扉が設置されている。ここは敵のお膝元であり、いつ隠れ家の存在が漏れてもいいように仕掛けが施されているのだ。

前回は、あまりの黴臭さに顔の一つも顰めたものだが、今日はまったくわからない。掃除したばかりなどという理由ではなく、未だに妖の血で鼻が機能していないのだろう。そういえば、先ほどの夕餉も味がよくわからなかったな、と洪采は心の中でぼやいた。

やがて扉から、洪采たちを呼び戻した人物、兎天が手燭を持って現れた。

灯りに照らし出される姿は、〝異形〟の一言に尽きる。

体の線を隠すようにゆったりとした白い袍を着付け、顔は鬼を象った舞楽面で隠されていた。素顔はもちろんのこと、年齢も性別も不明である。顔に醜い傷を負っているだの、名のある官吏だったのと、鬼面にまつわる噂は絶えず囁かれているが、真実は未だ不明である。

「――全員、集まっていますね」

中性的な声が薄暗い室内に響く。

手燭を卓に置いた兎天は、洪采たちを確認するよ

うに見回した。
「まずは、ご苦労様でした。数が多くて大変だったでしょう。被害が最小限に抑えられたのも、あなた方のおかげです」
　それに真っ先に反応したのは冬雁だった。乏しい灯りでもわかるほど、顔を輝かせている。その眼差しは一心に兎天へと注がれていた。
「そんなことはありません。与えられた任務は全うして当然です」
「冬雁は相変わらずですね」
　洪采が朱緋に手解きを受けたように、冬雁を鍛えたのは兎天である。
　外見からは腕が立つようには見えない兎天だが、猩猩緋でも一、二位を争うほどの実力の持ち主だ。実力では洪采も敵わない。
　そんな兎天を、冬雁は心から崇拝しているようだ。自分はたとえ師であっても、ここまで朱緋に絶大な信頼を寄せることはできない。
　性格の問題なのだろうな、と洪采は冷めた視線を冬雁に向けた。
「さて、そろそろ本題に入りましょうか。我々猩猩緋は、十日後に行われる宮中での宴に乗り込みます」
　これには、洪采だけでなく、他の二人も言葉を失ったようだ。それだけ兎天が告げた内容は衝撃的なものだった。
「……兎天殿。宮中での宴となれば、皇帝も出席するんじゃないか？」
「もちろんです。宴は疫の終息を祝うものですから、皇帝に皇后、後宮の四夫人、各省の責任者たちも顔を揃えるでしょうね。かなり盛大なものとなるはずです」
　洪采は思わず唸った。疫は終息したとはいえ、それを原因とする治安の悪化は続いている。その最中、宮中で宴を開こうとする者たちの考えが理解できない。街がどんな状況か知らないのだろうか。それと

も、知っていて大したことはないと高を括っているのか。

——だが、問題はそこではない。

洪釆が押し黙っていると、代わりに口を開いたのは槍幽だった。温厚そうな顔に、珍しく深い憂慮の表情を湛えている。

「本気なのですか？」

「ええ」

「……宮中に戦をしかけるのは初めてのことです。宴ともなれば、警備もより厳重でしょう。なにより兵士の質が違います。それを承知の上での命令ですか？」

「もちろんです。民が苦しんでいるにもかかわらず、のうのうと宴に興ずる姿を、黙って見ているわけにはいきません。宴を打ち壊し、皇帝の顔に泥を塗るのです。それに、これが成功すれば、民の支持をさらに得ることができるでしょう」

正論ではある。だが、言葉でいうほど簡単なものではない。

宮中の警備は禁軍の管轄だ。皇帝が出席するとあれば、精鋭中の精鋭が選ばれるだろう。警備も増強されるはず。真正面からぶつかって勝てる相手ではない。

「……無謀だ」

「洪釆！　貴様、兎天様になんという口の利き方だ！」

怒声をあげる冬雁を、洪釆は横目で睨みつけた。

「お前は、この作戦でいったい何人の仲間が犠牲になると思ってるんだ」

「それは……」

「確かに、宴の件を黙って見過ごすのは腹が立つ。だが、俺にはそれが上手くいくとは思えない」

「私も洪釆さんに賛成です。たとえ紅主の命令であっても、こればかりは無謀すぎます。下手をすれば、こちらが大きな被害を出してしまいますよ」

洪釆と槍幽の抗議に、兎天は沈黙した。しかし鬼

面に遮られ、なにを考えているのかまったく読めない。こういうやり取りでは、素顔をさらしている方が不利だ。

「――これは紅主のお考えです」

その一言は猩猩緋に属する洪釆たちにとって、けっして逆らえないものだった。

紅主の命令は絶対である。統制が完璧に取れているからこそ、猩猩緋はここまで生き残れたのだ。

「むろん、作戦は考えてあります。大事なのは、宴を失敗に終わらせること。特定の命を狙うわけではありません。襲撃を短時間で終わらせれば、こちらの被害も抑えられます」

「だが、ここぞとばかりに俺たちを捕らえに来るぞ」

「そうですね。ですが、宴は混乱するでしょうし、自由の利く兵はそれほど多くはないでしょう」

兎天の言葉にも一理はあった。禁軍兵と真正面からやり合うわけでないのなら、こちらの被害も最小限に押し留められるはずだ。

「警固については調べます。槍幽は実力のある者を集めてください。特に弓が得意な者を。接近戦が不得意でもかまいません。洪釆と冬雁も、今のうちに体を休めておいてください」

「はい！」

「やれやれ、戦場から戻ってきたと思えばまた仕事ですか」

冬雁と槍幽が、両極端の反応を示す。特にここ数日でげっそりとやつれてしまった槍幽は、疲れたように肩を落としていた。

「洪釆も、それでいいですね？」

「……命令なら従うさ」

洪釆は幾度となく危ない橋を渡ってきた。もう駄目かもしれない、と死を覚悟したこともある。命令ならば死地にすら、躊躇いなく向かうだろう。

今回は、未だかつてない規模の作戦だというだけだ。危険度も高いが、成功した時の影響も計り知れ

ない。

特に、疫によって人心は朝廷からさらに離れつつある。ここで大きな一撃を加えたいという紅主の思惑も理解できた。

――命令なら、従う。それでいい。

洪采は自分にそう言い聞かせ、兎天の確認に頷いた。

「では、必要があればまた呼びます。各自、己の居場所ははっきりとさせておいてください。外に出る場合は、連絡を入れるように」

それだけを告げると、兎天は音もなく室内から立ち去った。冬雁と槍幽も慌ただしく部屋を出ていく。頭を掻きながら洪采は、飯も食ったしもうひと眠りするかと欠伸をした。

作戦の実行は十日後。ならば、それまで兎天の言うように英気を養っておこう。洪采が屠ってきた妖などとは、比べものにならない猛者たちが相手なのだから。

房室へと戻ろうとした時、ふいに室内の空気が動いた。洪采は暗闇に目を凝らす。

ここは兎天が任務を伝える時に使う部屋で、そのため下っ端の者たちが足を踏み入れることは許されていない。

「誰だ？」

幾許かの警戒を以て訊ねる。ざわり、と空気が振動したかと思うと、強烈な一撃が洪采を襲った。とっさに体を捻って避けるが、風圧を感じる蹴りにぞっとする。あれをまともに受けていたら、あばらの二、三本は折れていただろう。

続けざまに繰り出される拳を、全神経を集中させ紙一重でかわす。反撃しようと試みるも、相手には一切の隙がない。闇雲に攻撃したところで、すべていなされてしまうだろう。

「く、そっ！」

壁際に追い詰められた洪采は、一か八かと壁を蹴った反動で飛びあがり、空中でくるりと体を反転さ

せるとそのまま回し蹴りを決めた。
　普通の相手ならば骨を砕く勢いの攻撃だが、顔の前で重ねるように固められた腕に、やすやすと受け止められてしまう。
「どうやら、体は鈍ってないようだな」
「鍛錬はしてますよ。でも、ちっともあんたに追いつく気がしない」
　体勢を立て直し、改めて目の前の相手を見れば、懐かしい笑みを浮かべる朱緋の姿があった。

「――いい加減に、いきなり攻撃するのは止めてもらえませんかね。命が幾つあっても足んないんですけど」
「癖なんだよ」
「物騒な癖ですね」
　洪采の房室に移動したあと、朱緋が持参した酒で酒盛りが始まった。
　槍幽も誘おうとしたが、外に出たのか捕まえることはできなかった。
「あー、俺の師だった人に、よく不意打ちを食らってたんだよ。戦場なんざ、不意打ちの嵐だ！　って言われて。たぶん、うつったんだな。というわけで、お前も諦めろ」
「師匠にも師がいたんですね」
「そりゃそうだ。一人でここまで強くはなれねぇよ。俺のことをなんだと思ってやがる」
　ぶつぶつ言いながら、朱緋は盃に酒を注いだ。
　くつろいだ様子の朱緋の、華国の民には珍しい赤銅色の髪は、短く切られ襟足の部分だけが伸ばされていた。
　最後に会ったのは、二年ほど前か。記憶に残る顔よりは、幾分か老けたように思うが、それでもまだ二十代の半ばを過ぎたあたりだ。精悍な顔立ちだが、笑えば人のよさが滲み出る。なにも変わってないな、と洪采は笑みを零した。

「ほら、お前も飲め。東都の酒は美味いぞ」
「東都にいたんですか？」
「ああ」
なみなみと注がれた酒を口にしながら、洪采は訊ねた。味は辛口だが、後味はすっきりとしている。久し振りの酒に、心地よい酩酊感を味わう。
「東都はどうです？」
「悪くはない。刺史の手腕がいいおかげで、治安もよく守られてるよ。ただ、そこ以外はだめだな。東都の商人たちから話を聞いた限りじゃ、西に行けば行くほど治安は悪くなってるようだ。いくら護衛を雇っても荷駄を守り切れた例がないと、嘆いていた」
「商人が見放したとなれば、西の辺境はますます酷いことになりますね」
「これで四年前の戦がなかったら、蛮族どもが好機とばかりに挙兵しただろうな」
四年前の西奴の役と呼ばれる戦は、西から華国を狙う異民族の討伐が目的だった。大小からなる異民族の連合軍を、華国軍はあっさりと撃破。威を見せつける結果となった。
「ああ、あれって異民族同士が連合して、華国を攻めようと企ててたんでしたっけ」
「というのは表向きで、そうなるように煽ったのはこっちだけどな」
「……は？」
「異民族との対立は、華国の成立当初からあった問題だ。当然、皇帝も煩わしく思ってたようで、裏からわざと連合させるように仕向けたんだよ」
「いやいや、巨大化させたらだめですよね？　戦の基本は各個撃破でしょ」
「場合によるな」
朱緋は面白くもなさそうに語った。
「一つ一つ潰してたら切りがねぇだろ。戦が長引けば長引くだけ、国庫が軽くなる。金がなきゃ戦はできねぇからな。だったら、一箇所にまとめて撃破し



た方が効率的だ。異民族が連合しても、武力では華国軍が勝ってる確信があったからこそだがな」

「はぁー、そんな事情があったんですか」

四年前といえば、洪采はまだ十六である。すでに猩猩緋に身を投じてはいたが、西奴の役が起こった時は別の地で任務に就いていた。辺境の地で、異民族を相手にした戦が起こった、という程度の認識でしかなかった。

「……大半の奴は、異民族が連合したから軍を向けたと思ってるだろうがな。あの戦は、その三年も前から下準備がされてたんだよ。他ならぬ皇帝の手によってな」

これまで聞いたこともない裏事情に、洪采は目を瞬かせる。

なぜそれを朱緋が知っているのか。朝廷の皇帝に近い場所にいたのだろうか、という疑問が脳裏を過るが、洪采はそれを訊ねることなく酒と一緒に飲み下した。

「あー、話を戻しますが、そういやどうして東都に？　任務ですか？」

「ん、ああ。人を捜していてな。だが、まったく見当違いの場所を捜していたらしい。かなりの日数を無駄にしちまったぜ」

「じゃあ、華安に来たのもその件で？」

「ああ。早々に見つけたが、あと少しのところで逃げられた」

「は？　逃げられたんですか」

思わず自分の耳を疑った洪采だった。もちろん朱緋とて万能ではない。失敗することもあるだろうと、理屈では思うが信じられなかった。

「逃げ足だけは早いんだよ」

「そうですか」

気にはなったが、任務にかかわることならば朱緋も話し辛いだろう。

猩猩緋の中でも、裏切り者が存在しないとは限らない。よって重要な任務ほど、他言は禁じられてい

た。
「じゃあ、十日後の襲撃には加わらないんですか？」
「兎天にはなにも言われてないからな。微妙なところだ。まあ、手が空いてたら手伝ってやるよ」
「よろしくお願いしますよ。師匠がいてくれたら、かなり楽ですから」
「おいおい。手伝うにしても、俺は裏方だぞ？　顔見知りがいるからな」
　洪釆は朱緋の過去を知らない。猩猩緋に身を投じる者は、なにかしらの事情を背負っている者が多く、過去の詮索は暗黙の了解で禁止とされていた。ただ洪釆と違い、朱緋は偽名を使っている。冬雁や兎天もそうだ。
　洪釆は天涯孤独の身であるが、彼らには家族や縁者がいるのだろう。大切な者たちに被害が及ばぬようにと、名や顔を隠しているのだ。
「それに、俺は兎天に嫌われてるからな。手を出したら嫌な顔をされるだろうよ」
「……顔、わかんないですけどね」
「雰囲気か？　殺気が籠もってる気がすんだよなぁ」
　酒を一気に飲み干して、次を注ぐ。このままの速さでは、あっという間に酒壺は空になってしまうだろう。
「師匠がなんかしたんじゃないですか？」
「さあてね。まあ、俺もあいつのことは嫌いだからな。任務にさえ支障がでなきゃ、どうでもいいさ」
「はは、確かに」
　猩猩緋は大所帯だ。いちいち人間関係に拘っていたら大変だろう。
　互いの感情を任務に持ち込まなければ、誰にどう思われようが関係はなかった。
「ほれ、もっと飲め。なんだ、ぜんぜん減ってねぇぞ」
「飲んでますよ。美味いですけど、けっこうきつい

ですよ、これ」
「当たり前だ。どうせだったら、強い方がいい。酒も敵も女もな」
「……いや、俺は弱くていいです」
「張り合いがねぇな」
「あんたに張り合えるのは、数えるほどしかいないでしょ」
酒が弱いわけではないが、特に強いわけでもない。酒豪である朱緋を相手に飲むと、前後不覚に陥ってしまうのが常だ。
だからこそ、槍幽を道連れにしたかったのだが、事前に察知したのか、単に運が悪かったのか上手く逃げられてしまった。前者ならば今頃、胸を撫で下ろしているだろう。
「これがなくなったら、厨房からかっぱらって来てやるよ」
「いやいや、もう充分ですって」
「遠慮すんな。んで、吐けるもんみんな吐いちまえ」
ぽんぽんと、宥めるように背を叩かれ、洪采は体を固くした。
「実は皆に寄った時、お前の戦いっぷりを少しだけ観戦してたんだよ」
「……」
「まったく、荒れた戦い方しやがって。自分じゃ気付いてなかっただろ？」
朱緋の指摘に、洪采は酒盃を手に俯いた。言われるほど酷くはないと思うが、いつもより集中力は乱れていたかもしれない。地中とはいえ、妖が足許まで接近していることに気付かなかったのが、いい証拠だ。
「――梁華のことは、槍幽から聞いた。残念だったな」
最愛の妹の名に、心が揺れた。
梁華は唯一の家族だった。
気立てもよく、美人でどこに出しても恥ずかしくない、自慢の妹だった。共に猩猩緋に身を投じてか

らは、顔を合わせることも稀だったが、生きていてくれるだけでよかった。

しかし、梁華は攫猿に攫われ、妖に落ちた。止めを刺したのは、他ならぬ洪采自身だ。元より、互いにいつ死んでもおかしくはない状況にあったのだ。下手をすれば、梁華よりも先に洪采が死んでいたかもしれない。

覚悟はしていたはずだった。

しかし、いざ失ってみると、言いようのない寂寥感に襲われた。

「……乗り越えたつもりでいたんですけどね。やっぱ、だめみたいです」

「そんな簡単なもんじゃねぇだろ」

「でもね、梁華とは約束したんですよ。どっちが死んでも、泣くのは一度だけだって。あとは生きるために進もう、と」

約束は、梁華のためのものだった。

危険な任務を請け負うことが多かった洪采は、自分に万が一のことがあった際、一人残される妹の身を案じた。約束が彼女の支えとなることを祈ったのだ。

しかし、それに助けられたのは、他ならぬ洪采自身であった。

「まさかね、俺が残されるとは思ってもみませんでした」

「……気の利いたことは言えねぇからな。代わりに飲め。今日はとことん付き合ってやるよ」

「はは、すんませんね」

猩猩緋の仲間たちは大事だが、気を許せる相手は限られていた。朱緋や槍幽がそうだ。

しかし、他人に甘えることを知らない洪采は、そう簡単に己の気持ちを吐露することはできない。だからこそ、朱緋は酒で自分を喋らせようとしたのだろう。

「まあ、あれだ。梁華のこともあるが、兎天には気をつけろよ。あいつは人を切り捨てることに慣れて

る」

「指導者はみんなそうでしょう?」

「断腸の思いで切り捨てるのと、捨て駒にするのとでは意味がまったく違うんだよ。あいつは目的のためなら、他人の命すら顔色ひとつ変えずに犠牲にする。有能だが、性格は非情だ。死にたくなかったら、必要以上に近付くんじゃねぇぞ。特にお前は使い勝手がいいって、目をつけられてるんだからな」

そもそも洪采自身、兎天にはきな臭いものを感じていた。

梁華が攫猿に攫われたことを、洪采の任務に支障をきたすからと口を噤んでいた経緯もある。

「わかってますよ。ただ冬雁がね……」

「あれは駄目だな。まあ、代わりに冬雁についてる奴らが警戒してるようだから、いざとなったら諫めるくらいはするだろうよ」

「聞く耳があればいいんですが」

冬雁は兎天に心酔し切っている。配下の者の声に耳を貸すかどうかは、賭けのようなものだ。そして、兎天は目的のためならば愛弟子ですら切って捨てるだろう。

「あー、もういい。あいつの話は酒がまずくなる!」

「あんたが振ったんですよ」

溜息をついて、洪采は酒盃を煽った。兎天からは十日後のために体を休めておけと言われている。一日やそこら、二日酔いで動けなくなっていても文句は言われないだろう。

「そういえば、師匠は兄弟いるんですか?」

「はぁ?」

「兄弟ですよ、兄弟」

相手の素性は詮索しない。それが暗黙の了解ではあるが、酒の影響もあって、気付いた時には訊ねていた。

「……いねぇよ」

間を空けての返答は、珍しく朱緋が動揺した表れのようだ。

「いるんですか。上ですか、下ですか？」
「いねぇって言ってんだろ」
「いいじゃないですか。いるかいないかだけでも教えてくださいよ」
「……お前、酔ってんだろ」
　この程度で酔うんじゃねぇよ、と朱緋が舌打ちする。
「師匠は長男って感じですよね。面倒見のいいお兄ちゃん」
「はいはい。お前は長男のくせに、そうは見えないよな」
「残念でしたー。俺は三男ですー。上の兄二人は死にましたー」
「……」
「弟ですか？　妹ですか？」
「はぁ……」
　肩を落とした朱緋は、溜息と共に酒盃を煽った。
それから、洪采に恨みがましい視線を向ける。
「弟だ」
　困ったように、それから寂しげに、朱緋は語った。
「母親が違うから、血は半分しか繋がってない。それでも、仲は悪くはなかった。まあ、これからは恨まれるだろうがな――」
「そりゃ、賊ですからね。ばれたら恨まれるでしょうよ」
「ほら、もういいだろ」
　洪采の盃になみなみと酒を注ぐことで、朱緋は強引に話を終わらせようとした。
「二年も顔を合わせてなかったんだ。積もる話もあるだろ」
「そーですね」
　二年という歳月は長くもあり短くもあった。朱緋に話したいことは山ほどある。
　ただ、なぜか闇夜に出会った少女のことだけは朱緋に話さなかった。
　白い虎に跨ったあの娘は、攫猿に姿を変えられた

妹を思い起こさせる。兎天には口を封じろと命じられたが、未だにその任を果たせていない。妙に縁があることだけは確かなので、いつかまた顔を合わせる機会はあるだろう。

朱緋の話に相槌を打ちながら、洪釆は取り留めのないことを考え続けていたのだった。



春蘭は、四方を楼閣で囲まれた中庭の手入れを行っていた。

低木や季節ごとの花が植えられているが、数日手入れを怠っただけで、どこからか飛んできた雑草の種が玉砂利の隙間に根付いてしまったのだ。これば かりは、地道にむしるしかない。

芽吹いたばかりの草を引き抜きつつ、春蘭は溜息をついた。

玄楽との邂逅から、二日が経った。

男がどこに消えたのかはわからないまま。龍乎も謎の男だけに構っていられるわけもなく、巡回や犯罪の取り締まりに追われているようだ。

だが今、相手の居場所がわかったところでなにができるというのか。春蘭は雑草を引き抜く手に力を込めた。

いくら頭を悩ませても、玄楽を捕縛するための作戦が思いつかない。気絶させるだけだとはいえ、相手は元禁軍の気術兵。やすやすとなせるはずもない。しかも実力はまったく衰えていないというから厄介だ。

今は妓楼に身を潜めているが、いつまでもここが安全であるという保証はない。万が一に備え、新しい避難場所を確保しておく必要があるだろう。それも早急に、だ。

「春蘭、ちょっと休憩しない？」

祥琳の声が降ってきた。見上げれば、すぐ傍に祥琳の姿がある。考えごとに没頭するあまり、気配を察せなかったようだ。

「中庭って思った以上に広いよねぇ」

「まったくだ」
同意するように頷いた春蘭は、少し離れた場所で蹲る背中に声をかけた。
「蒼羽、ぬしも休まぬか？」
声をかけられて、袁蒼羽も立ち上がった。妓女たちと並んでも遜色がないほど整った顔立ちをした少年だが、向けられた瞳からは感情が抜け落ちているかのような印象を受けた。藍色の短服を着込み、結いあげた髪を黄土色の巾で包んでいる。
楼主の付き人をしていたが、蟬英が亡くなってからは月儀を手伝ったり、下働きの者たちに混じって働いたりしているようだ。
「日陰に座ろうよ」
祥琳の提案で、三人は楼閣でできた日陰に腰を下ろした。日差しは柔らかいが、ずっと動いていたせいで全身にじんわりと汗が滲んでいた。
「はい、お水」
「すまんな」
祥琳からそれぞれ竹筒を手渡される。自分でも気付かないうちにのどが渇いていたのか、春蘭はあっという間に水を飲み干してしまった。
「草むしりと聞いて簡単に思っていたが、意外と大変なのだな」
「本当だよね。ずっと座って作業してるせいか、腰も痛いし。草もあっちこっちから生えてるから、ぜんぜん終わんないよ」
春蘭と祥琳の言葉に、蒼羽も同意するように頷いた。
蒼羽は口を利くことができない。だから、感情を伝えるために、身振り手振りを行う必要がある。蒼羽は最小限の動きだけで己を表すことが得意だ。今も空になった竹筒を振って、春蘭と同じ状態であることを主張している。
「この分だと、昼餉を食べてもまた草むしりかなぁ」
「三人がかりで、ようやく半分が終わったところだ

からな。しかし、いつもは誰が草をむしっているのだ？」

「下働きの人たちかな。今は忙しくて、こっちまで手が回らないんだと思うよ」

なるほど、と春蘭は頷いた。

寝込んでいる者は減ったが、疫がきっかけで辞めてしまった者もいる。人数が減ったせいで、店を閉めているにもかかわらず、下働きの者たちは朝夕問わず走り回っている。

「ねぇねぇ、春蘭。それより、仲望様とはどうなの？」

突然の質問に、春蘭はきょとんとした。どうなのかと問われても、意味がまったく理解できない。そんな春蘭の脇腹を、祥琳がひじで突く。

「もうっ、惚けないでよ。春蘭の好きな人って、仲望様なんでしょ？」

「……それか」

思わず、春蘭は脱力してしまった。そういえば、祥琳の思い込みを正さないままだった。面倒だからと放置していたが、彼女の中では誤解がさらなる誤解を生んでいたようだ。

「ずっと春蘭にべったりだったけど、一昨日から姿を見ないよね？　どうしたの？」

「……」

どうしたの、とは春蘭が逆に訊きたいくらいだ。姿が見えないと気付いたのは昨日のこと。なにかあったのだろうかと思っていると、妓楼に楊秀から文が届いた。

曰く、仲望が禁軍の詰所で鍛錬をしているのだという。

むろん、一般の者が鍛錬に混じることはできないが、仲望は宮中に官吏として籍をおき、元禁軍兵という経歴もある。楊秀の許可さえあれば問題はないようだ。頭でも打ったか、なにか悪いものでも食ったか、と春蘭に訊ねる文面であった。

頭を打ったわけでも、変なものを食べたわけでも

ない。十中八九、玄楽が原因だろうが、それを楊秀に告げることはできなかった。
「仲望にも仕事はある」
「ふーん」
にやにやと、意地の悪い笑みを浮かべる祥琳に、春蘭は溜息をついた。どうあっても、春蘭と仲望を恋仲にしたいようだ。
「そもそも仲望が私に惚れるようなことがあれば、あの者の趣味を疑うぞ」
「そうかなぁ。歳だってものすごく離れてるわけじゃないし、お似合いだと思うよ。それに、育てる楽しみがあるわよね、って月儀姐さんと紅燕姐さんが言ってたわ」
あの二人もか、と春蘭は肩を落とした。こちらに向けられた蒼羽の眼差しが、なぜか憐憫を含んでいるように見える。
「祥琳の方はどうなのだ」
「え、私？」
「守真だ。あれほど心配していたのだ、好きなのではないのか？」
ここは話を変えるべきだと、春蘭は祥琳の身内とも呼べる青年の名を出した。顔を真っ赤にして否定する姿を期待したのだが、祥琳の態度は至極あっさりとしたものだ。
「んー、守真は家族みたいなものだから、そういう好きとは違うかなぁ」
「ぬしはそうでも、あちらは違うかもしれぬではないか」
「きっと守真も同じだよ。ところで、話を逸らしたつもりかもしれないけど、だめだからね」
にっこりと微笑んだ祥琳は、春蘭の腕をがっちりと掴んだ。ああ、やはり逃れられぬのか、と春蘭は嘆息する。
「仲望様と春蘭を見てるとね、きゃーってなるの。どこまで進んでるか訊いて来なさいって、姐さんたちにも頼まれてるんだよ」

「……ちょっと待て。姐さんたちとは、月儀と紅燕だけではないのか？」
「うん。みんなだよ。見習いの子たちも、興味津々だったし」
　祥琳は無邪気な笑みを浮かべる。どうやら仲望が春蘭に付き添っている間に、妓楼では根も葉もない噂が飛び交っていたようだ。
「……恋仲ではないと言っておろうが」
「え、まさか仲望様の片想い？　それとも春蘭の片想い？　どっちでも、きゃーってなるけど」
　妓楼ではそんなに娯楽が少ないのだろうか。目を輝かせながら迫る祥琳に、春蘭は逃げ出したい衝動に駆られた。
　そもそも、先ほどまで深刻な現状に頭を抱えていたはずが、どこをどう間違えばこうなるのか。助けを求めるように蒼羽を見れば、首を横に振られてしまった。
「そ、そろそろ草むしりに戻ろう。少しでも進めておかないと夕方までかかるぞ」
「そんなぁ。もうちょっと、お喋りしたかったのにな」
　祥琳は不満そうに頬を膨らませたが、渋々といった様子で立ち上がった。
「あ、そういえばさっきお客様が見えたみたいだけど、なにかあったのかな？」
「客？」
「なんか守真が慌ててたみたいだったから、ちょっと気になったの」
　春蘭と蒼羽は顔を見合わせた。
　その正体が判明したのは、昼餉を終えてからだった。草むしりに戻ろうとしたところ、春蘭に月儀からの呼び出しがあった。なぜか妙に興奮気味な守真に案内され、月儀の房室へと向かう。
　そこには、守真と同じように興奮する紅燕と、二人とは対照的に困惑顔の月儀がいた。
「なにかあったのか？」

「それがねぇ……」
月儀は困ったように微笑みながら、春蘭を見詰める。一方、紅燕は自分が話したそうにそわそわとしているが、さすがに月儀を立てなければならないとわかっているのだろう。口を挟まず脇に控えていた。
「実は、さっき宮中から使者の方がお見えになってね」
「宮中から……？」
「九日後に行われる宴に、妓女を呼びたいとおっしゃるの」
「なんだ、よかったではないか」
宮中ともなれば、宴の規模もかなりのものだろう。妓女たちも一人二人ではなく、大人数になるはずだ。どうりで紅燕と守真が落ち着かないわけである。
「でもね、秋菊が演者として出ることが条件だというのよ」
「は？」
思わず唖然としてしまった春蘭に、月儀が心底もうしわけないといった表情を浮かべた。と、ここが我慢の限界だったのか、紅燕が興奮しながら口を開く。
「なに惚けているの。宮中よ、宮中。皇帝陛下の御前で、芸を披露できるのよ！」
「どういうことだ？」
「今回の宴には、陛下もご出席なさるそうよ」
月儀の言葉に、春蘭はまたも唖然とした。話があまりにも飛躍しすぎて、二の句が告げない。だが、紅燕はそんな春蘭に構ってはいられないようで、嬉々として身を乗り出してくる。
「というわけだから、春蘭には秋菊を呼んでほしいの。翰栄様みたいに、郷里に帰ったとか言わないわよね」
「ちょっと落ち着きなさいな。病みあがりなのに、倒れても知らないわよ」
「黄海楼のためにもなるし、ご贔屓を増やす絶好の機会ですもの。大人しくなんてしていられない

わ！」

俄然張り切っている紅燕に、月儀が額を押さえながら溜息をつく。

「ごめんね、春蘭。紅燕のことは無視していいから、ちゃんと考えてもらえる？」

「……うむ」

春蘭は額に手を当てて、混乱する気持ちを静めるために瞼を閉じた。

秋菊が演者として出なければ、この話はなかったことになるのだろう。だが、宴に出席するならば、今までのように御簾越しに占うことは難しい。

「……紅燕。すまぬが、月儀と二人きりにしてもらえるか？」

春蘭の申し出に難色を示した紅燕だったが、月儀に命じられて渋々と別室に下がった。二人きりとなった室内に、ほぼ同時に溜息が漏れた。

「私としては、そこまで話を大きくしたくはなかったのだが」

「こっちもだよ。お客さんの間で噂になっていることは知ってたけど、まさか宮中の宴に呼ばれるとは思ってもみなかったからね」

月儀も複雑なようだ。楼主としては承諾したいが、春蘭の事情を知る手前、手放しには喜べないのだろう。

「正直なところ、今回のお話は逃したくないのよ。うちの子たちがせっせと書き送っている文も、あまり芳しい返事が来なくてねぇ。疫のおかげで物価があがっているだろう？　だから、自分の屋敷で、妓女を呼ぶような宴を開けるお客さんはいないみたいでね」

「そうか……」

「ごめんね、卑怯なことを言って。春蘭にしてみれば、より断り辛くなるってのにねぇ」

それでも、月儀が春蘭のことを考えて、返事を保留にしてくれているのはわかる。宴に呼んでもらえなければ、金銭を稼ぐことはできない。妓楼を再開

しようにも、まだまだ治安の悪い花街を訪れる客は少ないだろう。

宮中で開かれる宴に呼ばれたとなれば、報酬もそうだが、黄海楼にも箔がつく。疫で痛手を被った妓楼を立て直す、またとない絶好の機会だ。

「……仮に宴に出るとしよう。秋菊は正体不明という売りだが、それはどうするつもりだ？　宴に御簾を持って行くわけにはいかないだろう？」

「私は楼主として顔を出さなきゃいけないから、誰か代理を立てるしかないね。幅のあるゆったりとした袍を着せて、顔は頭巾を被って隠す。そうだねぇ。守真あたりだったら、体格から男とも女とも取れるかしら」

「だが、占を行うのは私だ。その姿は隠せぬぞ」

「秋菊は腕の自由が利かないという理由で、介添えする振りをして占うことはできない？」

試したことはないが、水神盤に気を送れれば問題はない。幾度か練習できれば、見破られないくらいになるはずだ。

「できなくはないな」

「じゃあ――」

「だが、一番の難点はなにを占うか、だ」

蟬英は春蘭の占に制限を設けていた。

失せ物探しや、恋占い、簡単な吉凶などが主な占の内容で、それ以外――客の未来を左右するような大事、もしくは疫や飢饉などの災厄を口にすることは禁じられた。

それは宮中で雇われている占師たちの領分で、民間の者が安易に占っていいものではないという。あの時、春蘭は反発したが、思えば蟬英の言い分は正しかった。

妓楼における占師は、妓女たちの引き立て役だ。必要以上に出しゃばってはいけない。縛られたくなければ、自分で占屋を営むべきなのだ。

「月儀も知っているだろうが、私は卦を曲げて告げることはできない。たとえ、どのような内容であっ

てもだ」

家族に凶事があると出れば、春蘭は躊躇いなくそれを口にするだろう。客の意に沿わない結果だったとしても包み隠さず告げる。それが占師としての矜持である。

「それによって、相手が不快になる可能性もある。特に宴の最中にそのようなことになれば、場も気まずくなるだろう。相手によっては、怒り出すかもしれぬ」

「……確かに、それは困るわね。事前に条件をつけさせてもらえるか交渉しましょう」

「酒の席だ。条件が守られると思うか？」

「難しいね。ただ、まずそうな内容だったら、やんわりと断ればいいんじゃないかい？　それは私の腕ではむりです、とか。評判に傷がつくかもしれないけどねぇ」

「評判は気にしない」

あくまでも、客足が途切れない程度であればいいのだ。

それに、玄楽から真名を奪い返せば、春蘭が華安に留まる必要もなくなる。占師として働くこともなくなるのだ。

「そうだ、な……」

いつしか、鄭家や妓楼での暮らしに慣れ、当たり前のことを失念していたようだ。そう遠からず、秋菊は黄海楼から姿を消す。ならば、最後に恩を返すべきだろう。

「わかった。演者として宴に出よう」

「いいのかい？」

突然の承諾に、月儀は大きく目を見開いた。それに、春蘭も「ああ」と頷く。

「ただし条件はできるだけ徹底させてほしい。なんなら、事前に秋菊の腕前のほどについて説明しておいてくれ。得意なのは失せ物探しと簡単な吉凶、もしくは恋占いだ、と」

「わかったよ。まあ、皇帝陛下のいる席で、呑気に

恋占いを所望するつわものはいないと思うけどね」
　月儀は手早く座卓に紙を載せ、必要と思われる事項を箇条書きにした。その途中で、思い出したように顔をあげる。
「春蘭に承諾してもらえたら提案しようと思っていたんだけどね、秋菊の正体を紅燕にも教えておきたいのよ」
「よいのか？」
「私だけじゃ心許ないっていうのもあるけど、宴の最中になにがあるかわからないからねぇ。あの子は色々と機転が利くから、知っておいてもらいたくて」
「私は構わぬぞ」
　以前の紅燕ならば難色を示したが、今の姿ならば問題はない。頷けば、月儀は嬉しそうに目を細めた。
「紅燕は変わったな」
「ええ」
「なによりも素直になった。いや、以前から率直にものを言ってはいたが」
　廊下で呼び止められ、嫌味を言われたこともある。睨まれるのも日常茶飯事で、名前にしても一度として呼ばれたことはなかった。
　それが、蟬英の死をきっかけに紅燕は変わった。
「疫が拡がった時、うちで初めに倒れたのが紅燕だったでしょう？」
「うむ」
「紅燕を部屋に運んだのは、蟬英姐さんだったのよ。移るから止せっていう、周りの言葉を撥ねつけてね」
「蟬英らしいな」
「本当にねぇ」
　楼主としての才覚に恵まれていたが、彼女は妓楼で暮らす者たちのことをなによりも大切に思っていた。
「それが、己の生まれに縋ることで保っていた紅燕の矜持を、こなごなに砕いたんじゃないかしら。ま

あ、簡単に言えば蟬英姐さんの人柄に惚れたのよ」
「確かに、蟬英はよい女だ」
「あとは、あんたのおかげだね」
意味がわからず、春蘭は月儀を見返し首を傾げた。
「紅燕の看病をしてくれたでしょう？」
確かに、春蘭は部屋で一人臥せっている紅燕の世話をした。疫に罹ったということで、誰もがそれを忌避したからだ。
だが、春蘭は自分が疫に罹らないと知っていた。体に残る神気には、疫を祓う効果がある。ただし春蘭以外の者に効き目はない。
大丈夫だという確信があったからこそ、春蘭は躊躇いなく紅燕の世話ができたのだ。もしも移る危険があったのならば、話は違っていたかもしれない。純粋に紅燕を想っていた蟬英とは違うのだ。
「……たまたま手が空いていただけだ」
「でもね、紅燕にはかなりの衝撃だったようだよ。率先して看護しに来たのが、目をかけてやった取り巻きたちじゃなくて、妓楼から追い出そうと邪険に扱っていた子だったからねぇ」
「確かに因縁をつけられたが、だからといって弱っている者を前に、見て見ぬ振りをするほど非道ではないぞ」
春蘭にしてみれば、なにを言われようが痛くも痒くもない。
紅燕は上位の妓女であるが、雇い主は蟬英だ。そして、蟬英は他者の誣告に耳を貸すような性格ではなかった。気にもしていなかったが、紅燕は違ったらしい。
「それがあの子には理解できなかったのさ。今まで、蟬英姐さんや、あんたのように裏表のない人間に会ったことがなかったんだろうねぇ」
「どういう意味だ？」
「紅燕の周りは、打算で動くような者たちばかりだったってこと」
そう告げると、月儀は筆を取った。さらさらと、

紙の上を流れるように筆先が行き交う。

「……今まではそうでも、これからは違う」

紅燕がどのような経緯で妓楼に売られてきたかはわからない。しかしこの先は、信頼しあえる者たちが紅燕の周りに集うに違いない。

黄海楼で働くようになって、春蘭の世界は広がった。妓楼での日々は、一日があまりにも色濃く、時の流れは遅いようでいてとても短い。別れの日も、あっという間にやってきてしまうだろう。

――だから、せめて。

自分がここを去ったあとも、妓楼の者たちが幸せであってくれればと思う。借財に縛られた身ではあるが、それでもなお彼らには笑っていてほしい。

「紅燕たちを呼んでくる。そろそろ首を長くしすぎて、守真に八つ当たりしているかもしれないからな。二人を呼んで、宴のことを話し合おう」

書き物を続ける月儀にそう言い置き、春蘭は立ち上がった。

剣を交わす音が響く。

突きを避ければ横合いから、勢いを殺すように刃でいなせば体ごと押し込まれ、距離を取ろうとしてもすぐに詰められる。

仲望は必死に剣を振るっていた。

「仲望、反応が遅いぞ。いちいち頭で考えるな。体で感じろ！」

容赦ない叱咤を飛ばすのは楊秀だ。

手が空いた時でいいから稽古をつけてほしい、と頼んだのは自分だ。手加減しないでくれと注文をつけたのも。

それを律儀に守っているのか、剣を振るう楊秀は文字通り容赦の欠片もなく、嵐のように四方八方から仲望を襲う。

攻めは最大の防御であると言うが、力の差が歴然としている相手には有効ではない気がする。まず、

攻める隙がない。楊秀を攪乱して隙を作ればいいのだが、その糸口すら摑めない状況が続いていた。

玄楽との打ち合いに負けた仲望は、己の弱さを痛感した。四年という空白は、体力だけでなく勘すらも鈍らせていた。

それを取り戻すためには、相当な鍛錬が必要だが、短期間ですべてを取り戻すことは不可能に近い。冷静に、できることとできないことを見極め、仲望が選んだのは、戦闘の勘を取り戻すことだった。

この四日というもの、右飛龍軍の詰所に顔を出し、時間が許す限り手合わせを願った。楊秀が忙しい時は兵士たちの訓練に混ざりもした。

体は少しずつ動くようにはなった。勘も徐々にではあるが、取り戻しつつある。しかし、思った以上に体力が続かない。訓練はなんとかなっても、単独での打ち合い——それも上級者が相手となった時は、決着がついたあとで疲労のあまり立っていられた試しがない。

現に今も剣を持つ掌の感覚は鈍く、徐々に身のこなし方からもきれが失われていく。頃合を見計らった楊秀が、仲望の剣を弾き飛ばした。

「よし、ここまで」

「……ありが、とう……ございました……」

立っているのがやっとの状態で、今すぐにでも地面に座り込みたい衝動にかられる。それを気力で堪え、剣を拾いあげた。

詰所の中庭に作られた鍛錬場は充分な広さがあり、仲望たちの他にも手合わせを行っている兵士たちの姿がある。

剣戟の音が響く中、仲望は重い体を引き摺りながら、鍛錬の邪魔にならないように壁際に退いた。

「ずいぶんと動けるようになったな」

壁に背をあずけ息を整えていると、涼しげな顔の楊秀が脇に立った。

全身で疲れを表している仲望に対し、楊秀は汗一つかかずに平然としている。当然のことであるが、

思うように動かない己の体が苛立たしかった。
「……まだまだだ。現役の頃とは、比べ物にならない」
「たった四日で昔の自分を取り戻せるか。まあ、新兵よりはましな程度だな」
辛辣な言葉に仲望は眉を寄せた。事実なだけに文句を言うこともできない。
「それで、なにがあった？」
「どういう意味だ？」
訝しげな視線を向ければ、呆れたような顔が返ってきた。
「いきなり体を鍛え始めた理由だ。そろそろ教えてくれてもいいだろう？」
「あー……」
そういえば、なんの説明もなしに詰所に押し掛けた。それだけ余裕がなかったということなのだが、楊秀は強引に聞き出すのではなく自分が落ち着くまで待っていてくれたのだ。
「悪かった」
「いや。お前がやる気を出してくれたのは大歓迎だ。啓璋と友蜜も喜んでるだろう」
「だといいが……」
家僕である少年たちにも、詳しい事情はなにも話していなかった。
あれから毎日、仲望は空が明るくなる前に起床すると庭先で弓矢の練習を行い、朝餉を取ったあとすぐに詰所へ足を運んでいる。
そこで体力の限界まで体を動かし、ふらふらになりながら帰宅。夕餉を終え、そのまま就寝という生活が続いている。
主の豹変になにを思っているかは不明だが、今のところ静観されていた。
「理由は、〝目が覚めた〟といったところだ」
「ふむ」
「様々なものを言い訳にして、だらだらと毎日を過ごしてきた。それでいいと思っていたんだが……四

年分の手痛いしっぺ返しを食らった」

「誰にだ？」

仲望は躊躇した。だが、楊秀には話しておくべきだ。いざという時、頼れる相手がほしい。ひと呼吸おいて、仲望は口を開いた。

「兄上に会った」

「玄楽にか？」

「……驚かないのか？」

「以前、春蘭がそう言っていただろう」

当然のように告げられ、仲望は肩を落とした。楊秀は猪突猛進な性格と思いきや、意外と慎重派だ。他人の言葉を鵜呑みにしたりはしないが、なぜか春蘭の言うことは疑いもなく信じたらしい。

「それにあの男は、お前に家督を押しつけたがっていたからな。自分の死を偽装してもおかしくはない」

「押しつける……」

「禁軍で名をあげたのは、外見や血筋のことで文句を言われたくなかったからだ。当主なんて面倒なものに誰がなるかと、酒を飲む度に愚痴を零していたぞ」

兄が後継ぎの座を拒んでいたことは知っていた。それは自分の生死を偽っても、拒否したいものなのだろうか。

「だが、玄楽は太子と親しくしていたからな。親父殿としては、どうしてもあやつに跡を継がせたかったのだろう」

確かに、次期支配者に目をかけられているとなれば、立身出世には有利だ。鄭家の格もあがったに違いない。

「それを疎んだ可能性はある」

「……」

「しかし、なぜお前が玄楽とやり合う？」

「春蘭が狙われた」

ここで嫁を奪われそうになったのか、などと言うようであれば、頭を殴りつけている。楊秀を窺えば、

予想に反して神妙な表情を浮かべていた。
「それは確かに玄楽だったのか？」
「ああ。間違いない」
「弟のお前が言うならそうなのだろうが……理由がまったくわからんな」
玄楽が春蘭を追う理由――真名を奪い、守り神を隷属させ、なにをしようというのか。
「とりあえず、兄が春蘭に危害を加えようとしていることだけは確かだ。俺はそれを阻止したい」
「そういうことだったか。しかし……間が悪いな」
「なにかあったのか？」
怪訝な視線を向ければ、楊秀は歯切れの悪い口調で告げた。
「六日後に宮中で宴が行われるのは知ってるな？」
「ああ。上司から文が届いていた」
「そこに演者として、花街の妓女が呼ばれるらしい。宮妓もいつも同じ顔触れでは飽きるだろう、と」
宮妓とは、技芸で皇帝を楽しませる女たちの呼び名だ。
諸侯から献上される者もいれば、花街で名を馳せ宮妓として後宮に召し上げられた者もいる。皇帝の寵愛を受ければ、そのまま妃妾となる場合もあった。
「噂なのだが、呼ばれるのは黄海楼の妓女たちらしい。そして……演者の中に、占師もいる、と」
「まさか、春蘭が？」
唖然とした仲望だったが、すぐ我に返ると楊秀に詰め寄った。
「事実か？」
「万里に調べさせている。ただ黄海楼の占師といえば一人だ」
仲望は唇を噛んだ。
すぐにでも黄海楼に向かいたいが、どこに玄楽の目が潜んでいるかわからない状況で迂闊な行動は避けたかった。
仲望は春蘭へと繋がる有効な手掛かりである。それを玄楽が見落とすとも思えない。

「落ち着け、仲望。花街の名妓たちが宴に呼ばれることは珍しくもない。そこで評判になっている占師がいるとなれば、余興の一つになると判断されたのだろう」

確かに、楊秀の言い分は正しい。偶然が重なった——そう考えるのが自然だ。しかし、仲望の胸には言い知れない不安が渦巻いていた。

それを煽るかのように、楊秀が気難しげな表情で告げた。

「ただ、気になることがある。少し前に花中書令と会った際、春蘭のことを話題に出された」

「花中書令が？」

「ああ。春蘭は花家の令嬢たちと面識があっただろう？　どうも、姪たちから色々と話を聞いていたらしい。妓楼で占師として働いていることも知っていた」

「それと、今回の件が関係あると？」

「わからん。だが、あまりにも時機がよすぎるとは思わないか？」

「……」

仲望は渋面を作った。興奏は自身の上司で、なにかと恩のある人物だ。

しかし、顔を合わせる度に太子派への勧誘を受けるため、権力争いのごたごたに巻き込まれたくなかった仲望は、不義理と知りながらも興奏とは距離を置いていた。

そういえば、ここ最近は出仕しろという命令も受けていない。気にもしていなかったが、少しは警戒しておくべきだっただろうか。

「取り越し苦労ならば、その方がいいのだがな」

「……一度、花中書令を訪ねるか？」

「止めておけ。お前から会いに行ったとなれば、周囲の者に勘繰られるぞ。特に今は、太子派も公子派もぴりぴりしているからな」

「では、なにもせず手を拱いていろというのか？」

「急くな。向こうの出方を待つのも手だ。闇雲に動

いても、得るものはなにもないぞ」

大丈夫だ、と頷くことはできなかった。玄楽との一件から、自分でもわかるほど己を抑えることができない。もしもあの時、子慮(しりょ)たちが駆けつけてこなかったら——そう思うだけで、いいようのない焦りを感じた。

苦悩する仲望に、楊秀が畳みかけるように告げる。

「今は身体だけでなく、精神も鍛えるつもりではげめ。なによりも、冷静さを欠いた今のお前を花中書令に会わせるのは不安だ。いいように丸め込まれたらどうする。それに、お前がここに来たのはなんのためだ?」

仲望は唇を噛み締めた。

優先すべきはなにかなど、考えるまでもなくわかっている。

大切な者を守るための力が欲しくて、楊秀に鍛錬を頼んだのだ。

春蘭はいずれ守り神として邑へ帰る存在だ。それを本人も強く望んでいる。以前、言われたように、彼女が守護する邑に啓璋たちを連れて移り住むのもいいと、仲望は考えていた。

春蘭に会えなくとも、その息吹を感じられる場所で暮らせたなら。柔らかな風が吹く度に、雨が上がる度に、穂が美しく実る度に、寒さがふと和らぐ度に、日々の生活の中で彼女を想いながら時を過ごす。そして、最後は彼女が護る土地に眠るのだ。

そう思うだけで、心が穏やかになれる。

しかし、玄楽はそのすべてを奪おうとしている。隷属させられた春蘭を待つのは破滅だ。許せるわけがない。

「……わかった。今はこちらに集中しよう」

「引き続き花中書令には探りを入れておく。あまり根を詰めるなよ」

確かに、むりをしすぎて、いざという時に使い物にならないとなっては目も当てられない。

「すまない。色々と迷惑をかけるな」

「今さらなにを言う。それに、春蘭は私にとっても大事な友だ」
そう言うと、楊秀は壁に立てかけた剣を手に取った。
「さて、万里が呼びに来るまで間がある。もう一本、試合うか？」
「――ああ」
手足が鉛のように重いが、こればかりは鍛錬を重ねる以外に方法はない。四年前は楊秀との手合わせでも、勝敗は別としてここまで息が乱れることはなかった。それに、手加減されることも。
「次は本気で頼む」
「いいだろう」
楊秀は頷くと、仲望の背を叩いた。思わず息が止まりそうになり、仲望は友人を睨みつける。しかし、向けられた笑みは穏やかなものだった。
「お前が、再び剣を取ったことが嬉しいんだ」
「それは」
「隠棲したとしても、納得の上でのことならば反対はしなかった。だが、四年前のあの時から、お前は怪我や玄楽を理由に進むことを諦めてしまった。生すら厭うようになるのではないかと、ずっと不安に思っていたのだ」
初めて聞く話に、仲望は目を見開いた。
「生きているにもかかわらず、お前の心はここではないどこかにあるように思えてならなかった」
楊秀は剣の柄を握った手で、仲望の胸を叩いた。
「今のお前は、ちゃんと生きる目をしている。本当に、春蘭には感謝をしないといけないな。眠っていたお前を叩き起こしてくれた」
心の底から嬉しいという様子の友人に、仲望は頭の下がる思いだった。この四年間、どれほど心配をかけたことだろうか。
それでも、楊秀は自分を見捨てることはせず、忙しい任務の合間に屋敷を訪れ、時には叱咤し、時には温かな言葉をくれた。

今回のことがなければ、きっと気付かずにいただろう。

「……ありがとう。お前が友でよかった」

心からそう告げれば、闊達な笑い声があがった。

楽しくてたまらないとでもいうように――。



室内にはむせ返るほどの香が漂い、視界を色鮮やかな生地の山が埋めている。

周りを囲むのは、部屋付きの侍女たちだ。姦しい会話と共に、様々な布地が彼女たちの手から手へと移っていく。

それを眺めながら、黎貴妃は重い溜息をついた。わずかに寄せられた眉に、切れ長の瞳。肌は白粉をつけずとも美しく、唇に引いた紅をいっそう際立たせていた。

紫を基調としてしたてられた襦裙は、細部にまで刺繍が施され、これ一着にどれほどの手間と時間がかかっているのか想像もできない贅沢な品だ。それを身に纏う肢体は、とても一児の母親とは思えないほどほっそりとしていた。

「……まだ決まらないのかしら？」

うんざりとした声音で告げれば、慌てたように侍女たちが手と口を止めた。

言い訳するように口を開いたのは、侍女頭を務める蘭凜凜である。

年齢は二十八歳。気の強い性格ではあるが、離宮を取りまとめる手腕や、気働きのよさなどから重用している人物だ。

「申しわけありません。ですが、今度の宴はかなりの規模と耳にしております。他の夫人方に引けを取るようなことがあってはなりません」

「でも、宴まであと五日もないわ。この状況で間に合うの？」

宮中で開かれる宴に出席するようにと沸儀からの命があってから、凜凜を筆頭とする侍女たちは連日

浮き足立っている。衣装ひとつ決めるのに何日費やすつもりなのか。

贔屓にしている商人ですら、その迫力には及び腰になっていた。

今日も朝から居室に生地が運び込まれ、どの組み合わせが最善か、飾りは、髪型は、焚き染める香は、等々——疲れを知らない侍女たちは、飽きることなく議論を重ねていた。

装いについては、すべて任せているためあれこれ口を出すことはできない。また、彼女たちが主のために選ぶ衣装はどれも文句のつけようがなく、その感覚は信頼に値する。

ただ、今回はさすがに度がすぎてはいないか。

「ご安心ください、黎貴妃様。西離宮のお針子は優秀です。たとえ一日しか与えられずとも、立派に勤めを果たしますわ」

後宮には、妃妾たちの衣装を手掛ける専用のお針子がいる。だが四夫人ともなれば、離宮に専属の者を置くことも可能だった。

「それでも、たかが一着にどれだけの時間をかけるつもりなの」

「先日の宴では、王恵妃様に遅れを取りました。私どもが、あれからどれほど口惜しい思いをしてきたか……！」

凛凛が唇を噛み締めて力説すれば、他の三人も同意するように深く頷いた。

後宮の頂点に立つのは、太子の母である文后妃だ。その下に、黎貴妃、李華妃、周麗妃、王恵妃の四夫人が名を連ねる。

文后妃はすでに四十を過ぎ、容姿や体型の衰えを気にしてかあまり人前に姿を現さない。皇帝との不仲も重なり、最近では后妃の宮殿に閉じ籠もりきりだ。

李華妃はまだ若く、十に満たない。政治的な思惑で後宮に入れられ、生家の位が高いことから夫人の座についている。

周麗妃も同様だ。年齢は十八と後宮では若いとは言えない年齢ではあるが、十二の頃に後宮入りし同時に夫人の座を賜った。

凜凜が目の敵にしている王恵妃は、黎貴妃より五歳年上の二十四で、沸儀の寵愛を受けていた妃妾の一人である。

だが、王恵妃は皇帝の子を身籠もることはなかった。それでもいずれはと期待を抱いていたところ、寵妃の座を黎貴妃が奪ったのである。

公子を産んだあとは、顔を合わせる度に般若の形相で睨まれる。できるだけ西離宮から出ないようにはしているが、後宮内での宴に顔を出さないわけにはいかない。

寵妃の座は奪われたが、せめて見た目では勝とというように、王恵妃は必ず豪奢に着飾った衣装で宴に出席する。黎貴妃としては寵妃の座が揺らがない限り、気にする意味もないのだが、侍女たちは違ったらしい。

後宮の妃妾たちに序列と争いがあるように、四夫人付きの侍女たちの間にも、熾烈な争いがあるのだという。

特に、年頃が近く共に寵を得た黎貴妃と王恵妃の侍女たちは互いを敵視し、宴を決戦の場と定めているらしかった。

曰く、先日の後宮内で開かれた宴は、王恵妃の衣装の方が優れていたのだそうだ。黎貴妃からみれば、勝敗の基準が不明だったが、翌日の侍女たちは全員が意気消沈し、翌々日には次なる宴への闘志を燃やしていた。

外界から隔離された世界で、それが彼女たちなりの楽しみ方なのだと思えば、口を挟むのも無粋というものだ。

もっとも、王恵妃はあれこれと自身の衣装に注文をつけているようだが。

「……そう。ならば、あなたたちの気が済むようになさい」

「ありがとうございます。今しばらくご辛抱くださいませ」

時には諦めも肝心である。凛凛のさっぱりとした態度に苦笑する。

宮中や後宮で流布している、自分にまつわるよくない噂を知る者ならば、口答えなど怖ろしくてできないだろう。

しかし、黎貴妃は侍女たちや下働きの者たちを処罰したことなど一度としてない。暮らしが貧しかっただけに、不満の持ちようがないのだ。

それが、気に入らないことがあれば侍女を折檻するだの、下働きの首を飛ばすだの、悪女としての噂ばかりが絶えない。出所は太子派、もしくは王恵妃だろうが、ある意味では悪く見られた方が面倒事は減るというもの。

凛凛たちはあまりよい顔をしないが、黎貴妃はあえて噂を放置していた。

「やはり、飾りは銀の簪よりも、真珠が最適かと――」

「生地はそれに合わせ、藍色のものを――」

「では、髪型も新しく――」

「真珠は種類を注文して――」

「数もそれなりに――」

「急いで商人に連絡しなければ――」

「王恵妃様側には知られないように――」

侍女たちの途切れない囁りに、ぼんやりと耳を傾けていれば、廊下から控え目な声が響いた。顔を向けると、まだ歳若い侍女が緊張した面持ちで立っていた。

「失礼いたします。黎貴妃様に、ご面会の申し出がきております」

「文をこちらに」

さすがに侍女たちは生地を選ぶ手を止め、神妙な表情を浮かべている。文を開けば、公子派に属する者の名が書かれていた。

「急ぎですか……」

黎貴妃は眉を寄せた。至急お目にかかりたいと認められたそれは、皇帝の寵妃に対するものとしてはあまりにも無礼である。

しかし、文の差し出し人は、蔑ろにしてはあとあと祟りそうな、それなりの職に就く者であった。会わずに済ますことは難しい。

「凛凛。支度を。できるだけ急ぐように」

「かしこまりました」

文を運んできた侍女には、面会に応じる旨を伝えるように指示を出す。

――面倒事か。

もっとも、そうでなければ〝至急〟などと書くまい。公子派といっても、純粋に公子を慕う者は皆無といっていい。

太子派には与し難いが甘い汁は吸いたい者や、寵妃に取り入り皇帝に近付こうとする者、公子派が優勢とみて味方につく者など、様々だ。

それを黎貴妃が上手く御さねばならない。自分の地盤を固めるためとはいえ、面倒なものだ。凛凛の手を借り支度を整えながらも、溜息を堪えることはできなかった。

支度を終えた黎貴妃は、黄玉宮を通った先にある謁見の間に向かった。

黎貴妃が通る度に、女官や宦官たちは深く頭を垂れる。中には慌てて平伏する者の姿もあった。幸いなことに、目障りな視線を寄越す妃妾やその侍女たちの姿はない。宴の準備に掛かり切りになっているのだろう。

薄暗い通路を進むと、重厚な扉があった。先に護衛の宦官が室内を検め、次に付き添いの侍女に手伝われながら中に入る。

謁見の間は狭く、薄暗い。前面には御簾がかけられ、辛うじて外を見ることができた。

御簾の外側には護衛の宦官が二人、黎貴妃や面会

者からは見えないが、異変があればすぐに対応できるよう、建物の死角となる場所に四人の宦官が控えていた。

「慮官吏。至急とありましたが、どのような用件でしょうか」

玉砂利が敷かれた軒先に膝をつく壮年の男は、名を慮考儒といった。

恰幅がよく、官服は人の二倍の生地を使用しているだろう。下がり切った目尻を、愛嬌があると取るか、好色な顔付きと取るかは、人それぞれである。黎貴妃はたまに見せる舐めるような視線に、御簾越しであるにもかかわらず背筋を粟立てたことがあった。

考儒は六部の一つ、戸部に所属する官吏だ。土地の管理や、戸籍の統括、俸給などの分配を行っている。

考儒自身の位は高くはないが、彼の生家は宮中に強い影響力を持っている。味方に引き入れて損はない相手だ。

「宴の件にございます。実は、その席に太子が出席なされると聞き及びまして、黎貴妃様にご報告にあがりました」

「……回復されたのですか？」

太子博焚が病に臥しているという噂は、真偽のほどは定かではないにしろ、宮中では知らぬ者がいないほど有名なものだ。

宴に出るというならば、病は回復しているということになる。

「そろそろ姿を見せねば、まずいと判断なさったのでしょう」

確かに、このまま病に臥せっているようであれば、それを理由に太子を廃嫡に追い込める。また、皇帝自らその指示を出す可能性もあった。太子側もそれを危惧し、今回の宴で噂を払拭するべく動いたとしても不思議はない。

そこまで考えた黎貴妃は、御簾越しに考儒へと視

線を向けた。
「用件はそれだけですか？」
「絶好の機会かと」
「……」
意味深長な考儒の台詞に、黎貴妃は眉を寄せた。なにを言わんとしているかは、薄々とだが察することはできる。宴を利用して、ようやく人前に姿を見せた太子を暗殺しようというのだろう。
公子派の面々には勝手な行動は禁じてあるので、報告にかこつけて、わざわざ許可を取りに来たのだということが推測された。
「慮官吏のお考えでしょうか？」
「いいえ。公子派に属する者たちの総意にございます」
「総意？」
そんなわけがあるか、と黎貴妃は返したかった。だが、ここで声を荒らげるのは得策ではない。気を落ち着け、ゆっくりと息を吸った。そして、威厳を崩さぬようにゆっくりと告げる。
「招達殿はなんと？」
黎貴妃が口にしたのは、公子派の官吏である。管招達。門下省の最高責任者であり、皇帝の寵臣として名を馳せる人物だ。
何事にも慎重な招達が、このような馬鹿げた話を許可するはずがない。少なくとも、無駄だと切り捨てるだろう。
「それは……」
考儒は言い淀んだ。総意と言いながら、かかわったのは一部の者たちだけだろう。
このままでは、たとえ公子派が勝利を収めても、自分の官位は思ったほど上がらないと判断したのか、それとも、手柄を立てなければと、功を焦る誰かが考儒を唆したか――。
「どうしたのです。言い淀むということは、総意ではなかったと受け取りますが？」
「い、いいえ！　管侍中はあまりにも慎重な方で

す。おそらく、よい顔はなさらないでしょう」
「当然ですね」
「しかし、みすみす今回を逃す手はございません！」
愚かなことだ。
総意とは偽りであったと、自分の口から告白しても同然である。それを黎貴妃が咎めないとでも思っているのだろうか。
黎貴妃は片手で額を押さえながら、考儒に聞こえないように嘆息した。こんな男ですら、生家の影響力を考慮してこちらの陣営に留めておかなければならない。物事を有利に運ぶためとはいえ、不快さが募る。
どうすれば、馬鹿げた計画を阻止できるか。黎貴妃は言葉を選びながら、口を開いた。
「私は反対です」
「なぜです！」
「宴には、太子だけでなく陛下も出席なさるのですよ？」
暗に、太子や皇帝が出席するため警備がいつにも増して厳重になる、と含めたつもりなのだが、考儒は違った意味に取ったようだ。
「宴を壊さずに成し遂げてみせましょう。陛下の御不興を買うようなことはございません。なにより、目障りな者が消えれば、陛下もお喜びになるはずです」
考儒はなんとしてでも手柄をあげたいらしい。だが、それほど簡単に太子を暗殺できるならば、とっくの昔に成功しているだろう。
互いに、暗殺には警戒しているのだ。その難しさは、黎貴妃も熟知している。なぜ、そんな簡単なこともわからないのか。
「……なにがあっても、許可は出せません。どうしてもと仰るのならば、招達殿の了承を得てください。それならば、考えてみましょう」
「黎貴妃様！」

「あなたの〝総意〟という発言は聞かなかった。そういうことにしておきます」

偽りを水に流すのだから、暗殺は諦めてほしい――それが、黎貴妃にできる最大の譲歩だ。しかし、功名心に焦る考儒は、今にもこちらに突進してきそうな勢いで声を荒らげる。

「お待ちください！　あなたは、我が子を太子の座につけたくは――」

「憲官吏。言動を慎みなさい！」

これ以上、功名心に逸った男に発言を許しておくのは危険だ。

護衛の宦官も、付き添いの侍女も自分の息の掛かった者ではあるが、全幅の信頼を置いているわけではない。その程度の配慮もできないのか。

「謁見はここまでです」

考儒は項垂れるように顔を伏せ、膝をついていた。一見して諦めたようにも見えるが、油断はできない。念のために招達へ文を送り、公子派の動向について注意を喚起しておく必要があった。

招達は公子派ではあるが、黎貴妃に好意的ではない。だが、頭の切れる男だ。太子の暗殺がどれほど無謀か、自分に言われるまでもなく熟知している。間違っても、憲官吏の言に惑わされることはないだろう。

今の段階で、味方が減ることは避けたい。それが使えないどころか、こちらの心労を増やしてくれるような人物であってもだ。

なぜ、味方にも監視をつけなければならないのか。謁見の間をあとにした黎貴妃は、重い溜息をついたのだった。

管招達は平伏していた。

紫宝宮の奥にある皇帝の執務室。その戸口のところで、どれほど待たされているだろうか。

沸儀は黙々と提出された書状に目を通し続けてい

る。内装は皇帝の室とは思えぬほど質素なものではあるが、執務をする環境としては完璧に整えられていた。

卓にある書状がなくなれば、それを見計らったかのように現れる宦官が次の分を載せる。まるで流れるようだ。

しばらくすると、ようやく一区切りがつくところまで来たのか、沸儀の声が響いた。

「入れ」

立ち上がり、深く拱手する。「宴の件で参りました」と告げ、室内に足を踏み入れた。

執務机に向かう皇帝は、そこにいるだけで重厚な存在感を発していた。普段から見慣れている招達ですら、畏怖を感じる時がある。

官服の上からでもわかる屈強な肉体は、戦場から遠ざかった今でも衰えをしらない。おそらく、禁軍に所属する者ですら、未だに沸儀に敵う者はいないだろう。

「后妃様は体調が芳しくなく、当日は欠席なさるとのことです」

「そうか」

「禁軍より、その分の警備を四夫人方と太子に割きたいとの申し出がございましたが、いかがいたしましょう？」

「好きにせよ」

「かしこまりました」

沸儀は分類した書状の一画を示し、「残さず処分しておけ」と宦官に命じた。

慌ただしく運び出されるのを横目で眺めながら、招達は淡々と続ける。

「宴には花街の名妓を呼ぶようです。その余興の一つで、大衆向けの占が行われるとか」

「くだらぬな」

沸儀の声は冷たい。元より、占に対する沸儀の信頼は低かった。宮中に籍を置いている占師たちが、あまりにも無能なせいである。

だが、宴を担当した官吏たちは、その事実を知らない。知っていれば、演者から占師を外していたことだろう。

「しかし、珍しい占をする者のようです。容姿や年齢、性別すら不明だとか」

「……」

「妃妾様方におかれましては、興味を持っておられる方もいるようです」

「好きにさせろ」

興味がない、とばかりの返答に招達は頭を下げた。

「……ところで話は変わりますが、ここのところ紅箏言殿をお見掛けしません。いかがされましたか？」

紅箏言は、奇妙な人物である。少なくとも招達はそう認識している。

年齢はまだ若い。病的なまでに白い肌と、不釣り合いなほど赤い唇が印象的な人物だ。

性格は水と油のように、一生かかっても理解できぬ相手でもある。

官職にあるわけではない。なにを生業としているかすら不明だったが、箏言は沸儀の執務室への出入りを許可されていた。むろん、自由に出歩ける場所は限られているため、宮中でもその存在を知る者は少ないだろう。

顔を合わせる度に、嫌味の応酬を行っていたが、最近は滅多に会わなくなった。清々したといいたいのが本音ではある。

しかし、姿が見えないなら見えないで、なにかよからぬことでも企んでいるのではと、気にせずにはいられない。

「貴様が知る必要はない」

「……差し出がましいことを申しました。お忘れください」

やはり自分で調べるしかないようだ。以前から、それとなく箏言の周囲を見張ってはいたが、なにしろ出入りが制限されている場所にしか現れない相手

である。監視を命じられた官吏は、自分では限界があると頭を垂れていた。

果たして、行方がわかるかどうか。それに、沸儀の機嫌を損ね処罰された恐れもある。下手に調べれば、招達自身もいらぬ不興を買うだろう。

「最後に、一つだけお耳に入れておきたいことが。なにやら、猩猩緋の行動が活発になっているようです。人員を華安に集結させている――そう報告がありました」

義賊を称する奴らは、実に厄介な存在である。間者を送り込んでも、すぐに見破られてしまう。どれほど巧妙に装っても、長くもった例がなかった。こちら側に内通者が紛れ込んでいるのではと、疑いたくなるほどである。

また、隠れ家を探ろうにも場所の特定が難しく、龍乎や禁軍ですら未だに発見には至っていない。方々に手を尽くし、辛うじて動向を摑むのが精一杯というのが現状であった。

「宴を狙うか。面白い」

初めて沸儀の表情が動いた。

細められた目と、わずかに持ちあがった唇は、これから起こると推測される事態を楽しんでいるようだ。

「禁軍が察知しているかどうかは不明です。情報を流しますか？」

「いらぬ」

楽しみが減るとばかりに、沸儀は即答した。招達は胸裏で、自分と配下の者たち用に逃走経路を確保しておいた方がよさそうだと嘆息した。

「では、そのように」

深々と頭を下げた招達は、そのまま門下省にある居室へ向かった。

やるべきことは山のようにある。息をつく暇がない。意欲はあるが、年々衰えつつある肉体ばかりはどうすることもできない。

室内に入ろうとしたとき、廊下に控えていた配下

の者が一通の文を差し出した。
「後宮より、大至急とのことです」
あの場から招達に文を寄越す者は、一人しかいない。知らず招達の眉間にしわが寄せられた。
「阿呆共が」
文には、公子派の慮考儒が面会に訪れた旨と、宴でなにかを用意するようですと、書き綴られてある。一見さりげない内容だが、今、この時期に送られてきたことを考え合わせれば、〝なにか〟は太子の暗殺を仄めかしているように取れる。おそらく間違いはないだろう。
よほど急いだのだろう。美しい筆跡が、ところどころ乱れている。
「呼びつけて釘を刺すか……」
考儒らの思惑は見当がつく。
公子派の中でも確実に権力を握れる地位に立ちたいのだろう。このままいけば、強い権力を握るのは、実母である黎貴妃、そして皇帝の寵臣とされる自分だ。考儒はそのどちらにも信を得ていないと、焦っているのだ。
むろんことが成れば、功労者として優遇はされるが、官位が一つあがればいい方だ。それでは満足できずに、太子暗殺という甘美な果実に惹かれたか——。
招達は座卓に向かい、額に手を当てた。
現状は公子派に有利である。なによりも皇帝が太子を疎んでいるということが大きい。太子は、そう遠からずに廃嫡に追い込まれるはずだ。むろん、太子とて座して待つだけではないだろう。帝位を手にするため、必ず動きを見せるはずだ。謀反と判断されたならば、禁軍へ勅旨が下る。
こちらはなにも手出しせず、相手の出方を窺っているだけでいい。それで勝利を手に入れられるというのに、考儒は功名心に焦るあまり危ない橋を渡ろうとしている。
「忠告したところで、思い留まるかどうかは半々か

……」

互いに信用の欠片もない間柄だ。下手をすれば、手柄を独占するつもりかと勘繰られる恐れもある。しかし、だからといって静観することもできない。考儒はまず間違いなく太子の暗殺を実行するだろう。そして、それはかなりの確率で阻まれる。

考儒たちを切り捨てることは簡単だが、それによって生じた穴を埋めるには時間がかかる。現状の優位を維持するためにも、考儒たちの愚かな行為はなんとしてでも阻止しなければ。

「まったく。味方だというのに、なぜ面倒事を起こすのだ」

幸いなのは、公子派の筆頭でもある黎貴妃が頭の切れる人物であることだ。考儒並みであれば、嬉々として太子の暗殺に手を貸しただろう。考えただけで頭痛がする。

苦々しげな表情を浮かべ、招達は文を作成するべく筆を取るのだった。

隠れ家で体を休める冬雁に呼び出しがあったのは、襲撃を四日後に控えた夜のことだった。

向かった先は、兎天の房室である。室に入ると、麝香の匂いが冬雁の鼻孔をくすぐった。兎天が愛用している香である。

室内にあるのは卓のみ。冬雁が扉の傍に控えれば、卓に向かっていた兎天がゆっくりと振り返った。

「遅くに呼んですみませんでした」

「いいえ！　兎天様の命とあれば、いつでも馳せ参じます！」

「……ありがとうございます」

柔らかな声音に、冬雁はうっとりとした。冬雁の師である兎天は、厳しくもあるが優しくもあった。孤児であった冬雁は、自分に手を差し伸べてくれた兎天を父のように母のように慕っている。

「あなたも忙しいでしょうから、さっそく用件に入

りましょう。話は、襲撃のことに関係があります」
「はい」
「あなたはそれには加わらず、部下とともに別行動を取ってもらいます」
　告げられた言葉に、冬雁は内心で首を傾げた。自分が得意とする飛び道具は、宴を混乱させるのに大いに役立つだろうと思っていただけに、心底意外だった。
「内容を教えてください」
「あなたに命じるのは、宮中で密かに行われている〝呪〟の調査です」
「……呪、ですか？」
「ええ」
　耳慣れない言葉に、冬雁は困惑した。しかし、兎天は構わずに説明を続ける。
「場所は紫宝宮です。おそらく、どこかに隠し部屋か通路があり、そこで行われているはず。襲撃の混乱に乗じて紫宝宮に侵入し、儀式がどこで行われているのかを探ってください」
「兎天様。儀式とは、いったいどのようなものなのでしょうか。一見して、それとわかるようなものですか？」
「詳しくは不明です。ですが、複数の呪師がかかわっているとありましたので、見ればわかるでしょう。紫宝宮の詳しい見取り図は手に入れてあります。怪しいと思われる部分を数箇所、こちらで絞っておきました」
　兎天から手渡された見取り図は実に精巧なもので、冬雁は思わず見入ってしまった。
「すごい……」
「ここまで作成するのに、かなりかかりましたからね」
　確かに、数日でできるものではない。紫宝宮には皇帝の室をはじめ、各省が集められている。規模も相当なものだ。
　一人や二人では、見取り図を完成させることはで

きないだろう。

「印の箇所が、隠し部屋か通路があると思われるところです。一見して不自然ではありませんが、外と内を見比べてみると、空間があるのがわかります。紫宝宮は皇帝や官吏たちが大勢詰めていますからね。そういったものが点在していても、おかしくはないでしょう」

印は全部で三箇所。手分けすれば確認はすぐに終わるだろう。なんの妨害もなければ、の話ではあるが。

「わかりました。紫宝宮に入り、確認するだけでよろしいのですね？」

「ええ。どのような呪術が使用されているかは不明ですからね。途中で阻害すれば、なにが起こるかわかりません。あなたはそれが行われている部屋の正確な位置と、見てわかる範囲でどのような呪術かを確認するだけでけっこうです」

「はい」

なぜ呪術が行われているのか、それはいったいなんの意味があるものなのか、疑問はあったが、兎天が語らないということは自分が知らなくてもいいということだ。余計な詮索は猩猩緋に必要ない。

「いいですか、冬雁。このことは他言無用でお願いします。あなたの部下たちにも、教えるのは襲撃直前にしてください」

「はい」

それだけ重要な任務ということだろう。

自分を信頼してくれているのだと、冬雁は胸が熱くなった。

「……そういえば話は変わりますが、集中が乱れているようですね。なにかありましたか？」

「え？」

「龍天山（りゅうてんざん）から戻ってきてからでしょうか。気付いていなかったのですか？」

兎天の指摘に、冬雁は困惑した。しかし、龍天山での任務を思い返した途端、ある男の顔が脳裏を過

る。

傍若無人を絵に描いたような男だった。龍乎のくせに、猩猩緋である自分にあまりにも馴れ馴れしかった。

大きな腕は身動ぎできないほど力強く、こちらを見る目は実に生き生きと輝いて――。

「――な、なにもありませんでした！」

とっさに否定するが、頬に朱がのぼるのを止められない。

兎天の顔が見られずに俯くと、頭上から冷ややかな声が響いた。

「ならばいいのです。ただし、任務には気を引き締めて取りかかってください。私を失望させないように」

「……はい」

昂っていた感情が、一瞬にして冷えた。全身に水をかけられたような気分だ。

「あなたには期待していますよ、冬雁」

普段ならば、ただそれだけで舞いあがっていただろう。期待している。それは冬雁にとって、やる気を起こす褒め言葉の一つだ。

しかし、その前に告げられた言葉が、冬雁の脳裏に反響する。

「お任せください。必ず、兎天様の期待に応えてみせます」

体が震える。

だめだ。失望されることだけは、絶対に避けなければ。任務さえ忠実にこなしていれば、兎天は自分を見てくれる。両親のように、自分を捨てたりはしない。

だから、暗示のように強く思い込む。心が揺らがないように、強く、強く。

あの男のことは忘れよう。

あんな風に想いをぶつけられることは初めてだった。だから、どう対応していいかわからず戸惑っているだけなのだ。そこに深い意味はない。

また顔を合わせた時は、今度こそ確実に殺せばいい。そうすれば、きっと己の心から消えてくれるだろう。

顔をあげれば、無機質な鬼面が自分を見下ろしていた。兎天の忠告に気を引き締め、冬雁は立ちあがった。



宴の当日は、雲ひとつない晴れ晴れとした青空が広がっていた。春蘭は俥の陰に座り、周囲のざわめきを聞きながらのんびりと過ごしていた。

ぼんやりと座っている春蘭を他所に、月儀によって演目の確認が行われている。宴に出るのは、黄海楼でも名立たる妓女たちだ。

この日のために、彼女たちは舞や演奏の稽古に明け暮れ、本番を迎えた今日は闘志を燃やしている。

「いいかいお前たち。あそこにいるのが、うちの敵だからね」

敵、という言葉に、警備担当の兵士がぎょっとする。春蘭たちがいるのは、演者のために用意された準備用の広場だ。

すぐ脇には石畳の階段があり、それをのぼったところにある中庭で宴が催される。ここに到着したあとで月儀は妓女たちと共に下見をしたのだが、かなりの規模に誰もが言葉を失ったものだ。

石畳の上には、官吏たち用の赤い敷物が等間隔に敷かれ、奥には中庭を囲うように豪奢な宮殿、華宴宮があった。その中央に設けられた段に、皇帝が座すのだろう。

両脇には、御簾が下ろされた個室のようなものが幾つも並んでいる。后や妃妾用の室だと、紅燕が教えてくれた。

黄海楼の妓女たちは、豪奢な宴の場を見てよりやる気が増したらしい。目付きもがらりと変わり、演目の復習に余念がない。

特に月儀たちが敵視しているのが、後宮の宮妓たちだ。妃妾と違い、彼女たちは後宮において皇帝を

芸で楽しませる。宮中で催される宴に花を添えるのも、宮妓たちの役目である。

そこに花街の妓女たちが呼ばれたのだ。間違いなく、あちらも対抗意識を燃やしていることだろう——というのが、月儀の見解である。

「黄海楼、いや、花街の威信にかけて絶対に成功させてみせるわよ！」

月儀の力強い声に、妓女たちが唱和する。この勢いならば、場の雰囲気に萎縮するということもないだろう。

春蘭は俥の隙間から、中で出番を待つ守真に声をかけた。

「守真、気分はどうだ？」

「……緊張で吐き気がするよ」

「昨日もそう言っていたではないか」

春蘭は相変わらずの発言に嘆息する。秋菊に扮した守真は、体の線を隠すためにゆったりとした袍を纏い、顔を隠すために同じ色の頭巾を頭から被っていた。

黄海楼で占を行う際、主に秋菊に扮していたのは月儀だ。しかし、今回の宴で、月儀は楼主として場を切り盛りしなくてはならない。その代役として抜擢されたのが、守真だった。

気弱げな性格が災いしたのか、大役を告げられてから今日まで、守真は一度として明るい顔をした例がない。始終、青褪めた表情で溜息ばかりついていた。

手順は幾度となく確認したが、本人は不安でしかたがないようだ。

「ぬしはただ黙っていればいいだけなのだぞ。もう少し気持ちを大きく持て」

「わかってるよ……でも、場所が場所なだけに……うぷっ」

俥の中でぐったりとする守真に、春蘭は溜息をついた。

「なに、まだめそめそしてるの？」

振り向けば、そこには美しい化粧を施した紅燕の姿があった。

目にも鮮やかな朱色の襦裙に、髪はいつもより念入りに結い上げている。一目で気合いが入っているとわかった。

「いい加減、覚悟を決めなさいよね。男のくせに意気地がないんだから。あんまりうじうじしてると、月儀姐さんに尻を蹴り上げられるわよ」

「そう言うな、紅燕。守真は注目されることに慣れていないんだ。妓女たちとは年季が違う」

「情けないわねぇ」

幸いにも、緊張のしすぎで紅燕の声は耳に届いていないようだ。聞こえていたら、ますます落ち込んだことだろう。

「ところで、舞の確認はよいのか？」

紅燕は他の妓女たちと共に、得意の舞を披露することになっている。

後半には、紅燕だけが舞う場面もあり、ある意味、守真などとは比べ物にならないくらいの重圧が掛かっていてもおかしくはない。

「ふふん。私は完璧よ。これほどじゃないけど、官吏の宴には指名されることもあったから慣れているの」

「それは頼もしいな」

「当然じゃない」

得意げに胸を張った紅燕は、ここで用件を思い出したのか、「そうそう」と言葉を続けた。

「あなたを呼んでる人がいるの。あっちの茂みに行ってみなさい」

「誰だ？」

「いいから！」

広場の脇には低木が植えられている。そちらを指差した紅燕は、なぜかにやにやと意地の悪い笑みを浮かべていた。

首を傾げながらも足を向ければ、そこには十日振りに顔を合わせる人物がいた。

「仲望！」

低木に隠れるようにして座っていたのは、官服を着た仲望だった。髪も結い上げ、初めて見る冠を被っている。

「元気にしていたか？」

「うむ」

仲望とは龍乎の詰所で会って以来、玄楽を警戒して文でのやりとりすら控えていた。楊秀からの文で禁軍の詰所に通っていたことは知っていたが、会うのは本当に久し振りである。

「ぬしは少し痩せたな」

不要な肉が削げ落ちたといった方が正しいだろう。顔付きも鋭くなり、肩幅も心なしかがっしりとしたように見える。

「楊秀に扱かれたからな」

仲望の手や官服の袖から覗く腕には、剣による切り傷がいくつも見られた。中には、まだ赤く腫れている箇所もある。

「春蘭もいつにも増してめかし込んでいるな」

指摘を受け、春蘭は苦笑した。

いつものでいいと言ったのだが、月儀や紅燕は取り合ってくれなかった。晴れの舞台に選ばれたのは、手触りのよい薄桃色の鮮やかな襦裙である。腰裙はそれよりも色の濃い紅色で、腰紐には金色のものが選ばれた。裾や袖には金糸で刺繍が施され、春蘭が歩く度にきらきらと輝きを零す。

髪型にも趣向が凝らされ、赤紫色の蘭の花で飾られてしまった。さらに金の細い簪を左右に三本ずつ挿され、かなりの重量となっている。

化粧も念入りに施され、鏡を見た時にはいったい誰だと自分の目を疑ったほどだ。

「化粧が崩れたらやり直しだから、あまり顔を動かすなと言われた」

「それは大変だな。俺も朝から啓璋と友寧に囲まれたぞ」

「……ならばせめて、地面に座るのはやめてやれ。

せっかくの服が台無しだ」
　仲望は、土が剝き出しになっているところに座っていた。官服にも汚れがついてしまうだろう。
「姿を見られるのはまずい。上に官吏たちが集まってるからな」
「では、もうそろそろか。ぬしは行かなくてもいいのか？」
「ああ。俺は隅の方だから、もう少ししてからこっそりと紛れ込むよ」
「そうか。ところで、やけに警備が厳重なのだな。いつもこうなのか？」
　周囲には巡回中の兵士が目立つ。宴という華やかな催しにそぐわない殺気だった雰囲気に、黄海楼の妓女たちも不安げに眉を寄せていた。
「いや、今回は太子が出席するからな。万が一に備えているんだろう」
「どういう意味だ？」
「宮中は今、太子派と公子派で真っ二つに割れている。太子は病を理由に、今まで公の場には姿を見せなかった。だが、この宴には出席すると触れがあったんだ」
「ふむ。それで、なぜ警備が厳重になるのだ？」
「太子は暗殺を恐れて病を装っているのではないか、という噂があるんだ。公の場に姿を現さなければ、それだけ暗殺の危険も少なくなるからな」
「なるほど」
　つまり太子が姿を見せるということは、公子派にしてみれば絶好の機会というわけだ。しかし、宴の最中に太子を暗殺されたとあっては禁軍の面目も丸潰れである。それを未然に防ぐために、警備を厚くしたのだろう。
「まあ、陛下の御前だ。さすがの公子派も自重するだろう。だが、万が一ということもある。春蘭もできる限り注意してほしい」
「わかった。それに、秋菊は占える回数に限りがあると申告してある。そう長い間、中庭にいるわけで

はないのだから案ずるな」

占を際限なく要求されることを防ぐために、事前につけた条件だ。これは妓楼でも、一日の客数を限定していたため疑われることなく承諾された。

「……心配なんだ」

結い上げた髪を崩さないように、仲望は指先で春蘭の花飾りに触れた。

「この間のことで、自分の限界を思い知らされた。だから、余計に」

「私はぬしに護って貰おうとは思わぬぞ。白桃もいるし、なんとでもなる」

春蘭の言葉に、仲望が苦笑した。

「知ってる」

「だが、その気持ちはありがたいと思う」

驚いたように目を瞠った仲望は、それから穏やかな笑みを浮かべた。

「玄楽と会った時、少しだけ言葉を交わした」

春蘭の言葉に、仲望が肩を揺らした。

「あやつが、守り神を隷属させるにはわけがあるのだろう。なんの意味もなく、自殺行為に等しい暴挙に出るはずがないからな。その原因を聞き出して、解決できれば真名を返してもらえるのでは――そう考えた」

玄楽の返答は〝拒絶〟だった。逃げるための口上と思われたのかもしれない。しかし、わずかな言葉からわかったこともある。

「守り神を隷属させることが〝ようやく見つけた解決策〟だと言い、命が惜しくはないのかという問いには、〝命以上に大切なものがある〟と答えた。そして、それは己の死を偽ったことに関係があるのか、という問いには、沈黙した」

「兄は、なにを……」

「わからぬ。だが、本人は拒絶しているが、それをはっきりとさせて解決してしまえば、真名を持つ意味がなくなる」

「春蘭は、兄の事情を探るつもりなのか？」

「うむ。あやつを倒すことは難しそうなのでな。こちらを信用して、事情を話してくれればよいのだが……」

さすがにそれはむりだろう。

春蘭が玄楽の前に姿を見せれば、会話する暇もなく襲い掛かってくるはずだ。攻撃を避けながら説得するなどと、そんな器用なことが春蘭にできるはずもない。

「しかし、どうやって探るんだ？」

「私には占という強みがある。少し、それで探ってみようと思う」

むろん、占ですべてがわかるわけではない。だが、解決の糸口くらいは見つけられるだろう。それが悩んだ末に出した結論であった。

「……そろそろ行くか」

「楊秀に会ったら、よろしく言っておいてくれ」

「わかった」

頷くと、仲望は春蘭の頬に触れてから立ち上がった。そして、大広場へと向かって行く。触れられた箇所が熱を持ったように熱かった。春蘭は気を紛らわすように「……化粧が崩れたらどうする」と、呟いた。

そして、俥に戻ろうと振り返れば、少し離れた場所に隠れる二つの影を見つける。

「ちょっと、どういうこと？　やっぱりそういうことなの？」

「きゃー、ってなったよ！」

紅燕、祥琳（しょうりん）の順に食って掛かられ、春蘭は頬を引き攣らせたのだった。

宴は滞りなく進んでいく。

階段下の広場で待つ春蘭の耳には、心地よい楽の音が届いていた。

今は楽に合わせて、紅燕たちが舞を披露しているはずだ。先ほどまで祥琳も春蘭の傍にいたのだが、

もう少し傍で聴いてくると言って、大広場に行ってしまった。

祥琳は妓女ではなく、手伝いとしてここに連れて来られている。もっともそれは名目で、いずれ宴に呼ばれた時のためにと、月儀が学ばせるために連れて来たのだ。

大広場に登ることは許されていないが、階段の中腹までならば問題はない。そこに立つ禁軍の兵が、微笑ましそうに祥琳を見詰めていた。

「お、楽が終わったな」

春蘭の言葉に、俥が微かに揺れた。紅燕たちが演じ終えれば、次は秋菊の番である。

「そろそろ腹を括れ」

「……春蘭みたいにはなれないよ」

先ほどよりも、さらに弱々しい声音が返ってきた。祥琳も緊張には弱かったが、守真は筋金入りのようだ。

「だって、皇帝陛下の御前だよ？」

「頼むから気絶だけはしてくれるな」

「……善処します」

衆目の中、秋菊に倒れられてはどうしようもない。黄海楼の面目も丸潰れである。もっともそう指摘すればするだけ、守真の重圧が増すため口にはしないが。

「緊張しすぎで胃が痛くなってきた……」

「月儀にもらった胃薬を飲め」

「もう飲んだよ」

「では、胃痛は気のせいだ」

「うん……」

「そう思っておけ」

月儀が守真に渡したのは、ただの小麦粉なのだがそれは言わぬが花というものだろう。思い込みというものは、時として意外な効果を発揮することもある。

「紅燕たちが戻って来たぞ」

「ううう……胃が……」

守真の呻き声が漏れた。
顔を紅潮させた紅燕が、飛び跳ねるような足取りでこちらへやってくる。
きれいに結い上げた髪をやや乱れさせた姿は実に艶やかで、巡回中の兵士たちの目を釘付けにしていた。
「聞いてよ、春蘭！　皇帝陛下にお褒めの言葉をいただいたわ！」
「それはすごいな」
「その瞬間の宮妓たちの顔ったら！　あなたたちにも見せてやりたかったわ」
弾けるような笑みを浮かべる紅燕に、春蘭は苦笑した。見れば楽器を片手に戻ってきた妓女たちも、みな誇らしげな顔付きをしている。
その中から、月儀がまっすぐにこちらへとやってきた。
「さあ、出番よ。準備してちょうだい」
「うむ」
月儀と紅燕が俥の御簾をあげる。春蘭が手を取れば、観念した守真が装いを崩さないようにゆっくりとした足取りで進み出た。
途端に、広場にいた者たちの視線が守真に集中する。祥琳が近寄ってきたが、他者の視線があるため守真に声をかけることはできなかった。
「春蘭、頼んだよ」
「月儀姐さんが後ろに控えてるからね」
「うむ」
「なにがあっても、慌てたらだめよ」
やはりなにかと心配なのだろう。特に紅燕は秋菊の正体が春蘭であると知らされてはいるが、実際にその占の場を見たわけではない。ついさっきの興奮を忘れたかのように、不安げな眼差しを浮かべていた。
「では、行ってくる」
守真の手を引きながら、ゆっくりと歩き出す。守真が頭から被っている頭巾は、足許は見えるように

なっているが、視界はほとんど遮られている。春蘭の導きがなければ、進む方向もわからないのだ。

「春蘭……頑張ってね」

祥琳の声に、守真の手がぴくりと動いた。がちがちに強張っていた雰囲気がわずかに緩む。

祥琳に笑いかけ、春蘭は唇を引き締めた。そして、一歩、一歩、石畳の階段を登っていく。中庭を包むざわめきが耳に響き、また守真の体が強張った。歩みは遅くなるが、視界が遮られているというのは守真にとってよかったのかもしれない。

階段を登り切った途端、一斉に視線が向けられた。目では見えなくても気配でわかるのだろう。握り締める守真の手は、緊張で小刻みに震え、驚くほど冷たくなっていた。

中庭では、中央の通路の両脇に官吏たちが雑然と並んでいる。一人一人の前に膳が並び、中には酒の飲み過ぎで顔を真っ赤に染めている者もいた。ただ酒の席にもかかわらず、全員が緊張したように背筋を伸ばしているのが印象的だった。

そして、通路を進んだ先に、男がいた。

建物の影となっているため、顔をよく窺うことはできない。足許に宮妓を侍らせ、酒を注がせているようだ。

暗がりから向けられた炯々（けいけい）とした視線と、そこにあるだけで威圧される存在感に、知らず春蘭は息を止めていた。これでは官吏たちも、酒に酔うことはできないだろう。

「――前に」

背後から月儀の声が聞こえた。

我に返った春蘭は、守真の手を引きながら中央に進み出る。脳裏で手順を確認しながら、二人でその場に平伏した。

「これが黄海楼で名を馳せております、占師秋菊でございます」

月儀の声を合図に、紅燕が水の張った盆を春蘭たちの前に置く。春蘭は守真に持たせていた水神盤を

受け取り水に浮かべた。
「秋菊は腕と言葉が不自由でございますゆえ、そこの童女の介添えをお赦しください」
占は四人が限界である、と先方には伝えてある。また、内容も失せ物探しや簡単な吉凶、恋占い以外は難しいとも。それでも構わない、というのが答えであった。
「――それでは、秦官吏様」
月儀の言葉に進み出たのは、恰幅のよい四十代前半の男であった。皇帝に見えるようにと配慮したのだろう。春蘭たちの前ではなく、脇に控えるように腰を下ろす。
「近々、姪の婚礼がある。日の吉凶を占っていただきたい」
詳しい日にちと、夫婦になる者たちの名を聞いた春蘭は、守真の手を水神盤に翳すように移動させ、自分の手をその下にさりげなく添えた。
幾度も練習を重ねたおかげで、一連の動作に違和感はない。気を注げば、水神盤が呼応するように旋回を始めた。それを目にした官吏たちから、ざわめきがあがる。
秦官吏も身を乗り出すようにして、水神盤を見詰めている。
やがて卦が浮かび、春蘭は守真の腕を下ろした。口元に耳を近付け、頷く振りをする。
「吉日ですが、雨が降ります。前日も吉日ですので、支障がないのであれば変更してはいかがでしょうか」
「雨ですかな」
婚礼の際の雨は、あまりよい兆候ではない。
だが、相手は不満のようだ。雨が降るかどうかは、当日になってみなければわからないといいたいのだろう。
吉日なのだから変更するくらいよいではないか、と春蘭は内心で嘆息し、再び守真の口元に耳を寄せた。

「前日であればすぐにでも子宝に恵まれます」
周囲から「それは吉慶」と、声があがる。だが、秦官吏の表情は優れない。
当然だろう。彼の姪はすでに子を身籠もっていた。吉と浮かんだ卦の隅に、妊婦を表す文様が浮かんだのだ。
しかし、訊ねられたのはあくまでも当日の吉凶である。だから春蘭は、あえて姪の体調に触れることはなかった。
「そ、それはいい。ぜひ前日にしましょう」
焦ったように告げ、秦官吏はさっさと自分の席へと下がって行った。どうやら、姪の体調を知っていたようだ。
名家の子女が婚礼前に子を身籠もるのは醜聞だ。家名にも傷がつく。姪の妊娠を暗示するような占に動揺したのだろう。
「――では、李官吏様」
続いて進み出たのは、秦官吏とは逆に痩せ細った初老の男だった。心なしか顔色が悪く、一挙一動がゆっくりとしている。
「私は、死んだ妻の形見である簪を大切にしていました。それが、どこを探しても見当たらんのです。失せ物探しが得意とお聞きしたので、ぜひ見つけていただきたい」
妻の名を聞き、春蘭は守真の手を水神盤に翳した。ゆらゆらと水面を旋回し、溝を浸食する水が止まったところで水神盤も動きをやめる。
「――酒の席で、お孫さんに差し上げたのではありませんか？」
「は？　孫に？」
「華安ではなく……他に住んでいる方です。時期は五年ほど前。祝いの席だったようです」
唖然とした李官吏であったが、我に返ったあとで感嘆の眼差しを守真に向けた。
「確かに、五年前に私の昇進祝いを行いました。あれには、東都に住む息子夫婦も顔を出しまして……



ああ、そういえばそこには年頃の孫が」
「酔っておいでです？」
「はい。途中から記憶がなく、起きたらすでに朝でした」
春蘭は守真の口元に耳を寄せる振りをして、水神盤に浮かんだ卦を伝える。
「大切になさっているようです」
「ああ……すぐに確認の文を出してみます」
李官吏の目にうっすらと涙が滲んだ。失くしたと思っていた簪が、孫娘の手にあるとわかったのだ。しかも大切にされていたと聞けば、感動もするだろう。
しきりに礼を述べ、李官吏も席へと下がって行った。
「――次に、慮官吏様」
三人目は秦官吏よりも、さらに恰幅のいい壮年の男だった。
垂れ下がった目尻が、なぜか守真ではなく春蘭に向けられる。全身を舐め回すように見られ、不快感に背筋が粟立った。
「失せ物探しや吉凶では、場も盛り上がらんでしょう。ここは一つ、誰が次代の皇帝陛下となるか占っていただきたい」
官吏たちにざわめきが拡がった。驚愕の表情を浮かべる者もいれば、渋面を作る者、興味を示す者など千差万別だ。
だが、咎め立てする声はあがらない。月儀を見れば、約束が違うというように唇を噛んでいた。つまり、これは慮官吏の独断なのだろう。
春蘭の脳裏に、太子派と公子派の構図が浮かんだ。この男がどちらの陣営に与しているかは定かではないが、場に一石を投じて満足したのか得意げな笑みを浮かべていた。
愚かな男だ。春蘭は守真の口元に耳を寄せた。すると、弱々しげな声で「ど、どうするんだ？」と声が聞こえた。黙っていろ、と春蘭は守真の膝を軽く

叩いた。
　そして、水神盤に手を翳すことなく慮官吏に向かう。
「次代の皇帝が立つということは、陛下が亡くなれることを意味します。陛下の御前で、そのような占は行えません」
　きっぱりと告げれば、発言を理解した慮官吏は即座に顔を真っ青にした。自分の言がどれほど無礼なことだったか、ようやく気付いたのだろう。時すでに遅しではあるが。
「い、いや、私は、そんな、そんなつもりではけっして……！」
　しどろもどろに弁解するが、助け船を出す者はいない。せめて、酒の席の冗談だった、とでも言い訳すればいいのだが、混乱のあまりそこまで頭が回らないようだ。だからこそ、あのように軽率な発言ができたのだろうが。
「不快だ。下がれ」
　腹の底に響くような、低い声が響いた。
　辺りが水を打ったように静まり返る。我に返ったのは、慮官吏である。体を震わせれば血走った眼差しを守真に向けた。
「陛下のご命令だ！　さっさと立ち去れ！」
　――どう考えてもお前だろう。
　おそらく、春蘭だけでなく慮官吏以外の者たち全員がそう思ったに違いない。
　動かない守真に痺れを切らしたのか、慮官吏が手を伸ばそうとした時だった。その肩を、警備の兵士が摑む。
「なっ、なにを――」
　そして、有無を言わさずに引き摺って行ってしまった。慮官吏は最後まで何事かを喚いていたが、やがてそれも聞こえなくなってしまう。
「つ、次に薛昭儀様」
　月儀の引き攣ったような声が響いた。それに、張り詰めていた空気が緩む。

四番目は、妃妾だ。春蘭は事前に、四人の相手の名と官位を知らされていた。

薛昭儀は、四夫人の下、九嬪に属する。現在、妊娠中とのことだった。臨月はまだ先だが、身籠もってから半年は経っているらしい。

中央に進み出てきたのは、二十代前半の美しい女だった。薛昭儀付きの侍女が代理として来る、と月儀から聞いていた。

侍女は春蘭の傍に座ると、緊張に顔を強張らせながら口を開いた。

「薛昭儀様は、陛下の御子を身籠もっておいでです。男児か女児か、占っていただけますか？」

これもまた、約束とは違う。月儀を振り返るのもかわいそうだ。

断ろうとも思ったが、こちらを見詰める侍女の顔はなぜか必死だった。なにかを切実に祈っているような、そんな目に押され、春蘭は守真の手を水神盤に翳す。

浮かびあがった卦に、春蘭はなるほど、と内心で頷いた。

「――御子は、女児です。間違いはございません」

おお、と歓声があがった。侍女は緊張の糸が切れたのか、茫然としたまま動かない。そこに、再びあの声が響いた。

「薛昭儀の腹にいるのは女児らしい。見逃してやれ」

誰もが啞然とした。

皇帝の言葉から察するに、薛昭儀は暗殺者の影に怯えていたのだろう。精神を安定させるために占を望んだのか、それとも女児であることに賭け、衆目の下で性別をはっきりとさせることで、子の安全を図りたかったか。

中には占を信用しない者もいるだろうが、女児ならば生まれるまで待ってやろうと思う者もいるかもしれない。

生まれたのが本当に女児であるならば、狙われる

こともなくなる。少しでも暗殺の脅威が薄れるように――藁にも縋る思いで、そう望んだとしても不思議はなかった。

春蘭は侍女の耳元で囁いた。

「手配している産婆はだめだ。他の妃妾の息がかかっている。薛昭儀か、信頼できる侍女の親族から産婆を探した方がいい」

皇帝の子を産んだこと自体を嫉まれてはどうしようもない。念のためにそう告げれば、我に返った侍女が真剣な眼差しで頷いた。

春蘭は何事もなかったように守真の隣に座った。侍女が戻って行く姿を眺めながら、ようやく終わりか、と細く息を吐いた。

時間的には短かったが、予想外のできごとに疲れてしまった。しかし、これで黄海楼の客寄せには充分な効果があったはずだ。

あとは月儀の合図で下がるだけ――そう思った時である。

「占師よ。我が世はいつまで続くか」

朗々たる声が響いた。

春蘭は動くことができなかった。

自分だけではない。誰もが微動だにしない。呼吸さえ止めているのではと思うほど、しんと静まり返った中、沸儀の声が響き渡った。

「どうした。占わぬか」

「……」

春蘭は生唾を呑み込んだ。守真はあまりのことに気絶しているかもしれない。

占は四人まで。それ以上はむりだと申し入れているが、相手は皇帝だ。断ることは難しい。もしくは、人の運命を見通すような占はできないと拒否するか。

しかし、これは黄海楼に迷惑がかかる可能性がある。なにせ相手は華国の支配者だ。その一言で、白も黒に変わってしまうだろう。

占は可能だ。

ただ、春蘭は占師として現れた卦がどのようなものであっても答えなければならない。たとえ、沸儀が明日死ぬとしても、だ。

皇帝の意に沿わぬ卦を告げて殺された占師は、春蘭が生きていた時代にもいた。

そして、殺されるとわかっていても、春蘭は卦を正直に告げるだろう。それが占師だからだ。

息を吸って、春蘭は守真の腕を水神盤に翳した。

そういえば、仲望はどこにいるのだろうか、とどうでもいいことが脳裏を過る。

水神盤の旋回が、やけに遅い気がした。溝を進む水がある位置でぴたりと浸食をやめ、それに合わせて水神盤も動きを止めた。

「――これは」

浮かびあがった卦は、既視感を呼び起こすものだった。

「なんとでた？」

沸儀の声に我に返った春蘭は、守真の口元に耳を寄せる。

触れていた手は小刻みに震えていた。この重圧の中、気絶しないだけ大したものだ、と春蘭は笑みを浮かべる。

体勢を整え、春蘭は沸儀へ顔を向けた。

「未来はまだ定まっておりません」

卦は、以前に翰栄（かんえい）を占った時に出たものと、ほぼ同じであった。ただ沸儀は実名で行ったため、あの時よりは幾許か鮮明な文様が浮き出ている。

「〝波瀾（はらん）〟〝破壊〟の卦が出ております。陛下が波瀾の末になにかを破壊するのか、それともされるのか。判断はつきかねます」

春蘭は水神盤を水から引き上げると、巾で丁寧に水気を拭って己の懐にしまった。あとは月儀の合図で下がれば、今度こそ終わりだ。

もっとも、皇帝の不興を買っていなければ、の話だが。

まっすぐに沸儀を見据えれば、微かに笑ったような気配がした。

「よかろう。娘を置いて下がれ」

唖然とするが、春蘭にはどうしようもない。足許が覚束ない守真を立たせ、盆を下げにきた紅燕に預ける。

心配げな視線を向けられたが、小声で「気にするな」と告げた。

「――傍へ」

春蘭は溜息を堪え、進み出た。



まるで悪い夢でも見ているようだ。

手を伸ばせば届く場所に、皇帝が座っている。警備の兵士が止めるのも聞かず、沸儀は春蘭を傍に招いた。

問題なのは、なぜ秋菊ではなく春蘭を呼んだのか、だ。いや、秋菊に扮する守真を呼ばれても困るが、意味がわからずに困惑する。

沸儀の傍に侍っていた宮妓たちは、すべて下げられてしまった。中庭では黄海楼の妓女たちに代わり、宮妓たちが花を添えている。

笛や琴の音に合わせ、四人の宮妓たちが花園に遊ぶ蝶のように軽やかに舞い踊る。中央の二人の手には、剣が握られていた。

やがてその二人だけが取り残され、楽に合わせて剣を振るう。黄海楼では目にしたことはないが、彼女たちが演じているのは剣舞だ。素早い身のこなしで剣を打ち合い、居場所を入れ替えては、また打ち合う。

そこに激しさはなく、どれほどの速さで剣を振ろうともけっして優美さが失われることはない。舞に魅入っていれば、頭上から低い声が響いた。

「――先ほどの占は、秋菊という占師ではなく、そなたが行っていたな？」

見上げた先には、どこまでも冷ややかな眼差しがあった。やはり気付かれていたか、と春蘭は自嘲する。

「なぜ？」

「気の流れの許にあったのは、そなたの手だ。四度も見ればわかる」

「気を視ることができるのか」
仲望が例外かと思っていたが、沸儀もまたそうなのだろうか。しかし、返ってきたのは否定の言葉だった。
「視るのではなく、感じただけだ。気には流れというものがある」
「ふむ。そのようなこともわかるのか」
春蘭も視ることはできるが、それは条件が限られている。人体を巡る気を視ることはできないが、気術兵が地脈から吸い上げた気ならば視認することができる。
神であった頃ならばどちらも造作なくできていたが、ただ人となった今は、失われた能力だ。
気術兵が地脈から得た気だけ視られるのは、春蘭の肉体が三百年もの間、神気に護られていたが故の産物だろう。
「身替わりを立てていたのは、私の外見が問題だったからだ。私がなにを言っても、信じる者は少ないだろう。それでは占師として働けない」
「そうだな」
なにが面白いのか、沸儀はくぐもった笑い声をあげた。近くに控える官吏や兵士たちが、唖然とした表情を浮かべている。
春蘭が耳にした皇帝像とは、残虐、非道、といった言葉が服を着ているようなものだった。しかし、けっして理不尽な相手ではない。
率直な物言いをする春蘭を咎めることもなければ、占の結果に不満を口にすることもない。
「それを訊きたかったのか？」
「いや」
沸儀の言葉に、春蘭は眉を寄せた。では、なぜ自分を傍に呼んだのか。
「余を睨む目があった。試しにそなたを傍に置けば、より強まった」
沸儀ではなく春蘭を睨む目、の間違いではないだろうか。

官吏たちから向けられるのは好奇の眼差しだが、近くの御簾からは殺意混じりの視線が突き刺さっている。

「面白い相手に好かれているな」

「……」

「そなたを余の檻に入れれば、座しているだけで敵が増えてしまいそうだ」

沸儀の視線を辿った先には、仲望の姿があった。険しい表情でこちらを睨みつけている。

「禁軍に所属していた男だ。確か、鄭玄楽の弟だったな。弓の名手で、四年前のことがなければいずれ将となっていた」

「敵を増やしてどうする？」

普通、敵は排除するものだ。わざわざ得るものではない。この男は自分の命が惜しくはないのだろうか。

「楽しみは増やすものだ。そうは思わぬか？」

「……敵を叩き潰すことが楽しみか」

返答はない。だが、沸儀はひどく楽しげに仲望を眺めている。

「太子と猩猩緋も、楽しみとやらの一つか？」

後者は単に取り締まりの手が及ばないと考えることもできる。だが、前者は違う。太子派と公子派の対立など無視して、沸儀が一言「廃嫡する」と命じれば済む話だ。

むろん反発はあるだろう。だが、それを抑えつけるだけの力が沸儀にはある。

「小物をいくら潰したところで無意味だ。敵は超大であればあるだけ楽しめる。小物を甚振って楽しむのは、しょせん小物のすることだ」

「それで、己が死んだとしても？」

もっとも沸儀が〝死〟を怖れているようには思えなかった。

己の命すら餌にして、群がる者たちを嬉々として屠る――そんな印象を受ける。

「生死を賭けるからこそ意味がある。安穏とした場

所で槍を振るって、なにが楽しい？」
「華安を戦場とするか」
「それも一興」
沸儀にとって、華国自体が楽しみを生むための道具なのかもしれない。
――狂っている。
その一言で評するのは簡単だ。問題は、それが皇帝であることだ。
「よいな。そなたとの会話は楽しい」
「私としては、あまり嬉しくはない」
「誰に話しても、人を化物のように見る。首を刎ねて終いだ」
確かに、通常の思考を持つ者に、沸儀の言葉は理解できないだろう。だが、春蘭が生まれたのは戦乱の時代だ。非道な人間には、事欠かなかった。
「……できるならば、太子と猩猩緋だけで満足してくれ」
「誰にものを言っている？」
沸儀が立ち上がった。その手には抜き身の剣が持たれている。
楽が止み、辺りにざわめきが拡がった。誰もが春蘭に哀れみの目を向ける。おそらく、妓楼の娘が沸儀の逆鱗に触れたとでも思っているのだろう。だが、春蘭は構わずに告げた。
「ぬしにだ」
「ふむ。やはり、そなたはよいな」
沸儀が剣を振るった。
しかし、両断したのは春蘭の体ではなく、飛来した一本の火矢である。
顔を向ければ、石畳の階段を腕に赤い布を巻き付けた一団が駆け上ってくるところだった。
猩猩緋だ、と誰からともなく声があがった瞬間、大広場は阿鼻叫喚の嵐に包まれた。
官吏や宮妓たちが悲鳴をあげながら逃げ惑う。警

備の兵士は、人波に押されてその半分も機能していないだろう。

それを利用し、猩猩緋の射兵が火矢を建物目掛けて放つ。瓦に阻まれたものもあったが、床に突き刺さり火の粉をまき散らすものもあった。このままでは、建物全体に火が回るのも時間の問題だ。

「楽しいだろう？」

沸儀の声に春蘭は眉を寄せた。皇帝は押し寄せる猩猩緋に、はっきりと笑みを浮かべている。兵士たちが逃げるように訴えるが、沸儀は退避するつもりはないようだ。

――ここにいれば巻き込まれる。

そう判断した春蘭は、建物の奥に向かって駆けだした。白桃はいざという時の逃走手段だ。

徐々に喧騒が遠ざかっていく。黄海楼の者たちは上手く逃げられただろうか。

黄海楼のすべての演目が終わっていたのは幸いだった。広場の方で荷物をまとめていただけならば、火に襲われる心配もないし、官吏でない者を猩猩緋は狙わないだろう。

薄暗い通路を進んでいると、同じように逃げる一団と遭遇した。彼らについて行けば外に出られるだろうか、と思った時、前方を行く女が春蘭を見て叫んだ。

「その娘を殺しなさい！」

血走った眼差しで春蘭を睨む女に見覚えはなかった。

年齢は二十代半ば頃だろうか。気が強そうではあるがはっきりとした顔立ちで、豪奢な襦裙を着付けている。

「しかし、王恵妃様……！」

「今ならば、猩猩緋の仕業にできるわ。これ以上、陛下の寵を受ける者は邪魔なのよ。私が后妃になるためにも、さっさと始末しなさい」

「ですが、護衛の宦官とは逸れて――」

「押さえつけて、首を絞めなさい。あなたたちでも、

それくらいはできるでしょう」

王恵妃と呼ばれた女の周囲を固めるのは、四人の若い侍女たちだ。絞殺しろという命令に、誰もが顔を真っ青にする。

「殺さなければ、あなたたちを処罰するわ。好きな方を選びなさい」

「そんな怖ろしいこと……！」「私たちが殺すだなんて！」「どうか、お許しを……」と、侍女たちは涙ながらに訴える。

しかし、殺さなければ自分が処罰されるという境遇に、一人、また一人と春蘭に視線を向ける。哀れみが込められてはいるが、最終的には自分が可愛いと決断したらしい。

困ったことになった、と春蘭は唇を噛んだ。来た道を戻っても、そこはすでに火の海だろう。あそこから脱出することなどできない。だが、前に進むことも難しい。

追い詰められた侍女たちが、徐々に春蘭へと近付いてくる。その背後では、王恵妃が意地の悪い笑みを浮かべていた。

白桃を呼ぶか、と口を開きかけた時、背後から伸びた腕に引き寄せられる。そのまま慣れた手付きで抱えあげられ、春蘭は思わず相手を確認せずに叫んでいた。

「仲望！」

「遅れてすまなかった」

安堵を誘う声に、春蘭は仲望の首に抱きついた。

「――それで、なぜこの娘を殺そうとしたかお訊きしても？」

仲望の冷ややかな声に、侍女たちは後ずさった。なによりも仲望の片手に握られた抜き身の剣に恐れをなしたのだろう。しかし、それに王恵妃が猛然と反論する。

「無礼者。私は夫人ですよ！」

「……理由はわかりました。早く逃げなければ火に巻き込まれますよ」

それだけを告げ、仲望は春蘭を抱えたまま走り出した。

背後で王恵妃と侍女が何事か叫んでいるが、すぐに聞こえなくなってしまう。

「仲望、逃げ道はわかるのか？」

「ここは昔、幾度か警備した覚えがある。春蘭、念のために口元を押さえていろ。じきに煙が充満する」

そういえば、確かに焦げ臭い。襦裙の袖で口元を覆い、落ちないようにしがみついた。

「……春蘭。陛下となにを話した？」

この状況で喋れというのもむりな話だが、仲望の声は切実である。春蘭は耳元に顔を寄せ、舌を噛まないようにしながら口を開いた。

「ぬしが皇帝を睨むから、目をつけられてしまったのだ」

「……は？」

「まったく。私のことなど気にせず、他人の振りをしていればよいものを」

仲望のことがなければ、春蘭は占師として興味を抱かれただけで終わった……いや、終わらなかったかもしれないが、少なくとも仲望を巻き込むことにはならなかったはずだ。

沸儀は間違いなく、春蘭を後宮に入れるだろう。一度決めたことを、覆すような相手ではない。春蘭とすれば断りたいが、黄海楼と仲望に迷惑をかけることだけは避けたかった。それに、一つだけ後宮に入る利点がある。

後宮は檻である。だが、同時にその檻は玄楽から春蘭を守ってくれるだろう。仲望や黄海楼の者たちに迷惑をかけることもなくなる。

「春蘭？」

仲望が名を呼ぶと同時に射し込んできた眩しい光に、春蘭は目を細めた。どうやら外に出たらしい。これで焼死は免れた、と安堵の息を吐く。

薄暗い通路から出た先は、建物の裏側のようだ。

少し離れた場所にはまた別の宮がある。といっても、距離があるため風がない限り火が燃え移る恐れはないだろう。

「火は大丈夫だろうか？」

「ここは独立した宮殿だ。宮を繋ぐ渡殿もない。そもそも、宮中は火事対策は万全だから心配するな」

周囲を忙しなく見回した仲望は、春蘭を抱え直すとまた走り出した。官服はあまり動き易いものではないようだが、春蘭自身が走るよりはよほど速い。遠くからは怒声が響き、晴れ渡った空にどす黒い煙が立ち昇っている。

「春蘭、ここで少し待っていてくれるか？　様子を見てくる」

「わかった」

春蘭が下ろされたのは、左右に高い塀が聳え立つ路の隅である。

傍には建物へと続く門があり、警備兵の姿は見られない。内側に入れば、ちょうど春蘭の体を隠してくれる低木があった。

「すぐに戻る」

「気をつけるのだぞ」

「春蘭も。なにかあれば、俺に構わず逃げてくれ」

仲望の気配が去ったあと、春蘭は低木の陰でできるだけ身を縮めた。

宴を襲撃したのは、猩猩緋だった。理由まではわからないが、なんとも大胆な行動である。宮中を護っているのは禁軍の兵士だ。官吏の屋敷で雇われている警備兵とはわけが違う。猩猩緋側も相応の被害を覚悟してきているのだろう。つまり、かなりの激戦となる可能性が高かった。

「上手い具合に逃げ出せればいいが……」

低木の陰に身を潜めていると、通路を走り去る複数の足音が響いた。禁軍の兵士のものか、猩猩緋のものか。それとも、春蘭と同じように逃げ場を求める官吏たちのものか。

一団が通り過ぎたあとは、しばらく誰の気配も感

じられなかった。少し通りに出て様子を窺ってみようか、と春蘭が思い始めた時、人の気配となにかを引き摺るような音が聞こえた。

気にはなったが、迂闊に動くことはできない。いつもの動き易い服装ならば走って逃げることも可能だが、隙なく着飾ったこの格好ではすぐに捕まってしまう。

しかし、その音は春蘭のすぐ近くで途切れた。重い音と共に、微かな呻き声が聞こえた。怪我でも負っているのだろうか。

朝廷側の人間か、それとも猩猩緋の者か。それだけでも確認しようと、低木の陰から顔を覗かせれば、門に寄り掛かる男を見つけた。

こちらからでは背中しか見えないが、仲望と形は似た、でも布地は上等な官服と、頭上に頂く冠の豪奢な形から、官吏の——それもかなりの高官だとわかった。猩猩緋に見つかれば、まず間違いなく危険だろう。

迷ったのは一瞬だった。

辺りに人の気配がないことを確認すると、春蘭は素早く男に駆け寄る。

「大丈夫か？　ここにいると危ない。せめて茂みの陰に——」

隠れよう、という前に、男が春蘭の手を握り締めた。俯いているため、顔を見ることはできない。肩を上下させる姿に、よほど苦しいのだろうと、春蘭は背に片手を添えた。

しかし、それは懐かしい声によって覆される。

「——あ、やっぱり、春蘭だ」

春蘭は己の目を疑った。

なぜ。そう呟いた己の声は、掠れていた。視界に映ったのは、特にこれといって特徴のない平凡な顔だった。しかし、その顔には嫌というほど見覚えがある。

「翰栄（かんえい）？」

「うん」

ははは、と力なく笑う翰栄だったが、顔色も悪く、虚ろな眼差しをしている。

なぜ、彼がここに。いや、それよりも早くこの場を移動しなくては。混乱する頭を切り替え、春蘭は口を開いた。

「怪我をしているのか？」

「違うよ」

「だが、辛そうだ」

それに、翰栄は力なく笑みを返すだけだった。

怪我ではないというならば、体調が悪いのだろうか。引っ掛かるものはあるが、春蘭は翰栄の腕を自分の肩に回すと、引き上げるように力を込めた。

「もう少し、頑張ってくれ」

「う、ううっ」

「こっちだ」

翰栄は胸元を押さえながら、それでも春蘭の言葉に従うように足を動かした。今まで身を潜めていた低木は、翰栄を隠しきれない。さらに奥に進む必要がある。

建物と塀の間を進み、春蘭は庭から死角となる場所で足を止めた。そして、苦しげに呻く翰栄を壁に寄り掛からせる。

「……郷里に帰ったのではなかったのか？」

「へ？」

「茶房を訪ねた際、隣の店主が教えてくれたのだ。もっとも、茶房の一室に間借りしている男の存在は知らなかったようだがな」

あー、と翰栄は額に脂汗を滲ませながらも、ばつが悪そうに苦笑してみせた。

「事情があって、ね」

「そのようだな。まあ、私には関係のないことだが」

「え、訊かないの？」

「ふむ。興味がないと言い換えるべきだったか？」

「……」

わざとらしく肩を落とした翰栄に、春蘭は溜息をついた。

気にならないと言えば、嘘になる。しかし、思わせ振りな態度を取ってはいるが、赤の他人である春蘭に、翰栄が己の抱える〝事情〟を口にするとも思えなかった。

「しかし、ぬしが官吏だとは思わなかったぞ」

「……ああ、これ、ね」

翰栄は頭上の冠に触れた。なにやら複雑な顔をしているが、〝官吏〟と呼ばれることを否定はしなかった。

翰栄が高官ならば黄海楼での振舞いにも納得できる。ただ、己の身分を隠していたことは解せないが。

「あまり似合ってはおらぬがな」

「手厳しいね」

「ぬしはこれから――」

どうする、と訊ねようとした時、塀の向こうから複数の足音が響いた。

「いたか？」「こっちはだめだ。それに猩猩緋の奴らも入り込んでる」「くそっ、絶好の機会だというのに。どこに行ったんだ！」という言葉の端々から、誰かを捜していることが窺える。

男たちの一人が〝猩猩緋〟と発言していることから、彼らは官吏か禁軍の兵であると察せられた。問うように翰栄を見ると、無言で首を左右に振られた。春蘭を見る瞳には厳しさがある。

――敵か。

少なくとも見つかってはまずい間柄のようだ。息を潜めていると、男たちは苛立つように言葉を交わし走り去っていった。

「……ぬしを捜しているのか？」

「たぶん、ね」

「あまりよい雰囲気ではなかったが」

「見つかったら、間違いなく殺されるだろうね」

「恨みでも買ったか」

力なく笑う翰栄に、春蘭は訝しげに眉を寄せた。あの男たちは、猩猩緋の襲撃に便乗して翰栄を殺す気らしい。翰栄はその理由を、春蘭に話すつもりは

ないようだ。
痛みを堪えるように浅い呼吸を繰り返すだけで、それ以上、口を開くことはなかった。
溜息をつきながら、春蘭は未だ戻らない仲望のことを思った。どうやら、すんなりと安全な場所へ逃げられはしないようだ。

仲望は走っていた。
上手く動かない左足は煩わしいが、それでも鍛錬のおかげか、以前とは比べものにならないほど体はよく動く。
腰には混乱の中、楊秀から受け取った剣を佩いていた。万が一に備えて、といってはいたが、まさか実際に使うことになろうとは誰が思っただろうか。
仲望がいるのは、華宴宮の裏手に当たる通路だ。左右を高い塀で囲まれているため、闇雲に走り回れば自分の居場所などあっという間に見失ってしまうだろう。
賊の侵入を阻むための作りだが、慣れていなければ追う側も不利に陥ってしまう。仲望自身、大ざっぱな経路は記憶しているが、どの道を行けば宮中から出られるかまではわからない。
せめて、仕事場である太冥宮の付近に出られればいいのだが。
「華宴宮は……紫宝宮の東か？」
太冥宮は紫宝宮の西側に位置している。ということは、太冥宮に向かうよりも紫宝宮から逃れた方がいい。仲望と同じ考えに至った官吏たちで溢れていなければ、だが。
しばらく通路を進めば、複数の足音が響いた。仲望はとっさに開いていた門の内側へと飛び込む。通りからは死角となる場所に身を潜めれば、抜き身の剣を手にした官吏たちが現れた。
しきりに周囲を見回し、華宴宮がある方角へと走って行く。猩猩緋から逃れるのであれば、逆に進む

べきだ。なにより解せないのは、彼らが剣を手にしていたことだった。

宮中で帯剣を許されるのは、禁軍の兵士だけである。官吏たちは許可なく剣を持ち込むことはできない。

「……いや、今は逃げ道を探す方が先決だ」

いつまでも春蘭を一人にしておくことはできない。白桃がいるとはいえ、不意を突かれたら対処は難しいだろう。

通りの気配が消えたことを確認した仲望は、再び走り出した。

この先は、左右二手に分かれている。どちらが紫宝宮へと続く道か真剣に考えていると、左から剣を振りかぶりながら飛び出す影があった。

仲望はそれを素早く薙ぎ払う。敵か、と顔を向ければ、そこには驚きに目を見開いた興奏の姿があった。

「花中書令！」

「なんだ、仲望か。刺客かと思ったぞ」

興奏が手にしていたのは槍だった。肩で息をつきながら、興奏は額に滲んだ汗を拭った。

「これから華宴宮に戻られるおつもりですか？」

「あそこには博焚様が残っておられるのだ。得物も調達した」

勇ましげに宣言されたが、武官でもない興奏を一人で華宴宮に向かわせることはできない。禁軍の兵士でもいれば、と思った時、興奏の前にやってきた者たちを思い出した。

「花中書令の他にも、太子を救いに戻った者はいるのですか？」

「いや。手配はしているが、まだ集まってはいないだろう」

「ですが、先ほど剣を手にした集団が……」

興奏の顔が一瞬で青褪めた。唇を震わせ、仲望の肩を強い力で摑む。

「公子派の手の者だ！」

「……どういうことです？」
「この混乱に乗じて、博焚様を殺害するつもりだ。今ならば猩猩緋に罪を擦りつけられる」
興奏は慌てたように走り出した。仲望もそれを追い掛ける。
興奏を見捨てては行けないという気持ちもあったが、残してきた春蘭が心配だった。公子派の狙いは太子だが、騒ぎに巻き込まれる可能性もある。
「太子はどこに？」
「わからぬ。共に逃げる途中で、逸れてしまったのだ。華宴宮の裏手にいることは間違いないのだが……」
「太子もご自身で逃げられたのでは？」
よほどのことがない限り、警護の兵士がいるはずだ。すでに華宴宮から脱出していると考えてもおかしくはない。
それに、太子は、剣を握らせれば禁軍の兵士とも互角に渡り合う腕前だと聞いている。たとえ護衛と逸れてしまっても、相手が官吏ならば振り切って逃げることくらい可能だろう。
だが、興奏の顔色は優れなかった。華宴宮へ向かう足取りも、緩まる様子はない。
「……博焚様が病を得て、辺境の地から戻られたという話は知っているな？」
「はい」
「あれは、まことだ」
仲望は思わず息を呑んだ。噂では、太子が華安へ戻ったのは暗殺を恐れたのだと言われていた。病は口実である、と。
しかし、興奏はそれが真実なのだと語る。
「宴に出られるような状態ではないのだ。だが、ここで姿を見せなければ、病を理由に退位に追い込まれる恐れがある。だから、博焚様はむりにでも顔を見せる必要があったのだ」
「つまり、太子は自力で逃げられる状態ではないと？」

「そうだ。……見つかったらお終いだ」

興奏の声は逼迫していた。暗殺は警戒していたが、猩猩緋の襲撃までは予測していなかったのだろう。興奏は不測の事態に、暴走しかかっているようだ。

太子派に与したいわけではないが、ここで興奏を見捨てられるほど仲望も薄情な人間ではなかった。溜息をついて、仲望は興奏のあとに続くのだった。



「遅い……」

春蘭は腹立ち紛れに呟いた。

すぐ戻ると言っていたにもかかわらず、仲望が戻ってくる気配はない。様子を見に行きたかったが、今にも倒れてしまいそうな翰栄を放って行くことは憚られた。

また、先ほどから数人の集団が、この辺りでなにかを捜すように執念深く歩き回っていた。猩猩緋ではない。

門の死角となる場所から通りを窺えば、それは抜き身の剣や槍を手にした官吏たちだった。

全員が翰栄を狙っているのかは不明だが、おいそれと助けを求められない。禁軍の兵士ならおそらく大丈夫だ、と翰栄は言うが、猩猩緋に手間取っているのか、見覚えのある鎧甲を身につけた兵士の姿を見ることはなかった。

仲望が戻って来るのが早いか、それとも見つかるのが早いか。もっとも、仲望が戻ってきても無事に逃れられる保証はないが。

「移動した方がよさそうだな」

仲望を待たなければならないが、このままではいずれ官吏たちに見つかってしまう。せめて身を隠せるような場所があれば――。

「翰栄。歩けるか？」

「置いてっていいよ。彼らの狙いは、私だ」

「馬鹿を言うな」

顔見知りの人間を捨てていけるはずがない。いざとなれば、白桃を呼び出して官吏たちを追い払えばいい。ただ、それは万が一のための手段だ。できる

だけ人目に晒したくはない。

「人が集まりつつある。逃げ道がなくなる前に、移動するぞ」

官吏たちは、翰栄がこの付近に潜んでいると察知しているようだ。周囲を虱潰しに捜される前に、場所を移らなければならない。

翰栄に肩を貸し、春蘭は引き摺るようにして歩き出した。

「私が男だったらな。ぬしを担いで逃げられるのだが」

「……それは困るな。お嫁さんにできないじゃないか」

「こんな時でもぬしはしつこいな」

「春蘭が、なかなかなびいてくれないからね」

「打算から口説かれてもな」

翰栄が欲しいのは、春蘭の占の腕だ。嫁に、というのは春蘭を裏切れない立場に追い込むための方便で、そこに恋愛感情はない。少なくとも、春蘭はそう思っている。

「ここで待っていろ」

壁に翰栄を寄り掛からせると、春蘭は門から通りの様子を窺った。こちらにはまだ官吏たちの姿はない。

「今のうちだ」

「う、ううっ」

翰栄を起こそうとすると、苦しげな呻き声が漏れた。顔色も蒼白に近く、春蘭に寄り掛かって立つので精一杯の様子だ。

逃げ切る前に、翰栄が意識を失ってしまうのではないか。そんな不安が胸裏を過る。翰栄が倒れてしまえば、春蘭一人の力ではどうしようもない。

「……堪えてくれ」

励ますように声をかけ、春蘭は翰栄を支えながら門を出た。

近くで足音が響くが、官吏たちの姿はまだ見えない。翰栄の体調を気遣いながら、春蘭は仲望が走り

去った方角へ向かった。

ゆっくりと身を隠していた場所から遠ざかる。そのまま見当違いの場所を捜していてくれ、と春蘭は祈った。

しかし、その願いは届かない。背後から荒々しい足音が響き、「見つけたぞ！」という声が間髪を入れずにあがった。

振り向けば、官服を着た男たちが六人。剣を片手に、好戦的な眼差しを春蘭たちに向けている。どう好意的に見ても、翰栄を助けに来たとは思えない。

「春蘭！　私のことはいいから、早く逃げ――」

「どうせ、私も口封じで殺される。逃げても無駄だ」

白桃は、後宮に入れられた際の逃走手段として残しておきたかったが、出し惜しみできる状況ではない。

「私の後ろに下がっていろ」

春蘭は翰栄を守るように背に庇った。官吏たちは我先にと、手柄を争うかのように走り寄ってくる。

「お捜ししましたよ、博焚様！」

官吏の一人が、意地の悪い笑みを浮かべながら叫んだ。

博焚。どこかで聞いた名だ。男たちの視線が春蘭へと注がれるが、それよりも翰栄の方が大事なのだろう。すぐに剣の切っ先を翰栄に向ける。

翰栄は苦しげに胸を上下させながら、春蘭を懐に抱え込んだ。

「……この娘は陛下のお気に入りだ。傷を付ければどうなるかわかるな？」

「問題ないでしょう。今ならば、すべて猩猩緋に罪を擦りつけられます。娘とあなたの仇は、陛下がとってくださいますよ」

「下郎が」

「あなたが悪いのですよ、博焚様。潔く、己の地位を返上していれば命だけは助かった――」

官吏が言い終えるより早く、一振りの槍が空を切り裂くように飛来した。それは官吏たちの足許に突

き刺さる。

「太子、ご無事ですか！」

振り返ると、そこには顔を真っ赤にした興奏が息を切らしていた。その後ろには仲望の姿もある。その無事な姿に安堵したが、同時に春蘭は自分の耳を疑った。

「……太子？」

翰栄を見上げれば、困ったような、申しわけなさそうな表情が返ってくる。

「春蘭、太子を連れて逃げてくれ！」

仲望の声が響く。見れば、通路の向こうから新手の者たちが走ってきた。春蘭たちの傍を駆け抜けた仲望は剣を抜いた。

興奏も槍を引き抜き、文官とは思えぬ気迫で官吏たちに相対する。

「逃げるぞ」

翰栄に肩を貸しながら、春蘭は覚束ない足取りで歩き出す。背後からは剣戟の音が響くが、振り返っている暇はない。

「……気になってたんだけど。宴の最中に、くそ親父になにを言われた？」

「そうか。皇帝はぬしの父親になるのだな」

顔付きや体格からして、似ているところを探す方が難しい。

あちらは見るからに武人といった外見で、翰栄はどちらかといえば文人にしか見えない。真実を知った今でも、親子関係にあるとは思えなかった。

「敵を作る理由を聞いた」

「……馬鹿げてるだろ？」

「まったくだ。あとは、意味が不明だが、私を後宮に入れるそうだ」

初対面で嫁になってほしいと言った翰栄と、そこだけはそっくりだ。人の意見を聞かないところなど、瓜二つだった。

しかし、春蘭の言葉に翰栄は苦虫を噛み潰したような顔をした。

「あー……ちょっとだけ睨んだから、かな。目が合ったから、たぶん春蘭と知り合いだって気付かれた。無駄に勘がいいから」

「ぬしも睨んでたのか」

「だって、春蘭は私のお嫁さんにしたい子の、筆頭だし。そりゃ、睨むよ」

沸儀(ふつぎ)の〝面白い相手に好かれているな〟という言葉は、仲望だけでなく翰栄のことも含まれていたらしい。お前のせいでもあるのか、と春蘭は翰栄を睨んだ。

「しかし、病とは初耳だ。妓楼ではなにも言わなかったではないか」

「……病、だったら、まだ治しようもあるんだけど、ね」

翰栄は苦しげに喘(あえ)ぐ。額に玉のような汗が滲み、歩くのもやっとな有様だ。だんだんと悪化しているように見える。追っ手は仲望たちが食い止めているが、早く警備の兵士を見つけなければまずい。

そう思った時だった。

「――春蘭！」

背後から仲望の声が響く。

振り返れば、輿奏が膝をつき、その脇を抜けるようにして一人の官吏が走りよってくるところだった。手には剣が握られている。

出し惜しみしている余裕はない。

白桃を呼ぶべく口を開きかけた時、男と春蘭の間に影が音もなく着地した。

「え？」

それは一瞬のことだった。剣を持った男の胸に、匕首が吸い込まれる。真っ赤な血が散って、男が崩れるように倒れた。

春蘭が瞬きした瞬間、影はまた音もなく姿を消す。しかし、わずかな間ではあったが、春蘭の目に焼きついた。

「……げん、らく？」

不意に、背にあった重みが消えた。振り返れば、

そこにはぐったりとする翰栄を抱えた玄楽がいた。全身を黒装束で覆い、顔も眼以外の部分を黒い布で隠している。だが、赤みを帯びた瞳は見間違えようがない。

そして、もう一人。玄楽から翰栄を受け取った人物――黒装束は同じだが、顔には怖ろしげな鬼面がつけられている。見覚えがあるそれに、春蘭は目を瞠った。

攫猿を退治する際に、洪釆と共に黄海楼に姿を現した人物に間違いない。鬼面の人物は翰栄を抱えたまま塀を飛び越え、姿を消してしまった。玄楽も春蘭を一瞥するが、手出しはせずに反対の方向へと走り去る。

「春蘭、無事か！」

刺客を倒した仲望が春蘭へと駆け寄ってくる。春蘭は「平気だ」と答えながら、顔を上げた。視界の先には、地面で呻く官吏たちの姿があった。手足には匕首が突き刺さっている。おそらく、鬼面の人物の仕業だろう。

「仲望。翰栄……いや、太子が連れ去られた」

「ああ。俺も見ていた。だが、あれは……」

仲望も玄楽に気付いたのだろう。なぜ、玄楽が翰栄を助け、そして連れ去る手助けをしたのか。それに、鬼面の人物は猩猩緋の一員である。

猩猩緋の敵は朝廷だ。太子もまた、敵の一人のはずだ。

――どうして、敵を助ける？

玄楽の行動も不可解だ。

なぜ、獲物である春蘭をみすみす見逃すという愚行を犯したのか。今はまさに絶好の機会だったはずだ。

翰栄が連れ去られるところを目撃した興奏は、ようやく駆けつけてきた兵士たちに、半狂乱で指示を飛ばしている。

「とりあえず、ここから離れるぞ」

「あちらはいいのか？」

「義理は果たした」
太子の捜索までは、仲望の領分ではないということか。興奏を横目で窺っていると、仲望は「それに」と付け足した。
「ここで捕まって、面倒事に巻き込まれたくないんだ。できれば、気付かれないうちに退散しておきたい」
溜息をつく仲望に、春蘭は首を傾げつつも頷いたのだった。

大広場は混乱の渦にあった。
楊秀は指示を飛ばしながら、襲い掛かってくる猩猩緋を斬り伏せた。華宴宮の正面はすでに炎に包まれている。炎が全体に回るのも時間の問題だろう。辺りには煙が充満し、未だに逃げ惑う官吏たちで騒然としていた。
宮内に逃げようにも、火が放たれているため不可能だ。両脇は塀で固められている。中庭から出るには、石畳の階段を降りる必要があるのだが、そこには槍や剣を構えた猩猩緋の姿があった。
――つまり、逃げ場がない。
誰かが、先陣を切って猩猩緋に斬り込み活路を開く必要があった。
行くか。楊秀がそう決意した時である。
石畳から耳をつんざくような断末魔と共に、血飛沫があがった。
目を凝らせば、両手に剣を構えた皇帝沸儀が哄笑しながら猩猩緋を屠っているのが見えた。思わず頭を抱えたくなったが、彼はそういう人物だ。
戦場では常に前線に立ち、全身を真っ赤に染めながら、なおも血を欲するように敵陣を縦横無尽に蹂躙した。根っからの武人なのだ。
「陛下のあとに続け！」
声を張り上げれば、それに気付いた部下たちが顔色を変えて沸儀のあとを追った。護れ、とは命じな

い。

　そんなものを必要とする人ではないのだ。むしろ味方でも邪魔をすれば、斬り捨てられてしまう恐れがある。

「楊秀様！」

「万里か」

　返り血で顔を染めた万里は、苦々しげな表情を浮かべている。

「確かなことはわかりませんが、巡回中の兵もかなりやられている模様です」

「そうか。猩猩緋の連中は、陛下が掃討してくれるだろう。念のため、部下にあとを追わせた。お前は残りの者を集めて、ここにいる奴らを捕らえろ。生死は問わん」

「わかりました。楊秀様は？」

「……逃げ遅れた者がいないかどうか確認する」

　言い終えると同時に、楊秀は燃えさかる炎に飛び込んだ。

　眼の前が煙で灰色に染まっていた。人の気配を探るが、妃妾たちはすでに逃げたあとらしい。楊秀の脳裏を過るのは、黎貴妃の姿だ。

　おそらく護衛の宦官を連れているはずだ。猩猩緋の雑兵は華宴宮に火を放っただけで、侵入する者はいなかった。無事に逃げてくれればいいが……。

「誰か！　誰かいるか！」

　声を張り上げ、奥へと進む。炎は華宴宮の前面を焼いているだけで、内部までには火の手も及んではいない。しかし、煙は出口を求めて内部に充満していた。

「誰か！」

「――！　――様！」

　不意に、誰かを呼ぶ声が響いた。口元を押さえながら声の聞こえた方に向かえば、こちらに向かって歩いてくる侍女の姿が見えた。

「大丈夫か！」

　顔色は悪いが怪我を負っている様子はない。しか

し侍女は楊秀を見るなり、焦ったように取り縋ってくる。

「こちらに。早く、黎貴妃様がお怪我を――」

楊秀は自分の耳を疑った。

怪我、という言葉に体が震える。案内されたのは、厨房近くであった。天井も高く、煙もまだそれほど流れて来てはいない。その奥に、侍女たちに護られるようにして、黎貴妃の姿があった。

楊秀の姿を見るなり、驚いたように切れ長の瞳が見開かれた。鮮やかな藍色の襦裙を身に纏った姿に、楊秀は一瞬であるが心を奪われる。

美しく結い上げられた髪には小粒の真珠がちりばめられ、暗がりの中でもわずかな光を受けながら輝いていた。

「韓、将軍？」

覚えていてくださったか、と楊秀は胸に熱いものが込み上げた。

「有事につき、ご尊顔を拝することをお許しください。お怪我を負ったと聞きました」

「黎貴妃様は、足を挫いておいでです」

護衛の宦官とは逸れたのか、辺りには侍女たちの姿しかない。彼女たちだけでは、どうしようもなかったのだろう。

「煙が来る前に、ここから出ましょう」

迷っている暇はない。楊秀は「申しわけありません」と断り、黎貴妃を抱き上げた。予想以上に柔らかな肢体に、楊秀は唇を噛み締めた。

けっして手が届くことのなかった相手が、自分の腕の中にいる。

だが、これは夢なのだ。

気付いた時には、すぐに覚めてしまう。

この腕の中の佳人のように、儚くも脆い夢なのだ――。

「先導する。遅れるな」

侍女に声をかければ、真剣な眼差しが返ってきた。

脳裏に華宴宮の見取り図を思い浮かべる。より安全

な経路を思い浮かべながら、黎貴妃を抱き上げる腕に力を込めた。

洪釆は槍を振るいながら、舌打ちした。

自分はここで死ぬかもしれない——そんな予感をひしひしと感じる。

襲撃は予想していた以上に上手くいっていた。見張りの兵士たちを倒し、ぎりぎりまで誰に気付かれることなく華宴宮の近くまで侵入できた。

火矢を射かけ、そのうちの数本の火が華宴宮に燃え移る。退路を断たれた官吏たちは、当然のように逃げ惑い、禁軍の兵士たちもそれに巻き込まれた。

今回の目的は、宴を失敗に終わらせることだ。特定の官吏を狙う予定はない。本殿に火が燃え移ったことを確認し、場の混乱が収まる前に撤退する——予定だった。

だが、それはたった一人の人物によって狂わされることになる。

眼前で双剣を振るうのは、華国の頂点に立つ皇帝その人だ。豪奢な官服を血で染め上げ、行く手を阻む仲間たちを蹴散らしていく。

その姿は、とても〝皇帝〟とは思えない。妖の方が、まだましだ。

「首級だ！　皇帝の首級をあげろ！」

「集まれ！」

「我らの敵だ！」

「殺せ！」

まさか大物が出て来るとは思ってもみなかっただろう。射兵も弓を投げ捨て、剣を握り締める。洪釆は己の声が届かないと知りながらも「逃げろ！」と叫んだ。

——どれほどの運が回ってきても、あの男に勝てる気がしない。

気術兵である洪釆は、たとえ相手が禁軍の将軍でも互角に渡り合う自信があった。同じ能力を持つ者

であっても、けっして引けは取らない。

だが、今まさに、その矜持を粉々に砕かれようとしている。

「くそったれ。なんであんなのが皇帝やってんだよ！」

帝位にある男が、元禁軍の将軍であったとは知っていたが、それは昔の話である。いくら気術兵であったとしても、肉体の衰えを防ぐことはできない——そう考えていた。

しかし、目の前の光景を見れば、自分の考えが甘かったとわかる。

雄叫びをあげて殺到する仲間たちを、たった一振りで肉塊に変えていく。その姿は圧巻だった。皇帝を護衛するはずの兵士たちですら、巻き添えにならないよう背後に控えたままだ。

猩猩緋の最大の敵である皇帝が、まさかここまで強いとは。詐欺だ。思わず叫びそうになった。

「……おい、お前ら。俺が時間を稼ぐ。逃げられる奴だけ逃げろ」

洪采は石段の下にいた。

禁軍の将軍が出てきたら、一騎打ちをするつもりで待ち構えていたのである。その間に、仲間たちが逃げる手筈となっていた。

しかし、姿を現したのは〝皇帝〟で。

予想を遥かに上回る実力に、時間を稼ぐどころではないかもしれないと、洪采は自嘲するように笑んだ。

「おらっ！　逃げろ！　撤退だ！」

さすがに皇帝の猛攻に尻込みしたのか、ようやく届いた洪采の怒声に、仲間たちは我先にと逃げ始めた。

一方、敵が向かって来なくなったことに気付いたのだろう。全身を血に染めた沸儀が、石階段の上から辺りを睥睨する。その視線が、洪采の頭上で止まった。

——できれば不意打ちを狙いたかったな。

それ以外に、勝てる方法が見つからない。血で滑って階段から転げ落ち、頭を打って死んでくれ、と本気で祈る。

しかし、祈りは通じない。

全身に脈打つ殺気に、洪采は力を込めた。

体内に埋め込まれた玉を媒介に、地脈から気を取り込む。それに気付いたのか、沸儀が愉快げに目を細めた。

「ほう……気術兵か。なら、少しは楽しめるか？」

「！」

距離があったにもかかわらず、一瞬で間を詰められる。

強烈な一打をなんとかかわすが、相手は双剣使いである。間髪を入れずに左腕から剣が襲いくる。槍で受け止めたが、あまりの衝撃に両腕が痺れた。

「くそっ！」

気術を使っているにもかかわらず、防戦で精一杯の状況に洪采は唇を噛んだ。時間を稼ぐとは言ったが、限界が近い。

ここで自分が倒れれば、真っ先に逃げた者たちは助かるかもしれないが、それ以外は追いつかれてしまうだろう。

すでに、今回の襲撃に参加した仲間たちの半数が、沸儀によって命を奪われている。槍幽が危惧した通り、これはかなりの痛手だ。

紅主や兎天は、この事態を予測できなかったのだろうか。

「ぐうっ！」

沸儀の右剣が洪采の左肩を掠めた。ざっくりと肉を斬られ、血が短服を赤く染める。気術を使用していなかったならば、左腕を肩から切断されていたはずだ。

「反撃せんのか？」

できるものならしている、と洪采は心中で毒づいた。激痛に歯を食い縛り、相手を睨みつけた。もうそれしか抵抗の術がない。

「そろそろ終いにするか」
——少しは楽しめた。
沸儀の声が聞こえ、目にも止まらぬ速さで右剣が振りかぶられる。
反応することができない。
それが振り下ろされると同時に、自分の命も終わる。
怖ろしくはない。ただ梁華の待つ場所へ行くというだけだ。刃が槍の柄を切断し、体に食い込む——その寸前だった。
あれほど受け止めるだけで精一杯だった剣が、弾き飛ばされる。
「ぼさっとすんな！　死にてぇのか！」
「くっ……！」
腹部に衝撃があったと思えば、洪采は肩に担がれていた。顔を隠してはいるが、声で朱緋だとわかる。いや、こんなことができるのは彼か兎天しかいないだろう。
「ほう……新手か」
沸儀の顔が愉悦に歪む。
思わず、背筋が粟立った。戦うことに狂っているとしか言いようがない。
洪采も槍を振るうことは嫌いではなかった。強敵との手合わせは、血肉が沸き躍るような昂揚感がある。
しかし、沸儀と剣を交えた時に感じたのは〝喜び〟ではない。気を抜いたら呑み込まれてしまいそうなほどの〝狂気〟だ。
「……逃げるぞ。捕まってろ」
気付いた時には、朱緋は気術を使い逃走に入っていた。沸儀の剣が残像を切り裂き、石畳の地面を破壊する。
どんだけだよ、と洪采は頬を引き攣らせた。追撃を覚悟するものの、なぜか沸儀は動く気配は見せない。目は洪采たちを捕らえているが、愉快げに細められただけだった。

その姿はあっという間に小さくなり、やがて視界から消えた。それでも朱緋の足は止まらない。宮中の外壁を飛び越え、逃走用に準備してあった俥すら無視して、屋根の上を飛び跳ねるように移動した。

動きを止めたのは、だいぶ経ってからだ。大路から死角となる部分で動きを止め、屋根の上に降ろされた。ここがどこか確認しようにも、体が自分のものではないかのように動かない。

ぼんやりしていれば、気遣わしげな表情を浮かべる朱緋が視界に入った。

「生きてるか？」

「……なんと、か」

返事をするのがやっとの状況に、朱緋が眉を曇らせる。

「それより、俺の、左腕ある？　取れてない？」

「ちゃんとくっついてるさ」

それでも、左肩はかなり酷いことになっているだろう。痛みというよりも、焼き鏝を押しつけられたような熱さがずっと続いている。

「ちょっと我慢しろよ」

腕に巻いていた赤い布で、朱緋は洪采の左肩を縛り上げた。激痛に身をよじるが、痛みは生きている証でもある。しばらくして、洪采は息も絶え絶えに口を開いた。

「……あのさ」

「なんだ？」

「皇帝って、化け物？」

朱緋がいなければ、洪采は確実に死んでいた。この先二度とあの男に会わずに済んだとしても、自分は死ぬまで今日のことを忘れはしないだろう。それほど強烈な体験だった。

「だな。たぶん、俺と兎天が同時にかかっても勝てねぇよ」

「なにそれ……むりだろ。絶対、むり」

よくそんな化け物を相手に、時間を稼ぐなどと大見得を切れたものだ。命があること自体、奇跡であ

るように思える。
「でも、なんで、追って来なかったん、だ？」
「敵を育てたがる癖があるんだよ」
「はぁ？」
痛みを堪えながら、洪采は顔を顰めた。敵を育てるなど、考えたこともない。だが、朱緋の目は真剣だった。
「今回、見逃せば次はもっと強くなって自分に挑んでくる。だから、俺たちはわざと見逃してもらえたのさ」
「なにそれ、腹立つ……」
奥歯を噛み締めると、朱緋の手が洪采の髪を乱暴に掻き混ぜた。
「すぐに隠れ家に戻って手当してやりたいが、夜まで待て」
「おー……」
「死にそうになったら言えよ」
「おー……」
「嘘だ。急所は外れてるから死にはしねぇよ」
朱緋の声を聞きながら、洪采は痛みを紛らわすように現状を整理した。
襲撃は失敗した。
すぐに禁軍の兵士が街中に溢れるだろう。隠れ家に戻るのは危険だ。隠れ家を発見される怖れもある。華安（かあん）に潜伏する仲間たちにとって、厳しい状況になるだろう。
「逃げた奴ら、は」
「槍幽に任せた。あいつなら、上手くやるだろ。勘弁してくれって泣いてたけどな」
確かに、槍幽は逃走慣れしている。
一人でも複数でも、全員を逃がしてくれるだろう。もっとも、かなりの人数が今回の襲撃で失われてしまったが。
体を丸めるようにして目を閉じれば、不意に、共に襲撃を命じられたにもかかわらず、一度として姿を見なかった仲間の顔を思い出した。

――冬雁は無事に逃げられたのだろうか。

今回の襲撃に関与していなかったのならば、その方がいい。死なれるよりましだ。だが、三人の部下すら見なかったことが気にかかる。それに兎天の姿も――。

傍に朱緋の気配を感じながら、洪采はゆっくりと意識を失ったのだった。

合図と同時に、冬雁は動き出した。

確認する場所は三箇所。部下の二人と自身で手分けをして、短時間で捜索を行う作戦である。残りの一人は見張りと、撤退の合図を報せる係だ。

紫宝宮の見取り図は、頭に入っている。

冬雁が向かうのは、紫宝宮と隣接する太冥宮へと続く回廊である。

太冥宮の管理を行っているのは中書省だが、滅多なことでは足を向ける者はいない。所蔵されている書物が、必要性の乏しいものばかりであるからだ。必要はないが、万が一のために保管してある。そういったものばかりが集められているのだという。

隠し部屋や、隠し通路があるとすれば、確かに絶好の場所だ。印がつけてあった他の箇所も、似たような条件が重なっている。

どれが〝当たり〟かは不明だが、任務さえこなせれば、誰が成功させたとしても問題はない。願わくば、兎天に吉報を届けるのが自分であればとは思うが――。

冬雁は無人の太冥宮から侵入すると、まっさきに紫宝宮を目指した。警備の兵士たちは、騒ぎが起こった方へと向かっているようだ。おかげで見咎められることなく、目的の場所へと辿り着くことができた。

一見すればなんの変哲もない回廊であるが、地図上では壁に不自然な空白があった。試しに手を這わせてみれば、少しして指先がわずかな差異を感知す

る。

ゆっくりと押してみれば、梃子のように逆側が開いた。隙間はわずかで、冬雁はそこに指を差し入れる。慎重に引けば、通路のような空間が奥へと続いていることがわかった。

素早く体を滑り込ませれば、湿った空気と黴の匂いが鼻を突いた。隠れ家に漂うそれによく似ている。ただ灯りがないのは不便だ。これでは、通路がどのように続いているのか確認できない。

しかし、ここが当たりならば灯りは逆に目印となってしまう。

迷った末に、冬雁は回廊からの光を頼りに奥へと進んだ。壁に手を触れながら暗闇を行けば、前方にわずかに漏れる灯りに気付いた。

どうやら、ここが兎天が捜していた場所のようだ。特定はできた。あとは内部でどのようなことが行われているのか、確認するだけだ。

己の呼吸すらたてぬように気遣い、冬雁はわずかな隙間に目を凝らした。

室内には蠟燭が並び、複数の男たちが中心から輪を描くように座っていた。床は土間で、よくはわからないが文様が彫られている。手前に座る男が影となり、それがどのようなものであるかまで確認することはできなかった。

なによりも異様だったのが、室内に響く呪文のような言葉だ。

男たちは一心不乱に、同じ言葉を唱え続けている。兎天は〝呪〟が行われていると言っていたが、これがそうなのだろうか。

観察していると、冬雁は室の中央になにかが置かれていることに気付いた。

よくは見えないが、包のようなものだ。もう少し、と冬雁が身を乗り出した時だった。背後に気配を感じると同時に、鈍い痛みが頭を襲う。

「ぐうっ……！」

とっさに懐から匕首を取り出すが、投擲する前に

手首を押さえつけられてしまった。そのまま床に引き倒され、うつ伏せの状態であっという間に抵抗を奪われてしまう。

――失敗した。

冬雁を襲ったのは絶望だ。よりによって、敵に見つかってしまった。

「おっと、舌を噛ませはしないよ」

前方から伸びた手が、冬雁の口に押し込まれる。相手の指ごと噛み千切ろうとするが、顎を摑まれそれまでだった。

「騒ぎを確認しに行ってよかったね。なにが起こってた？」

「宮中で行われている宴が、何者かに襲われたそうです。猩猩緋の仕業だと逃げて来た官吏たちが言っていましたが、真偽のほどはわかりません。詳しい状況は不明ですが、華宴宮の方から、火の手があがっていました」

「ふうん。まあ、こっちに飛び火しなければなんでもいいや。蒸し焼きは嫌だからね」

「距離もありますので、その心配はないでしょう」

あっちは上手くやっているようだ。だが、冬雁はしくじってしまった。

部下たちは冬雁が捕らえられたことを知って、突撃してくるだろうか。逃げてくれればいい。むだと知りつつ、冬雁は心から祈った。

「さて、この子はどうしようか」

「他にも仲間がいるかもしれません。侵入できないよう処置してまいりましょう。最終段階ではありますが、ここを知られるのは厄介です」

「そうだね。まあ、今さら妨害されても意味はないけどね。術はすでに私たちの手を離れている。やるならもう少し早くしなきゃ」

――どういう意味だ？

それとも、兎天ならばわかるだろうか。冬雁は頭上の会話に耳を澄ますが、相手の正体が不明な現状では、意味を理解することは不可能だ。

「殺しますか？」
「んー……誰に知られたか気になるし、とりあえず今は気絶させておいて」
「確かに、厄介ではありますな」
「術が成功しても、こっちが全滅させられちゃったら目も当てられないからねぇ。まあ、陛下に護ってもらえるから平気だけど」
拷問されても口を割らない自信はあるが、悔しさに涙が出た。入り口を開けられないようにしてしまえば、部下たちに望みを託せない。
抵抗しようとするが、首筋に落とされた手刀によって冬雁の意識は刈り取られた。
最後に見たのは、骸骨のように痩せ衰えた男の顔だった――。



春蘭が仲望に連れて行かれた場所は、華宴宮から逃れてきた官吏たちで溢れていた。このまま宮中から逃ればいいものを、外に出た途端に猩猩緋に襲われるのを、警戒しているらしい。

それを横目に、春蘭は仲望に抱えあげられ回廊を移動していた。擦れ違う度に、官吏たちが自分に奇異の目を向けてくる。声をかけて来ないのは、仲望が殺気を放ち続けているからだろう。

回廊を進めば、やがて人気のない場所へと出た。屋根のある渡殿までくれば、喧騒すらも遠ざかる。仲望に訊ねれば、ここは紫宝宮に隣接する太冥宮というところらしい。仲望の仕事場だという。

春蘭にしてみれば複雑な迷路のような廊下を、仲望は迷いなく歩いて行く。

太冥宮を抜けた先には、また別の宮があった。国の中枢が集められていることを考えれば、この規模も当然なのかもしれない。

宮中をぐるりと囲んでいる外壁から出れば、辺りは禁軍の兵士で埋められていた。身振り手振りで指示を出す上官に従い、編成された一団が街へと散って行く。

「猩猩緋は逃げたようだな」

「うむ。して、我々はこれからどうすればいいのだ？」

「とりあえず、春蘭は黄海楼のみんなと合流して――」

仲望が言い終えるよりも先に、遠くから春蘭の名を呼ぶ声が響いた。見れば、離れた場所に煌びやかな一団がいる。

「春蘭！」
駆け寄って来たのは祥琳である。目を真っ赤にしているのは、泣いたからだろう。
「みなは無事か？」
「うん。怪我した人もいるけど、みんな無事だよ」
春蘭は胸を撫で下ろした。猩猩緋の目的は宮中の者たちだが、争いに巻き込まれる危険もある。
祥琳の後ろから、月儀もこちらへとやってきた。
「よかった。鄭の旦那と一緒だったんだね」
「うむ。心配をかけたな」
「まったくだよ。誰に掛け合っても、わからないの一点張りでね。無事でほっとしたよ」
「もしかして、私を待っていたのか？」
「まあ、それもあるんだけどねぇ……」
月儀はやるせなさそうに溜息をついた。そして、兵士たちで混雑する門前に視線を向ける。
「前金は貰ってたけど、残りの支払いがまだなんだよ。契約では宴のあとで手渡されることになってたんだけど……この有様じゃねぇ」
「あとでもよいではないか」
ここはまだ安全とは言い難い。金も大事ではあるが、それで命を落としてしまっては元も子もないだろう。しかし、月儀の表情は優れない。
「せめて担当の官吏に確認を取っておきたいんだよ。じゃないと、あとで請求した際に渡したはずだと白を切られるかもしれないだろ？」
「だが……」
「それに、逃げる際に持ち込んだ道具もほったらかしにして来たからねぇ。回収できればいいんだけど、壊されてたり持ち逃げされてたりするだろうし。これで残りの支払いもなかったら、完璧に大赤字なんだよ」
そう言って、微笑む月儀の顔には妙な迫力があった。確かに、今回の宴は黄海楼の名を広める機会だと、装いから楽器に至るまで一流の品で揃えてきている。名は上がったとしても、支払いがなければ痛

い出費となるだろう。

黄海楼側の事情はわかったが、それでもここで待つことに賛同はできなかった。春蘭が難色を示していると、すぐ隣で溜息の音が聞こえた。

「……わかった。俺があとで掛け合っておこう」

「あら、いいんですか？」

「伝手がないわけでもない。それに、あなた方には春蘭がお世話になっている」

まるで保護者のような言い回しに、春蘭は不服とばかりに仲望を睨んだ。

確かに、春蘭は黄海楼に世話になっているが、どうしてその礼を仲望がするのか。少し気になって視線を斜め下にずらせば、案の定、祥琳が目を輝かせていた。

「だから、この場は引いてもらえないだろうか。おそらく、これから禁軍が本格的に動くことになる。ここにいれば、力ずくで追い立てられてしまうはずだ」

これにはさすがの月儀も真面目な顔で頷いた。急ぎ足で仲間たちの許へ戻ると、矢継ぎ早に指示を飛ばしている。祥琳も慌てたように輪に戻った。

「仲望はどうするのだ？」

「宮中に戻って、情報を集めるつもりだ。なぜ、あそこに兄がいたのか……」

仲望は言葉を濁した。玄楽は猩猩緋である鬼面の人物と行動を共にしていた。単純に考えれば、玄楽もその一味ということになる。四年前の戦で己の死を偽ったのも、猩猩緋に入るためと考えれば納得もいく。

しかし、仲望にしてみれば安易に認めることはできないのだろう。

「そうか……」

「春蘭はどうするつもりだ？」

玄楽には宮中にいるところを見られている。調べればすぐに、春蘭が黄海楼の一員だとわかってしまうだろう。このまま黄海楼に戻れば、間違いなく妓

楼の者たちに迷惑がかかってしまう。
「なんなら、楊秀を頼ってみるか？　あいつなら快く引き受けてくれるはずだ」
「だが、このような事態では――」
迷惑ではないか、と言う前に、春蘭と仲望を兵士の一団が囲むように立ちはだかった。鎧甲から禁軍の兵士であることが見て取れる。仲望と春蘭の真正面に立つ兵士が前に進み出た。
「陛下のご命令です。その娘を渡していただきましょう」
「……なぜだ」
〝陛下〟という言葉に、仲望が呻いた。それに兵士は平坦な口調で告げる。
「後宮に、と」
仲望の腕に、力が籠もった。間近にある顔は、苦々しげに歪められている。
嫌だ、と春蘭が言えば、仲望は共に逃げてくれるかもしれない。だが、それでは皇帝に逆らったとして、禁軍に追われる危険もあった。
「私は平気だ」
「春蘭！」
沸儀の目的はわかった。敵が欲しいのだ。それも、強ければ強いほど好ましい。春蘭は強敵を得るための餌だ。
「今まで世話になったな」
春蘭は仲望の腕から飛び降り、兵士たちの許へと歩み寄った。
その隙間から、真っ青な顔でこちらを見る黄海楼の面々がかいま見えた。祥琳が駆け寄ろうとして、守真に取り押さえられている。
だが、それ以上に背に感じる視線が辛かった。
振り返りはしない。
さんざん巻き込んでおいて申しわけなく思うが、これでいいのだ。
ここで別れておけば、仲望は玄楽と対立することもない。実の兄と、剣を交える辛さを味わわずに済

む。

「……すまない」

春蘭が小声で呟けば、背後で、なにかを地面に叩きつけるような音が響いた。

了

あとがき

華国神記は全四巻の予定でしたが、
担「これ（プロット）長くないですか？」
九「長いですね（汗）」
担「一冊と半くらいありますよ」
という会話の結果、潔く二冊に分けました。その分、色々とエピソードを詰め込めるなと思い、大半を今までダメダメだった仲望に割くことに。己の弱さを痛感した仲望ですが、実は私の実体験を元にしております。

私は学生の頃、球技で唯一、卓球が得意でした。部活も卓球部でした。そして、久し振りに卓球のラケットを手に取ってみたところ……サーブすらまともに打てませんでした。何度ボールをスルーしたことか。スマッシュ？　なにそれ美味しいの？　的な状態に。華麗にプレイする知り合い（仲望的には楊秀や子慮）を眺め、ああ、きっと仲望もこんな気持ちだったんだろうな……と遠い目に。

もっとも、だからといって再び卓球のラケットを握ることはありませんでしたが（笑）。仲望は私と違い、周囲が困惑するくらい頑張っております。

そして話は変わりますが、去年から行われていたキャンペーンへの応募ありがとうございました。抽選じゃなくて全員プレゼントになるんじゃないかと戦々恐々としておりましたが、予想外の応募数でした。このあとがきを書いているあたりに、二冊目の小冊子が当選者様の元へと送られていきました。内容はかなり凝ったものとなっております。短篇だけでなく企画コーナーや裏話、なによりもイラストレーターさんたちによる四コマが必見です。

このような企画ができたのも、読者の皆様のおかげです。これからも皆様の心に残るような物語を作っていきたいと思います。

最後に恒例の懺悔(ざんげ)&御礼を。毎回、次こそは！　と誓いを込めて原稿に挑むのですが、今回もかなり担当さんに面倒をかけてしまいました。最終巻は締切日の早朝に送れるように今から奮闘中です。校正者さんも的確なご指摘ありがとうございます。由貴(ゆき)さんの今回の表紙も、今まで以上にたぎりました。

そして、本書の完成に関わった方々と、本書を手にとった下さった読者の皆様にも、心からのお礼と感謝を。

次回、華国神記最終巻。最後までお付き合いいただければ幸いです。

九条　菜月

ご感想・ご意見をお寄せください。
イラストの投稿も受け付けております。
なお、投稿作品をお送りいただく際には、編集部
(tel:03-3563-3692、e-mail:mail@c-novels.com)
まで、事前に必ずご連絡ください。

C・NOVELS Fantasia

火焔の宴
——華国神記

2012年6月25日　初版発行

著　者　九条菜月
発行者　小林敬和
発行所　中央公論新社
〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
電話　販売 03-3563-1431　編集 03-3563-3692
URL http://www.chuko.co.jp/

ＤＴＰ　ハンズ・ミケ
印　刷　三晃印刷（本文）
大熊整美堂（カバー・表紙）
製　本　小泉製本

©2012 Natsuki KUJO
Published by CHUOKORON-SHINSHA, INC.
Printed in Japan　ISBN978-4-12-501205-6 C0293

定価はカバーに表示してあります。落丁本・乱丁本はお手数ですが小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

●本書の無断複製（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化を行うことは、たとえ個人や家庭内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

第9回 C★NOVELS大賞 募集中！

あなたの作品がC★NOVELSを変える！

みずみずしいキャラクター、
はじけるストーリー、
夢中になれる小説をお待ちしています。

賞

大賞作品には賞金100万円

刊行時には別途当社規定印税をお支払いいたします。

出版

大賞及び優秀作品は当社から出版されます。

第1回	大賞	藤原瑞記	光降る精霊の森
	特別賞	内田響子	聖者の異端書
第2回	大賞	多崎 礼	煌夜祭（こうやさい）
	特別賞	九条菜月	ヴェアヴォルフ　オルデンベルク探偵事務所録
第3回	特別賞	海原育人	ドラゴンキラーあります
	特別賞	篠月美弥	契火（けいか）の末裔（まつえい）
第4回	大賞	夏目 翠	翡翠の封印
	特別賞	木下 祥	マルゴの調停人
	特別賞	天堂里砂	紺碧のサリフィーラ
第5回	大賞	葦原 青	遙かなる虹の大地　架橋技師伝
	特別賞	涼原みなと	赤の円環（トーラス）
第6回	大賞	黒川裕子	四界物語1　金翅のファティオータ
	特別賞	片倉 一	風の島の竜使い
第7回	特別賞	あやめゆう	RINGADAWN〈リンガドン〉　妖精姫と灰色狼
	特別賞	尾白未果	災獣たちの楽土1　雷獅子の守り

応募規定

❶プリントアウトした原稿、❷表紙＋あらすじ、❸エントリーシート、❹テキストデータを同封し、お送りください。

❶プリントアウトした原稿

「原稿」は必ずワープロ原稿で、40字×40行を1枚とし、90枚以上120枚まで。

※プリントアウトには通しナンバーを付け、縦書き、A4普通紙に印字のこと。感熱紙での印字、手書きの原稿はお断りいたします。

❷表紙＋あらすじ（各1枚）

表紙には「作品タイトル」と「ペンネーム」を記し、あらすじは800字以内でご記入ください。

❸エントリーシート

C★NOVELSドットコム[http://www.c-novels.com/]内の「C★NOVELS大賞」ページよりダウンロードし、必要事項を記入のこと。

※❶❷❸は、右肩をダブルクリップで綴じてください。

❹テキストデータ

メディアは、FDまたはCD-ROM。ラベルにペンネーム・本名・作品タイトルを明記すること。必ず「テキスト形式」で、以下のデータを揃えてください。

ⓐ原稿、あらすじ等、❶❷でプリントアウトしたものすべて

ⓑエントリーシートに記入した要素

応募資格

性別、年齢、プロ・アマを問いません。

選考及び発表

C★NOVELSファンタジア編集部で選考を行ない、大賞及び優秀作品を決定。2013年2月中旬に、C★NOVELS公式サイト、メールマガジン、折り込みチラシ等で発表する予定です（一次選考通過者には短い選評をお送りします）。

注意事項

- 複数作品での応募可。ただし、1作品ずつ別送のこと。
- 応募作品は返却しません。選考に関する問い合わせには応じられません。
- 同じ作品の他の小説賞への二重応募は認めません。
- 未発表作品に限ります。ただし、営利を目的とせず運営される個人のウェブサイトやメールマガジン、同人誌等での作品掲載は、未発表とみなし、応募を受け付けます（掲載したサイト名、同人誌名等を明記のこと）。
- 入選作の出版権、映像化権、電子出版権、および二次使用権など、発生する全ての権利は中央公論新社に帰属します。
- ご提供いただいた個人情報は、賞選考に関わる業務以外には使用いたしません。

締切

2012年9月30日（当日消印有効）

あて先

〒104-8320　東京都中央区京橋2-8-7
中央公論新社　『第9回C★NOVELS大賞』係

（2011年9月改訂）

九条菜月の本

翼を継ぐ者

1 契約の紋章
シュルベル王国の小さな農村で育った少女リディア。ある日、村に他領の騎士が乗り込んでくる。リディアは主家の継承者の証を持っていて、自分たちは迎えにきたというのだが……。

2 紋章の騎士
紋章貴族として生きる決意をした
リディアの前に立ちふさがる難問
――戦争か？　和平か？
自身の判断で人々の未来が決まる。
究極の決断を迫られ惑う彼女の
命を狙い、刺客が放たれた！

3 封印の紋章
シュルベル、カーランド両国で
高まる戦争の機運。二つの国に生きる、
二人の少女は、争いを避けるため、
それぞれの戦いに挑む！
一方、国内では教会を巡り、
不穏な動きが加速していた。

4 紋章の覇者
国境で戦の火蓋が切られた。
命を狙われた一連の出来事の裏に
義兄がいたことを知り傷つくリディアだったが、
紋章に秘められた力を使い、起死回生の手に打って出る！
シリーズ完結巻



イラスト／キヲー

九条菜月の本

魂葬屋奇談

空の欠片
平凡を自認する高校生・深波。学校に紛れこむ自分にしか見えない少年の存在に気付いたことで、平凡な人生に別れを告げることに！

淡月の夢
助人となった深波。見知らぬ少女に喧嘩を売られ、ユキからは呼び出され休む暇がない。今回は警察から欠片を盗み出せって……⁉

黄昏の異邦人
三日間だけだからとユキに拝み倒され、魂葬屋見習い・千早の最終試験に駆り出された深波。どうやら彼は訳ありのようで……。

追憶の詩
通り魔が頻発する地区で、使い魔を連れた男女に出会った深波。時雨からは「死にたくなければ近付くな」と警告されるが……。

螺旋の闇
ユキの失った生前の記憶に繋がる日記帳を手にした深波。意を決して、調査を始めようとした矢先に生意気な魂葬屋に捕まって……⁉

蒼天の翼
ユキの記憶をたぐる手がかりを僅差で失った深波。一度は落ち込むが、再び立ち上がったその身に危機が迫る！　シリーズ、完結！



イラスト／如月水

九条菜月の本

オルデンベルク探偵事務所録

ヴェアヴォルフ

20世紀初頭ベルリン。探偵ジークは、長い任務から帰還した途端、人狼の少年エルの世話のみならず、新たな依頼を押し付けられる。そこに見え隠れする人狼の影……。第2回C★NOVELS大賞特別賞受賞作！

ヴァンピーア

不可解な状況で消えた女性の遺体探索依頼が探偵事務所に舞いこむ。探偵フェルが派遣されるが、到着直後から相次ぐ殺人事件。お転婆な少女に邪魔されながらも、地精の協力を得て謎に挑むが——。

ヘクセ 上

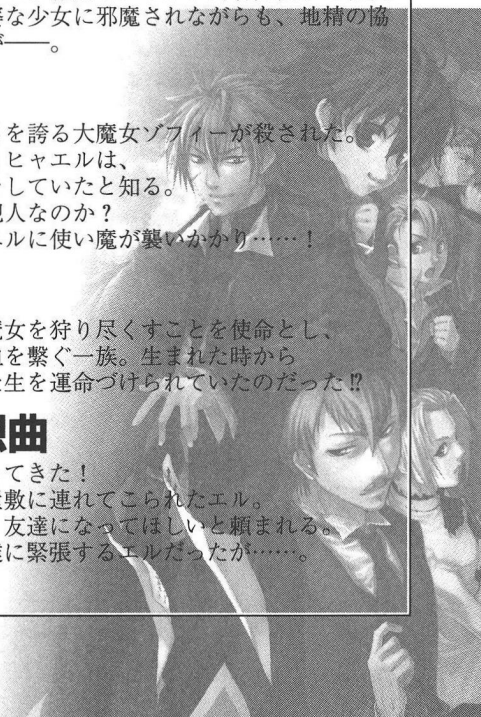
凄艶な美しさと強さを誇る大魔女ゾフィーが殺された。
調査に乗り出したミヒャエルは、
彼女が後継者選びをしていたと知る。
弟子たちの誰かが犯人なのか？
核心に迫るミヒャエルに使い魔が襲いかかり……！

ヘクセ 下

人の世の理を乱す魔女を狩り尽くすことを使命とし、
歴史の陰で連綿と血を繋ぐ一族。生まれた時から
彼らは血にまみれた生を運命づけられていたのだった⁉

エルの幻想曲

エル＆ジークが帰ってきた！
兄貴分クリスにお屋敷に連れてこられたエル。
そこに住む女の子と友達になってほしいと頼まれる。
初めての人間の友達に緊張するエルだったが……。
五篇収録。



イラスト／伊藤明十

9784125012056

ISBN978-4-12-501205-6

C0293 ¥900E

1920293009001

定価 本体900円＋税



疫から皆を救うために取った行動が春蘭に危機をもたらす。真名を奪った男、仲望の兄・玄楽に所在を捕まれてしまったのだ。緊張に満ちた日々を送る春蘭から仲望はなぜか離れようとしない。そして街中でついにふたりは玄楽と邂逅した！　剣をもって兄を迎え撃つ仲望だが……。一方、主を失い苦しい経営が続いていた妓楼に、秋菊こと春蘭の占を条件に宴の依頼がくる。国を貫く陰謀が春蘭を絡め取ろうとしていた！